

2020(令和2)年度

兵庫県

NIE 実践報告書

「教育に新聞を」実践 高等学校編

◇モラルジレンマによる社会的論争課題の探究

～正解(こたえ)のない課題(とい)に挑み続ける人財(たから)の育成～

(神戸市立神港橘高等学校)

◇日々の教育活動への新聞の活用と新聞記事スクラップブックの活用

(兵庫県立柏原高等学校)

◇新聞を身近なものに

(兵庫県立加古川南高等学校)

◇新聞を活用した主体的な学び(2)

(兵庫県立三田西陵高等学校)

◇私たちの街・神戸について記事を書いてみよう

(兵庫県立神戸鈴蘭台高等学校)

◇「学びに向かう力」を育む新聞活用

(兵庫県立明石西高等学校)

◇新聞を活用した「地域や社会を知る」取り組み

(兵庫県立西宮高等学校)

◇現代社会に適応できる力を身につける

(兵庫県立多可高等学校)

◇NIE を活用した課題発見・課題解決能力育成のための探究活動

(兵庫県立神戸高塚高等学校)

◇「総合的な探究の時間」における新聞の活用

～『新聞ワーク』を通してSDGsのテーマに対する理解を深める

(兵庫県立兵庫高等学校)

兵庫県 NIE 推進協議会

コロナ下の NIE ～教育と社会をつなぐ、オンラインで、広がる！！～

会長 秋田久子

コロナの年の実践報告をお届けします。

難しい条件の中で、実践校それぞれが学校の環境を生かし工夫を凝らして展開なされた貴重な記録です。どうぞ皆様の今後の活動に生かしていただけますようお願いしております。

さて、本年度は校長先生はじめ先生方への感謝と敬意を新たにしました一年でした。こんな時に NIE なんてとためらう私どもは、こんな時だからこそしっかり準備をとという先生方の声に励まされました。そして、「この機会に、コロナをテーマに NIE 学習をしたいんだが…」 「家庭に新聞があれば…」 「タブレットをどう使うか…」 という先生をつぶやき、推進協の今後の活動のヒントをいただきました。

本年度はタブレットを用いた NIE 実践が進み、愛徳学園中・高等学校と姫路市立豊富小中学校では、学習支援アプリを用いた公開授業もしていただきました。生徒たちは考えを整理するのも、意見を表明・共有するのも、タブレットに打ち込みます。それには生徒個人がまず読みとり、そして自分の言葉で表現せねばなりません。周囲の雰囲気寄り掛かることはできません。「言語化の必然」です。タブレットで NIE、これは個々の生徒の読解力と思考力、表現力を鍛える格好のツールであることを見せていただきました。

実は、私は最初、教室の静けさに随分戸惑いました。ところが、生徒の集中度の高いこと。この静けさは中身がぎっしり詰まった静かさでした。私は無意識のうちに、話し合いと発表の活気を学習成果と思い込んでいました。が、全体の活気の中では個々の生徒の学習の歩留まりは見えにくくなると気づかされました。両校の公開授業が、タブレットで NIE を展開する意味と効果を示していただきました。

淡路市立志筑小学校を含め、本年度の三つの公開授業は、授業後の情報交換会も Zoom で取り組み、県外の NIE 関係者を含め今までにない範囲でたくさんの方にご参加いただきました。

ところで、実践校のある校長先生が、児童の家を一軒一軒回られたそうです。担任の先生方が作成したプリントを手渡しがてら、家庭での児童の様子を見て回ったとのことでした。頭が下がりました。そして、子供にとって学校は安全・安心の基地でもあるとあらためて思いました。人を孤立から守る…これは対面の持つ大きな力です。

また、神戸市立神港橋高校の学校説明会で中学生に訴求力があつたのは、高野先生の「新聞を使って正解のない課題を考え続ける『モラルジレンマ学習』～with/after コロナ時代の STEM 教育～」であったとうかがいました。子どもたちは自然に with/after コロナにむかっているのですね。

まだしばらくはコロナの影響が続きそうです。NIE も、オンラインやタブレットと対面の、双方の良さを組み合わせた活動を、そして教育と社会をつないで正解のない課題を考える機会を設けていきたいと思えます。どうぞこれからも一緒に、よろしく願いいたします。

<目次>

巻頭言 「コロナ下の NIE ～教育と社会をつなぐ、オンラインで、広がる！！～」	
兵庫県 NIE 推進協議会会長 秋田 久子……………	1
2020 年度兵庫県 NIE 実践指定校	…………… 4
【小学校】	
新聞をさまざまな場面で活用した教育実践 ～新聞から多面的な見方・考え方を養う～	
神戸市立六甲アイランド小学校……………	6
新聞に親しもう ～新聞を活用し、表現できる子の育成～	
洲本市立鳥飼小学校……………	10
主体的、対話的で深い学びを新聞でも	
淡路市立志筑小学校……………	14
新聞って何が書かれているの？ ～読み比べ、「本質は何か？を見抜く」～	
伊丹市立天神川小学校……………	18
【小中学校】	
「つくる」と「つかう」が未来を拓く	
～新しい学校・新しい生活様式における NIE の推進～	
姫路市立豊富小中学校……………	24
【中学校】	
新聞による深い学びの育成	
猪名川町立中谷中学校……………	30
NIE ノートを通して、わかる世界と変わる自分	
西宮市立浜脇中学校……………	34
新聞を活用した実践的授業の取り組み	
～メディアリテラシーを通じて新聞の役割を考える～	
兵庫教育大学附属中学校……………	38

【中学校・高等学校】

デジタルデバイスが普及する中で、日常的に「新聞」を読み、
問題発見解決力と思考力、異文化理解力を身につける

愛徳学園中・高等学校……………44

NIEによるメディアリテラシーと発信力の育成

蒼開中学校・高等学校……………48

【高等学校】

モラルジレンマによる社会的論争課題の探究

～正解(こたえ)のない課題(とい)に挑み続ける人財(たから)の育成～

神戸市立神港橘高等学校……………54

日々の教育活動への新聞の活用と新聞記事スクラップブックの活用

兵庫県立柏原高等学校……………58

新聞を身近なものに

兵庫県立加古川南高等学校……………62

新聞を活用した主体的な学び(2)

兵庫県立三田西陵高等学校……………66

私たちの街・神戸について記事を書いてみよう

兵庫県立神戸鈴蘭台高等学校……………70

「学びに向かう力」を育む新聞活用

兵庫県立明石西高等学校……………74

新聞を活用した「地域や社会を知る」取り組み

兵庫県立西宮高等学校……………78

現代社会に適応できる力を身につける

兵庫県立多可高等学校……………82

NIEを活用した課題発見・課題解決能力育成のための探究活動

兵庫県立神戸高塚高等学校……………86

「総合的な探究の時間」における新聞の活用

～『新聞ワーク』を通してSDGsのテーマに対する理解を深める

兵庫県立兵庫高等学校……………90

【2020 年度兵庫県 NIE 実践指定校】

通常枠 20 校（◆は継続校 ◇は新規校）

〈通常枠〉小学校 4 校

- | | |
|-----------------|------------|
| ◆神戸市立六甲アイランド小学校 | 神戸市東灘区向洋町中 |
| ◆洲本市立鳥飼小学校 | 洲本市五色町鳥飼中 |
| ◆淡路市立志筑小学校 | 淡路市志筑 |
| ◇伊丹市立天神川小学校 | 伊丹市荒牧南 |

〈通常枠〉小中学校 1 校

- | | |
|-------------|----------|
| ◆姫路市立豊富小中学校 | 姫路市豊富町御蔭 |
|-------------|----------|

〈通常枠〉中学校 3 校

- | | |
|--------------|-----------|
| ◆猪名川町立中谷中学校 | 猪名川町原尾鼻ヶ尾 |
| ◇西宮市立浜脇中学校 | 西宮市宮前町 |
| ◇兵庫教育大学附属中学校 | 加東市山国 |

〈通常枠〉中学校・高等学校 2 校

- | | |
|-------------|-----------|
| ◇愛徳学園中・高等学校 | 神戸市垂水区歌敷山 |
| ◇蒼開中学校・高等学校 | 洲本市下加茂 |

〈通常枠〉高等学校 10 校

- | | |
|----------------|-----------------|
| ◆神戸市立神港橘高等学校 | 神戸市兵庫区会下山町 |
| ◆兵庫県立柏原高等学校 | 丹波市柏原町東奥 |
| ◆兵庫県立加古川南高等学校 | 加古川市加古川町友沢 |
| ◆兵庫県立三田西陵高等学校 | 三田市ゆりのき台 |
| ◆兵庫県立神戸鈴蘭台高等学校 | 神戸市北区山田町下谷上中一里山 |
| ◇兵庫県立明石西高等学校 | 明石市二見町西二見 |
| ◇兵庫県立西宮高等学校 | 西宮市上甲東園 |
| ◇兵庫県立多可高等学校 | 多可町中区東山 |
| ◇兵庫県立神戸高塚高等学校 | 神戸市西区美賀多台 |
| ◇兵庫県立兵庫高等学校 | 神戸市長田区寺池町 |

【 小 学 校 】

新聞をさまざまな場面で活用した教育実践

～新聞から多面的な見方・考え方を養う～

神戸市立六甲アイランド小学校 校長 宮地 陽一朗
教頭 酒井 秀幸

1. はじめに

本校は、NIE 実践指定校として新聞を活用した研究を始めて、本年度が2年目である。所在地は神戸市東灘区にある六甲アイランドの東部に位置し、全学年各2学級に337人が学ぶ区内で一番小さな小学校である。

昨年度は5年生が、文章を読み取る力の育成に取り組んだ。本年度は4年生を中心に子ども新聞を使った取り組みを行った。

まず、4年1組の子どもたち26人に家庭での新聞購読についてアンケートを行ったところ、15人が「講読している」と回答した。そのうち、14人が一般紙、1人が子ども新聞であった。

一方、一般紙を購読していると回答した14人のうち、自身が毎日、新聞に目を通すと回答した子どもは1人で、新聞に何が載っているのか知らない子どもがほとんどであった。そこで4年生の総合学習を使い、「新聞と仲良くなろう」というテーマで本年度の活動がスタートした。

2. 実践の内容

①新聞に興味を持つ活動 「新聞ビンゴ」

まず、子どもたちが新聞に興味をもつための導入活動として「新聞ビンゴ」を行った。これは、一般紙に毎日掲載されている事項を9マスのビンゴカードに書き込んだものを作成し、新聞からその事項を見つけ

たら丸を入れていくというものである。



今まで、新聞をじっくりと見たことがない子どもたちにとって、「首相の帰宅時刻」や「明石海峡を通過する大型船の名前と時刻」「記事を書いた記者の名前」といったものが新聞に掲載されていること自体に興味をもち、積極的に新聞を読み取り、見つけるたびに「あった」と歓喜の声があちらこちらで上がった。

活動後の感想には「新聞にこんなことまで書いてあるのかと知り、少し新聞に興味をもったので、家に帰って読んでみたい」とつぶられており、導入としての確かな手ごたえを感じた。また、5年生にも同様に「新聞ビンゴ」を実践してもらったところ、多くの子どもたちが「新聞っておもしろい」「別の新聞でもやってみよう」といった感想がつぶられており、活字離れが著しい子どもたちにとって、新聞の面白さを知ってもらう活動であったと感じている。

・なるほど!と思うことや、そこまで!?と思うことまで、細かいことまで書かれていた。これらを毎日書いている新聞社の人たちを尊敬します。(5年男児)

② 4コマ漫画を使った読み取り活動

子どもたちは漫画が大好きである。そこで、一般紙に掲載されている4コマ漫画を使って読解力を高める活動を行った。

これは4コマ目のせりふを消し、漫画全体からそのせりふを予想して書き込むものである。初めは少し戸惑う子どももいたが、回数を重ねていくうちに慣れてきて、次第にキャラクターの表情やしぐさなどからもせりふを読み取っていけるようになった。



2週間に1枚のペースで行ったが、次回の実施日をカレンダーで確認する子どももいて、4年生の子どもたちにとって楽しく学ぶ活動になったようである。

③ プログラミング入門として活用

一般紙の週末に入っている子ども版に、プログラミング入門としての記事が掲載されている。本校では5年生から本格的にプログラミングの学習を行っているが、その導入段階として、プログラミングの仕組みや考え方を子ども版の記事を使って実践した。

問題部分を切り抜いて人数分コピーし、子どもたちに配ると、ほとんどの子どもたちはそこに書かれているプログラミングのルールの意味をすぐに理解し、ほぼ全員が

正答した。このことは正直、私にとって想定外であったが、同時に子どもたちの中には、日常の生活環境で培われた、プログラミング的思考の基礎があることを実感した。



1回に6枚ずつ、4日間を使って実践したが、だんだん早く解答できるようになり、どの子どもも5年生での本格的なプログラミングの学習に関心が高まってきた。これらのプリントは、クリアファイルにとじており、プログラミングの解説書として来年度に役立ててほしいと願っている。

④ 新聞記事をもとに調べ学習を行う

本年度、子ども新聞を重点的に使おうとした理由として、次の三つが挙げられる。

①漢字にルビが振ってあり、小学生が読みやすい。

②平易な表現で書かれており、記事内容が十分理解できる。

③子ども向けのページが充実しており、時間がたった新聞も十分活用できる。

新聞に興味をもった子どもたちは、自分たちが読める子ども新聞に興味津々、過去の新聞であっても子どもたちの興味関心を引く記事をたくさん見つけることができた。一人に4日分の子ども新聞を配り「興味をもった記事を切り抜いてみよう」と指示す

ると、一斉に新聞を開いて読み始め、好きなスポーツや動物の記事、ことわざなどの言葉の解説、一般紙で報じられた話題を易しく解説した記事などにはさみを入れて、たくさんの切り抜きができた。



次に、切り抜いた記事の内容についてさらに深めるために、本年度から全校生に配備されたPC端末を使って調べ学習を行い、罫線プリントに調べた内容を書きためていった。



それら二つをスクラップブックにレイアウトを考えて貼り、子どもたち一人一人が興味をもって取り組んだ、手ごたえのある1冊に仕上げていった。



⑤新聞記者派遣事業とキャリア教育

昨年同様、1月に5年生対象の新聞記者派遣事業を受けた。この事業は、3学期の社会科「私たちの暮らしと通信」の授業に合わせて行ったものであるが、実際に第一線で働く新聞記者が来校し、新聞記事を作るまでの工程を、実際に使うカメラ等の道具を見せながら説明してくださった。



本年度はコロナ禍のため、例年行われている保護者によるキャリア教育ができなかったため、仕事への想いを語っていただく機会がいただけたことは、本当にありがたかった。5年生の子どもたちも記者の話に熱心に耳を傾けており、日頃の授業と違った時間を過ごすことができた。

⑥社会科の学習資料として活用

神戸市では4年生の社会科副読本を使って「兵庫県の特徴ある地域に住む人々」と

いう単元を学習する。その中で、豊岡市と姫路市を学ぶ時期に合わせて「コウノトリ」と「姫路城」の新聞記事を廊下に掲載し、学びの後にさらに目を向けるきっかけを作った。教科書と違い、新聞記事は世の中の動きをリアルタイムに掲載しており、現状を知る上でとても有効な資料であった。

また社会科の授業前に、地図帳を活用する力の育成をねらいとした「地図あて」という活動を行った。これは前日、当日の新聞で記事になった場所を子どもたちに出題し、地図帳で見つけるというものである。子どもたちの中には、早く見つけるために、社会科がある日の朝にさっと新聞に目を通したり、授業後に帰宅してから新聞を見たりする子どもも出てきており、わずかであるが新聞に興味をもつ子どもが増えていることは嬉しいことである。

3. おわりに

本年度はコロナ禍の影響で、できなかった活動がたくさんあった。その筆頭に挙げられるのが社会見学の中止である。例年であれば、社会見学後に学習新聞づくりを通して見学のまとめを行うのだが、見学中止に伴い、学習新聞の書き方や見出しの工夫といった NIE にふさわしい活動ができなかったことは残念である。一方、昨年度の実践を踏まえてできたことがある。昨年度の原稿に、指定2年目を迎えるにあたり、私見として取り組みのヒントを記述したが、前述の実践事例には、それらの一部に子どもたちが実際に取り組み、確かな手ごたえを感じることができた。中でも子どもたちが作り上げたスクラップブックは、どれもが子どもたちの興味が詰まった1冊

となった。大きな可能性をもった子どもたちが、これまでなじみの薄かった新聞に目を向け、実際に活字を読んで興味ある記事を選択し、それらを深く追求した取り組みこそが、NIEの原点と言えるのではないかと考える。

社会の流れは思っている以上に早く、大きな変化が次々とやってくる時代に、子どもたちは身を置いて生活していかなければならない。さまざまな情報を取捨選択する力、情報を有効かつ正確に活用する力が求められる今、私は自分たちで学びを見つけ、その学びを活かすための新聞活用力も不可欠だと考えている。

最後に、2年間を振り返って確かに言えることは、本校で NIE 実践指定を受けてよかったということである。子どもたちが2年間の実践を通して、読解力の向上や興味関心の広がりにつながったことは言うまでもなく、新学習指導要領に示されている「学びに向かう力」に向けた取り組みができたと思う。一方で、この実践を行うにあたり、多くの人に関わってくれたことを忘れてはならないと実感した2年間でもあった。兵庫県 NIE 事務局の方々はもちろん、雨が降りそうな時にビニル袋に入れて、専用ポストに配達してくださった新聞販売店の方々、一緒に関わった本校職員、毎朝、職員室に新聞を取りに来て、スカイルームという新聞設置場所に運んでくれた子どもたち、そして目を輝かせて新聞記事を読む多くの子どもたち。私一人の力で実践できたのではないことを添えて、本実践のまとめとする。

新聞に親しもう

～新聞を活用し、表現できる子の育成～

洲本市立鳥飼小学校 校長 木田 留美
教諭 那木 英統

1. はじめに

本校は、全児童 90 人の小規模校である。学校教育目標「自ら学びつづける子の育成 ～郷育・協育・響育～」を掲げ、日々の教育活動にあたっている。教育活動の取り組みとして昨年度より、NIE を推進している。本年度も高学年を中心に、各教科の学習の中に新聞作成を取り入れたり、朝のチャレンジタイムの時間に、NIE ワークシートを活用したりして、文章力や表現力を高めることを実践した。

2. 実践内容について

○NIE コーナーの設置

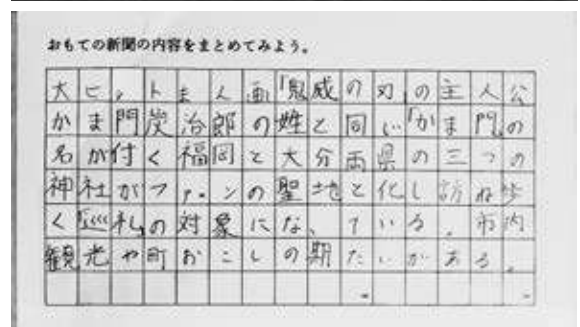
本校では、子どもたちに身近に新聞を感じてもらうため、気軽に手に取ってもらおうと、昨年度から職員室前に NIE コーナーを設置している。本年度は、新型コロナウイルスなど大きなニュースが続いたこともあり、子どもたちの関心も高かった。また、新聞に鳥飼小学校の児童が取り上げられることもあり、休み時間や放課後を利用して、新聞を読みに来る児童もいた。



○朝の「チャレンジタイム」での取り組み

本校は始業前の朝の 15 分を「チャレンジタイム」と位置づけ、学習に取り組んでいる。月曜日と金曜日は算数、火曜日は国語（漢字

等）、水曜日は国語（作文やまとめ）、木曜日は読書の時間としている。昨年度の全国学力学習状況調査の結果を受け、正確に読み取る力、書く力が弱いことが明らかになった。そこで、水曜日の文章まとめの時間に 5・6 年生では、神戸新聞 NIE の HP に上がっているワークシートを活用して、まとめチャレンジを行った。ワークシートの新聞記事を読み、その問題に答えるだけでなく、その記事の内容を 50 字～100 字程度にまとめるものである。ワークシートを活用することで、記事のポイントがつかめ、まとめるときのキーワードも見つけやすくなり、取り組みやすくなった。また、新聞の中のリード文をうまく活用することにより、まとめやすいことに気づいている児童もいた。



○産経新聞社記者さんによる出前授業



10月29日、産経新聞社の勝田康三記者に来ていただいて、6年生を対象に授業をしていただいた。授業は、将棋の藤井聡太さんが王位を獲得した記事を用いて、「新聞における表現の工夫について」をテーマに行った。新聞記事から「だれが・いつ・どこで・なにを・どうしたか」の文章の基本構成の要素を抜き出し、「記録」をキーワードにして、短い文章にまとめた。また、藤井二冠に聞いてみたいことなども考え、発信するときの表現の工夫について、学ぶことができた。



○各学年・委員会等での取り組み

(1) 4年生

国語の時間に、「新聞を作ろう」の学習を以下の手順で行い、総合的な学習の時間などで新聞作りに1年を通して取り組んだ。

ア どんな新聞を作るかを決めよう。

新聞を使ってその特徴について調べた。新聞名と発行日、発行者が書かれていること、いくつもの記事が集まってできていること、記事ごとに、内容がひと目で分かるような見

出しがついていること、記事と合わせて、写真などが使われていることなどを確認した。普段から新聞に触れている児童が少なく、実際の新聞を使った学習は、新鮮なものとなった。

イ どんな新聞を作るかを話し合おう。

総合的な学習の時間ともタイアップし、社会見学や福祉学習で学習したことを新聞にまとめることにした。

ウ 記事の下書きをし、わりつけや写真の効果的な使い方を考えよう。

実際の新聞では、学習していない漢字が多くあったり、内容が難しすぎたりして児童にとってはハードルが高く感じられる。そこで、まずは、ノート1ページ分を使い、新聞記事を書く練習を何度もした。記事を書く練習が十分できたら、伝えたい内容によって使われている写真が決められることを実際の新聞を通して理解することができた。

エ 新聞を読んで、感想を伝え合おう。

教室に出来上がった新聞を掲示し、お互いに内容や書き方について感想を伝え合った。見出しの付け方やわりつけなど、実際の新聞を参考にしながら読み手に伝わる新聞作りを追求した。また校内の学年掲示板に貼ったり、全校集会で発表をしたりして交流を深めた。学習したことが全校生に伝わったことで、児童の新聞作りに対する意欲がより高まった。

新聞作りを通して児童の新聞に対する興味や関心が高まった。家庭でも自ら新聞を読み、自主学習で記事の内容をまとめてくる児童も出てきた。また長期休みの思い出や自分の好きなことを新聞にまとめ発信しようとする児童も増え、新聞が児童の身近なものとなった。2021年度も引き続き新聞を活用した学習を進めていきたい。



(2) 5年生

国語で「新聞を読み比べよう」の学習を行った。この単元で、新聞記事では、書き手は伝えたいメッセージに合わせて、使う情報を選ぶことを学んだ。また、メッセージが効果的に伝わるように、記事に見出しをつけたり写真を配置したりすることもわかった。同じ出来事を伝える二つの新聞記事を読み比べることで、それぞれの記事の伝えたいメッセージが異なることに気づき、新聞に対する興味も高まった。

「北淡震災記念公園見学」「米作り体験」「自然学校」それぞれの自分たちの体験や学びを新聞にまとめた。「伝える」をテーマに、伝える相手や伝えたいメッセージを明確にして取り組んだ。



(3) 6年生

ア 防災ポスターを作ろう

国語の「防災ポスターを作ろう」の単元を新聞にアレンジして、取り組んだ。表題や見出しを書き、記事と図表のレイアウトを考え

て、読み手に分かりやすい新聞づくりを心掛けた。また、一人一人からそれぞれの新聞にコメントを書き、より良くなるようアドバイスを出し合うことができた。



イ 修学旅行新聞を作ろう

10月に実施した修学旅行についても、行動した班で新聞づくりを行った。奈良や京都で見学した史跡のことやホテルや買い物などの楽しかった体験をまとめた。作成にあたっては、リード文をつけたり、写真に注釈をつけたりして、読む人が読みやすくなるよう心がけた。





(4) 環境委員会

職員室前に掲示している小学生新聞を毎朝、環境委員会が常時活動として交換している。また、学期末には、環境委員会の児童が気になった記事を選び、児童朝会の際に全校児童にクイズを出題した。新聞が掲示されていることのお知らせとともに、まだ読むことの難しい低学年にも親しんでもらおうとしている。事後、クイズは職員室前に掲示し、あらためて子どもたちが見ることができるようにしている。



(5) 児童会活動

本年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から集会行事が縮小されている。そのため、児童会として全校生に伝えたいことを定期的に新聞にまとめ、廊下に張り出すようにした。



(6) 地域防災力強化事業

本校では11月のオープンスクール時に、地域防災力強化事業として、防災学習を行っている。本年度、本校教員のEARTH隊員が防災学習を行った。その中で、新聞のできる非常時に役立つ小物づくりとして、小物入れとスリッパを作成した。



新聞を防災グッズとして活用することで、普段はあまり読む機会のない低学年の子どもたちも、楽しく新聞に親しむことができた。また、高学年が低学年の手助けをすることができ、より一体感が深まった活動であった。

3. おわりに

昨年度からの取り組みを通して、身近に新聞を感じることがなかった児童たちが、新聞に触れ、興味を持ち始めていた。ワークシートでも、児童が興味を持ちやすいことを題材に選ぶことによって、読む意欲も高められていった。

また、本年度重点課題として取り組んだ「まとめる」活動は、新聞作成だけでなく、スピーチやグループ発表の原稿づくりにも役立っている。

今後は、発信力をさらに伸ばしていくためにもまとめることに加えて、話すことにも取り組みを深めていきたい。

主体的、対話的で深い学びを新聞でも

淡路市立志筑小学校 校長 砂川 朗
主幹教諭 南 志乃婦

1. はじめに

本校は、全校児童 398 人で、淡路市では一番大きい学校である。淡路市の商業の中心地であり、教育に対する保護者の関心は高い。スマホやタブレットの普及によるものなのか、家庭で新聞を定期購読している家庭は全体の 3 分の 2 程度である。

NIE 実践校として 2 年目となる本年度は、5・6 年生を中心に取り組みを進めた。5 年生は 64 人、6 年生は 67 人で、明るく活発な児童が多い。スピーチタイムの取り組みなどから、新聞などでニュースを探してみんなに伝えるなど、新聞に触れる機会は増えてはきているが、まだまだ十分とは言えない。実践校 2 年目となる本年度は、新聞づくりや新聞のコラムを定期的に読むことを通して「主体的、対話的で深い学び」にどのように迫っていけるかを考えて取り組みを進めた。

新聞は、図書室に置いて誰でも手に取れるようにし、

1 週間たったら 5 年生や 6 年生の教室前に置くようにした。その新聞



を使ってさまざまな活動を行った。

2. 主な実践

(1) 新聞で地域に PR (総合的な学習)

6 年生の総合的な学習は、「淡路の伝統芸能を発信しよう」をテーマに進めた。昭和初期まで地域で活躍していた「淡路源之丞座」について知ることをきっかけに、地域の人に淡路人形浄瑠璃の魅力を知ってほしい、人形浄瑠璃で地域を元気にしたいという願いを持って取り組んだ。この中で、二つの目標を設定した。一つは、人形浄瑠璃を自分たちで上演することにより、魅力を伝えることである。もう一つは、人形浄瑠璃の歴史など自分たちで課題を設定し、情報収集や分析を行い地域に発信していくことである。この二つ目の目標を達成するための方法の一つとして新聞づくりを取り入れた。

さて、新聞づくりといっても、具体的にどうすれば新聞ができるのかわからない。それまでの学習から新聞には見出しが必要なことは知っていたが、見出しの付け方は知らない。そんな状況であったため、記者派遣事業を通じて実際に新聞記事の書き方や見出しの付け方を学ぶことにした。

<新聞記者派遣事業>

10 月上旬に、読売新聞洲本支局の加藤律郎記者に、新聞記者の仕事内容や記事の書き方、見出しの付け方などを教えていた

だいた。

子どもたちは、新聞記者の仕事や見出しの付け方を教えていただいた後、実際に見出しを付ける活動を行った。紹介された新聞記事から見出しを考え、実際に付けられた見出しと比較してみた。実際の見出しに近い内容の子もいれば、独創的な見出しを



考えた子もいて、それぞれ楽しく見出しの付け方を学ぶことができた。

考えた見出しを発表した子は、新聞記者からのコメントにうれしそうな様子だった。

<実際に見出しを考える - 公開授業 - >

10月半ばに、NIE実践校公開授業を行った。公開授業の中で、実際に見出しを考えるという活動を取り入れた。それぞれのテーマごとに、一番伝えたいことを考え、

短い言葉で主見出しと脇見出しと



して表現した。そして、テーマごとに考えた見出しを黒板に並べて、お互いに評価し合った。子どもたちは、「魅力の秘密は演目にあり」などと書いた紙を見ながら、「読ませる工夫があって良い」などと評価していた。

<新聞づくり>

1月下旬の人形浄瑠璃発表会に向けて、

授業で作った見出しを参考に壁新聞を作っ



た。グループで協力して、主見出し、脇見出しを吟味し、本文を考え、レイアウトを工夫して味のある新聞が完成した。そして、発表会会場であるしづかホールに展示した。誰にでも見ていただけるように、ガラス窓に外向きに展示したところ、多くの方に診てもらうことができた。グループによって新聞の大きさはまちまちだったが、どのグループも一番に伝えたい内容を載せることができた。参観者からは、「子どもたちだけで、よくこれだけ調べられたね」「わかりやすくまとめられていてよかったよ」などの感想を得られ、満足そうであった。

(2) まわしよみ新聞

月に1回、まわしよみ新聞の活動を行った。図書室から届いた新聞を切り抜き、班でなぜこの記事を選んだのか、そこからどのようなことを学んだのかなど意見を交流した。最初は新聞の構成もわからず、一つの記事を探すのに時間がかかっていた子どもたちであったが、慣れるにつれどこにどのような記事が書いてあるかわかるようになり、記事を選ぶ時間が短縮された。また、同じテーマの記事を探す子もいて、新聞のいろいろな読み方を探っていた。

それぞれが記事を選んだ後は、模造紙に選んだ新聞を貼り、コメントを書いた。対話しながらレイアウトを考え、どのような

コメントを書くか相談する活動を通して、同じ記事でもとらえ方が違うこともあることがわかり、視野を広げることができた。また、普段目にするものがない難しい言葉にも接することができ、語彙(ごい)力の向上にもつな



がったのではないかと感じている。班ごとの作品は廊下に掲示し、

みんなで読み合った。廊下を通る下級生も立ち止まって読む様子が見られ、普段触れることのない新聞記事とそれに対するコメントを読むことで、新聞をより身近に感じられるようになったのではないかと思った。

(3) 新聞タイム

5年生では、新聞タイムとして、週に2回、火曜日と木曜日に子ども新聞のコラムを子どもたちに紹介し、その内容について考える活



動を行った。コラムには、その時々为社会情勢を考える内容が書かれていることが多く、子どもたちにわかりやすく書かれていたため、自分たちの生活に近づけたり、教科の学習と関連付けたりできた。具体的には、なるほどと思ったことや気付いたことを書きだし、一番大切なところを見つけて

要約した。そして、書いた内容を朝のスピーチタイムに活用した。活動を定期的に行うことで、子どもたちの語彙数が増え、他の教科でもその力を発揮することができた。

(4) その他

○ミニ新聞づくり

社会科の学習を、一人一人がミニ新聞にまとめ、学級全体に紹介した。

<淡路市新聞>

地方自治の学習のまとめとして、淡路市の取り組みをまとめた。コミュニティバスの紹介や学童保育についての考察など、自分たちの住む淡路市のさまざまな取り組みについてまとめることで、よりよい淡路市にするために自分たちにできることについて考えることができた。そして、それを紹介することで、自分と同じ意見、違う意見を知ることができ、より深く考えるきっかけになった。

<歴史新聞>

時代ごとに学習したことを新聞にまとめた。自分たちで資料を取捨選択したり、レイアウトを工夫したりすることで、主体的に活動することができ、学習内容をより深く理解することができた。



<日本と関わりの深い国新聞>

社会の教科書に出てくる国々について、さらに深く調べ、調べたことを新聞にまとめた。図や写真を効果的に使ったり、カラーペンでわかり



やすく表現したりして、わかりやすく伝える工夫ができた。ペアで新聞づくりにチャレンジすることで、協力することの大切さを学んだ。

○気になる新聞記事を紹介

新聞の中から、気になる記事を選び、その記事が気になる理由と、そこからわかったことや気付いたことをワークシートにまとめた。子どもたちは、いくつか気になる記事からどれを選ぼうか真剣に読み比べていた。ワークシートに記入する際には、わかりやすく伝えるために言葉を吟味したり、わからない漢字を辞書で調べたりするなど、



読み手を意識して活動することができた。

3. 成果と課題

(1) 成果

「主体的、対話的で深い学びを新聞でも」というテーマで取り組んだ本年度。子どもたちは、進んで活動に取り組む中で語彙(ごい)力を高めていった。読み方がわか

らない言葉を先生に聞いたり、新聞で使われる言葉の意味を自分で調べたりして、新しい言葉に敏感に反応するとともに、新しく獲得した言葉を生活の中で使おうとする姿勢が見られた。主体的に活動することで、知識・技能を習得し主体的な学びに向かう態度を培うことができたと考える。

また、グループでの活動やクラス全体での対話を通して、自分と違う考えに触れたり、議論の中でよりよい考えにたどり着いたりすることができた。特に、新聞づくりの活動では、必要な内容を取捨選択し、表現を工夫するなど、思考・判断・表現という観点で力をつけることができ、学びを深めることができた。グループで協力して新聞を作ることで、達成感を得られるとともに、さまざまな人から高い評価をいただいたことで、自己肯定感の高まりを感じることができた。

(2) 課題

さまざまな活動を通して新聞の魅力に気付いた子どもたちではあるが、家庭で積極的に新聞を読んで新たな知識を得ようとするまでには至っていないのが現状である。インターネットやテレビからもニュースが得られる現代であるからこそ、新聞の魅力をもっともっと伝えていく必要があると考える。

また、図書室での新聞の閲覧の方法も、低学年にもわかるように子ども新聞を目立たせるなどの工夫が必要であった。小さいころから新聞に触れることで、より新聞を身近に感じるができるのではないかと思う。

新聞って何が書かれているの？

～読み比べ、「本質は何か？を見抜く」～

伊丹市立天神川小学校 校長 津田 康子
教頭 竹安 雄一

1. はじめに

本校は、伊丹の北部に位置し、全校生約 724 人の伊丹市では中規模の学校である。NIE 実践指定校として、新聞を活用した学習を始めて 1 年目である。

新型コロナウイルスによる一斉休校から始まった 1 年だった。前代未聞の出来事からスタートした 1 年がもう年度末の 3 月である。例年通りにできないことばかりで、慌ただしく毎日が過ぎ去っていった。未知のウイルスということもあり、感染症対策など、配達された新聞をどのように扱うかも苦心した。新聞に触れる前後には手洗いを徹底するなど、工夫しながら形で新聞に慣れ親しんだ 1 年となった。

2. 実践内容について

○休校中の取り組み



先の見えなかった休校期間。本校は、一軒一軒への課題配布を計 5 回行った。漢字学習や計算問題の課題が多くなる中、もっと子どもたちが楽しく自主的に取り組めるような課題を用意できないものか考えた。そこで、案内がきていた新聞を活用した課題を取り上げることにした。読売新聞ワークシート（小学生版）を配布できないかと考え、すぐに読売新聞東京本社の教育ネットワーク事務局に問い合わせ、活用できることになった。

「兵庫 NIE ニュース第 63 号」（県 NIE 推進協発行）から

伊丹市立天神川小学校教諭

竹安雄一

新型コロナウイルスで休校が長引き、子どもたちの学力向上をどう図ればいいのか。家庭学習に頼ることが多く、各家庭の協力にとても感謝しています。そして、学校は何かができるのかを日々模索してきました。伊丹市立天神川小学校が 4～5 月の休校中に行った、各家庭への課題プリントのボスティングは計 5 回に及びました。アナログな作業で、たくさんプリントを印刷し封筒に入れ、子どもたちの顔を思い浮かべながら、こんなにも回ったことがないというくらい一軒一軒を回りました。算数や国語の宿題だけでなく、何か強く興味をもてる課題はないかと模索しているとき、読売新聞ワークシート（小学生版）が目にとまりました。各新聞社が作成しているワークシートは家庭での学習にとても役立つと感じています。読売新聞東京本社の教育ネットワーク事務局に問い合わせたところ、ワークシートを印刷して配布することを快

新聞のワークシートを使って

読売新聞社から提供されたワークシートは、5 月 13 日付の「明石・天文科学館 紙芝居や体操配信」です。明石市立天文科学館が、同館の人気キャラクター「軌道軍団シゴセクジャー」による紙芝居や簡単にできる体操の動画「おうちで天文科学館をつくり、投稿サイト「YouTube」で配信している」という内容で、兵庫県の話題だったのも大きな理由です。ワークシートの「あなたは、手を洗っていますか」という質問に、ある子どもは「ちゃんとしっかり 20 秒洗っています」と回答していました。新聞には、リアルタイムで必要な情報が掲載されていることに気づいてほしい。こんな時期でも面白いニュースも載っていることも知ってほしい。そんな思いがありました。まだまだ新型コロナウイルスの感染は心配ですが、「みんな待っているよ」とを言葉に、つながりを大切にしたい取り組みを進めています。



子どもたちは意欲的に新聞を活用した課題に取り組み、新聞にはリアルタイムで必要なことが掲載されているのに気付くことができた。コロナ禍で、我慢しなければならないことも多く、暗い話を目にするのがたくさんあるが、そのような中でも明るいニュースがあることも知ってほしい。学校の再開に向けて、「みんな待っているよ」を合言葉に、つながりを大切にしたい取り組みを進めた。

○ NIE コーナーの設置



学校再開後、校内で人通りの多い渡り廊下に新聞置き場を設置した。新聞係が毎日置きに行った。新聞紹介がされたあと、興味のある記事などがあつたときは休み時間に見に来ていた。常に一定の場所に最新の新聞があることで身近に新聞を感じることができた。

○ 毎日 1 分の新聞紹介（3 年生）



毎日の朝の会で、新聞紹介を行った。新聞を比べて読むことで、それぞれの新聞で微妙に書きぶりが違うことに気がつくことができた。教師が気になったところをかいつまんで紹介した。難しい用語は、子どもたちにも分かるようになるべく分かりやすく説明した。新型コロナウイルス関連のことやアメリカ大統領選挙のこと、環境問題のことなど、世界のありとあらゆることが新聞には載っているということが分かった。

そんな中、子どもたちの中から「自分たちで新聞紹介をしたいです!」という声が上がった。その日から、子どもたちが順番で新聞紹介を行うようになった。まだ習っていない漢字も出てくるので、その時は自分達で調べたり、分かる児童で教え合っていたりした。基本的には、



新聞社名と、各一面の記事の大見出しや小見出しを読み上げ、最後には「気になる記事があれば、また渡り廊下の新聞コーナーに読みに行ってください」と締めくくった。



左が新聞紹介の当番表である。これは、カレンダー一枠から子どもたちが自分で作ったものである。新聞を紹介したい希望者で順番に名前を書き入れ、当日をとっても楽しみにしていた。興味深かったのは、漢字が苦手な児童であっても「紹介したい!」という意欲が高かったことである。読みたいから文字を覚えたいという意欲をこれからも大切にしたいと思った。

○記者派遣事業

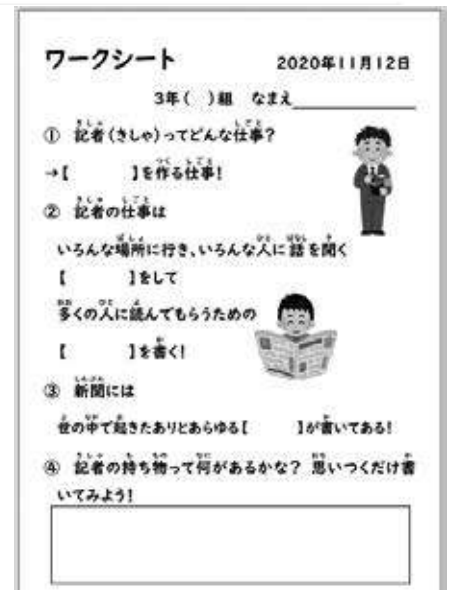


「鬼滅の刃」が大人気!



2020年11月12日、共同通信社より記者の木村直登さんをお迎えし、「記者ってどんな仕事？」をテーマに学習した。普段は聞けないような話に子どもたちは興味津々であった。「記者のかばんには何が入っているか?」という質問では、さまざまな答えが出た。話の後、数人の児童はインタビューも受けた。「よく調べて間違わないように記事にするのが大変そうだった」や、「身近な話題もたくさん載っている新聞にとっても興味を持った」などとインタビューに答えていて、次の日には新聞に掲載された。掲載の早さに、子どもたちはとても驚いていた。

情報を発信している最前線の方から直接話を聞くことができ、貴重な体験ができた。自分たちが新聞を作成するにあたって大いに参考になった。



(2020年11月13日付 神戸新聞阪神版)

3年4組、新聞デビュー!



木村記者の質問に手を挙げる児童
伊丹市荒牧南3

○「ことまど」を使った新聞作り



新聞作りのレイアウト作成を自動化し、子どもたちが本格的な新聞作りを体験できるクラウド型アプリ「ことまど」を活用した授業を行った。本年度末に導入された1人1台のタブレット端末も活用しながら熱心に新聞作りに励んだ。



神戸新聞の「ことまど新聞コンクール」では何人もの児童が賞を受賞した。受賞時には、一人ひとりに受賞理由を、また、どうすればもっとよくなるかを教えていただきとても貴重な時間となった。

神戸新聞社・武藤さんのアドバイス

子どもの感想



- ・リード文が工夫されていました。
- ・本文が読みたくなる見出しですね。
- ・「すごい」という言葉を使わないで伝える工夫をしてみるといいですよ。
- ・体験したことや細かい観察を入れていたね。

- ・文章に合った写真を選ぶのに苦労しました。
- ・少し時間をおいてからもう一度読み直してみました。
- ・見出しを読むだけで伝わるようにしたかったのでむずかしかった。

3. おわりに

激動の1年がようやく終わりを迎える。実践指定校として、はじめての取り組みは、まずは新聞を「読んでみる」、「使ってみる」、「書いてみる」三密ならぬ、「三みる」で取り組んでみた。研究テーマであった、『新聞って何が書かれているの？～読み比べ、「本質は何か？」を見抜く～』の本質を見抜くまでには至ることができなかった。「要は、何を言いたいのか？」「この新聞は、今日のこの1面で何を伝えたいのか？」など、子どもたちが興味を持ち、内容にせまろうとする姿勢が出てきたことは大きな成果と言える。2020年、本校は実践指定校2年目を迎えるが、できることを一つひとつ取り組んでいきたい。

MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing, spanning the width of the page.

【 小 中 学 校 】

「つくる」と「つかう」が未来を拓く ～新しい学校・新しい生活様式におけるNIEの推進～

姫路市立豊富小中学校 校長 山下 雅道
教諭 川村 かおり
教諭 井上 尚佳

1 はじめに

VUCA (Volatility: 変動性、Uncertainty: 不確実性、Complexity: 複雑性、Ambiguity: あいまい性)と呼ばれる時代の中、新型コロナウイルス感染症への対応により、私たちを取り巻く社会環境の複雑性がいっそう増し、将来についての予測が困難な状況が続いている。また、生活様式や行動様式の劇的な変化は私たちの消費行動にも大きな影響を与え、あふれる情報を取捨選択するとともに、その真偽を見極め、適切に意思決定する力がますます必要になっている。このような状況は、メディアとして、そして情報インフラとしての新聞の意義・役割を見つめ直すきっかけとなった。

本稿では、新しい学校・新しい生活様式の中で進めてきた2020年度の実践について、イメージキャラクター「とよぼん」とともに紹介していきたいと思う。



とよぼん
豊富小中学校イメージキャラクター。2016年、豊富中学校生徒会の発案により誕生。義務教育学校開校に際しおでこのマークがTになった。学校図書館と給食が大好き。

2 本校におけるNIEの位置づけ

姫路市豊富(とよとみ)町は姫路市の北東部に位置する里山と里川に囲まれた自然の豊かな地域である。本校は、令和2年4月1日、隣接する豊富小学校と豊富中学校が一つになり、9年制の義務教育学校として開校した。

本校の前身である姫路市立豊富小学校・中学校においては、2018年度から「調べる力」

の育成を目指して学校図書館やICT環境を活用し、情報活用能力を育成する取り組みを進めてきた。また、2019年度からは日本新聞協会の指定を受け、「新聞をつくるとつかう」をテーマとした実践をスタートした。

開校に関する基本方針を記載した開校要覧にもNIEを明記。義務教育学校としての特色ある教育活動としてNIEを推進している。



【写真1：記者派遣によるオンラインまわしよみ新聞の様子】

NIE(エヌ・アイ・イー)

Newspaper In Education(教育に新聞を)の略。新聞記事を学習で活用したり、体験や学んだことを新聞にまとめて表現したりするなど、新聞を「つかう」「つくる」活動を通して情報活用能力を育みます。

豊富小・中学校は、学校図書館の魅力化・機能向上に重点的に取り組んでいます。また、2019年度・2020年度の2年間、兵庫県NIE推進協議会の指定するNIE実践推進校としての取組を進めています。実践に際しては、ICTの活用や体験活動、調べ学習等と連動した活動を工夫しています。

今後も豊富ならではの特色ある教育活動として、NIEを推進していきます。

新聞は社会への扉。家庭・地域社会の皆さま、一緒にNIEを楽しみましょう!



【資料1：開校要覧記載内容例】



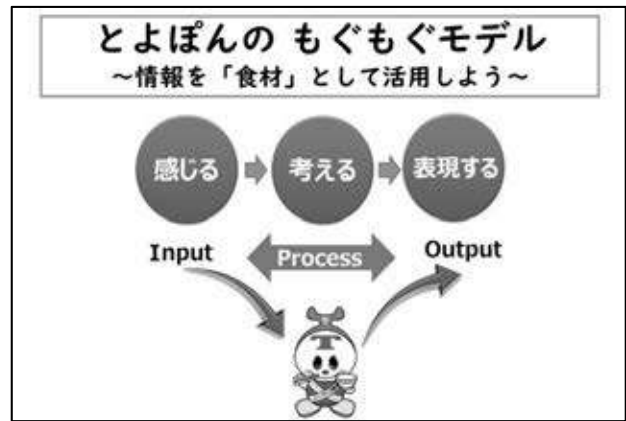
【資料 2：学校グランドデザイン】

2月下旬からの臨時休業、そして分散登校期間を経て6月15日から学校の教育活動が再開。9月14日には、1人1台のコンピュータ整備も完了しました。情報インフラであるICT、新聞、そして学校図書館を活用し、新しい生活様式の中で新しいNIEの形を模索していきました。



3 「つくる」と「つかう」を通して

「情報」とは例えるなら食材であり、私たちが生きていく上でかけがえのない栄養素が詰まったものであると考えている。この「情報」のインプットとアウトプットのプロセスを往還する中で、思考が深まり知識を構造化することができる。このイメージをまとめたものが次の「もぐもぐモデル」である。



【資料 3：とよぼんのもぐもぐモデル】

新聞を「つくる」と「つかう」は、まさに新聞というメディアの情報を調理することであり、どのような料理に仕上げるかは教科や学年、教員の学習デザインにより多種多様である。教員の提示・配付資料として新聞を活用することも大切であるが、何より重要なのは子どもたち自身が情報を「調理」し、他者に提供する（伝える）経験を積み重ねていくことである。

以下、いくつかの場面を紹介したい。



【写真 2：掲示環境（校内各所）】





【写真3：掲示環境（学校図書館）】



【写真7：ICTを活用した多紙読み比べ】



【写真4：1人1台端末を活用した学習場面イメージ】



【写真8：掲示資料として活用】



【写真5：新聞スリッパづくり】



【写真9：ワークシート資料として活用】



【写真6：本の福袋づくり】

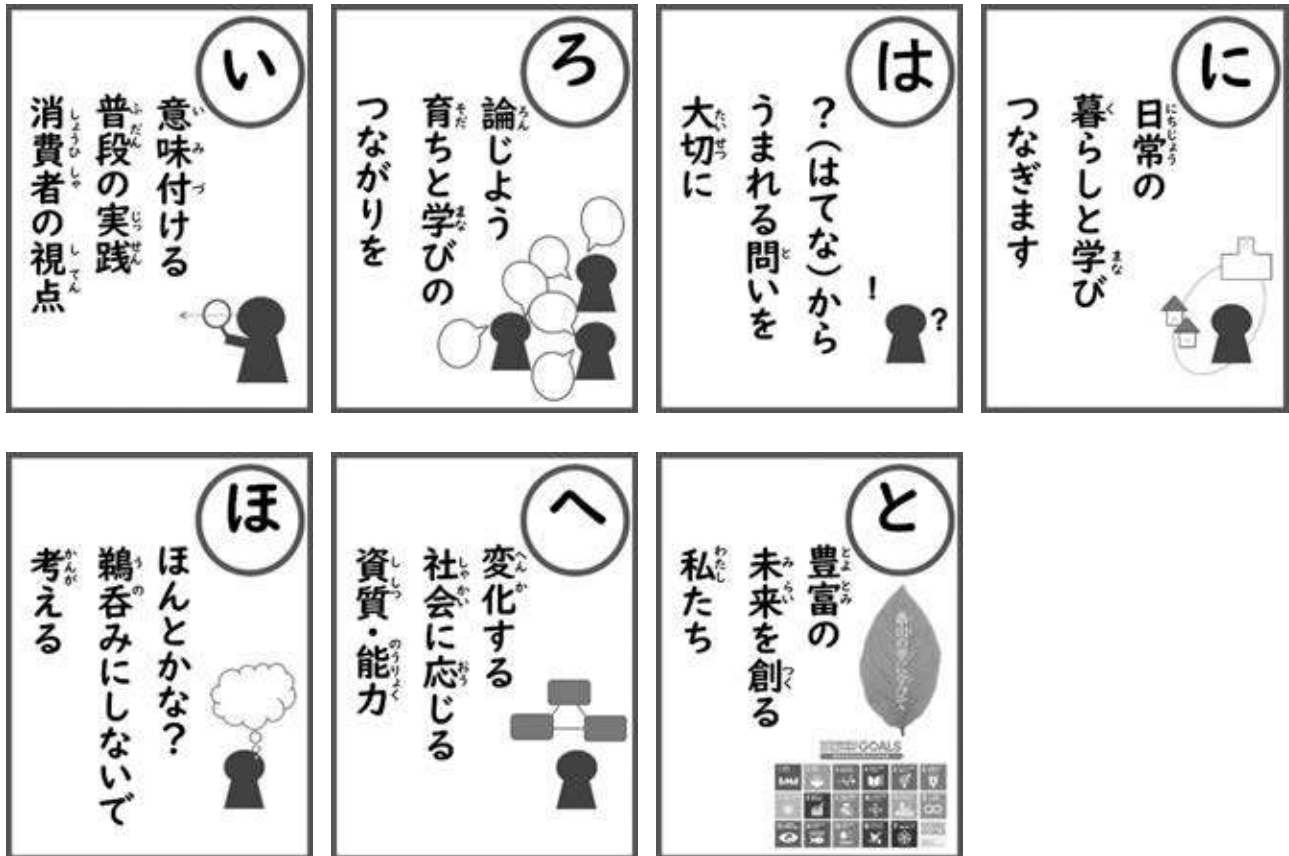


【写真10：新聞アプリ「ことまど」活用例】

4 おわりに

この2年間、特にコロナウイルス感染症の対策として教育活動が制限される中、オンライン記者派遣や実践発表会の開催など、兵庫県 NIE 推進協議会（推進協）の皆様には多大なる支援をいただいた。また、推進協のホームページに掲載の豊富な情報は、実践を進める上で非常に参考になった。

実践指定校としての期間は 2020 年度で終えるが、私たちの取り組みはこれからがスタートである。コロナの時代を禍とせず実りある「果」とするために。これからも一歩ずつ歩んでいきたい。



【写真11：学校図書館と NIE】

NIE の真ん中には「愛」があるんだね。

一歩前へ。これからも、日常の学びとくらしの中で、NIE を「推進していこう!!」と思います。最後まで読んでいただき、ありがとうございました。



【 中 学 校 】

新聞による深い学びの育成

猪名川町立中谷中学校 校長 石上 勝久
教諭 田中 佑樹

1. はじめに

本校は阪神地区の北部に位置し、能勢電鉄・日生中央駅が校区内にある学校である。生徒数は162人（各学年2クラス、特別支援学級2クラス）であり、小規模校であるが故に生徒との距離も近く、生徒一人一人の様子がよくわかる学校である。学校教育目標は、「豊かな心、確かな学力、健やかな体～命と人権を大切にす生徒の育成～」であり、生徒たちに生きる力を身につけるために目標の実現に向けて、日々指導・支援に当たっている。本年度はNIE実践指定校としての2年目の取り組みとして、より授業内での活用を目指し、新聞を身近に感じることでできるよう努めた。ただ、コロナによる授業時間の減少により、当初想定していたほどの授業時間が取れなかったことは残念である。その中でも、これからも継続していきたい取り組みを紹介したい。

2. 新聞の置き場と整理の方法

本校では1階廊下スペースにNIE新聞コーナーを設置している。毎日、学校図書館司書が新聞記事等を精選し、ホワイトボードに掲示している。朝、登校した生徒はまずどんな記事があるのかを一目で見ることができ、そのことについて話しながら教室へ向かう。1年生は終礼で新聞記事紹介を行っているために、その日に発表する生徒は一生懸命記事を選び、周りの生徒もそれにつられるように新聞を読む姿が見られた。

3. 取り組み

①NIE新聞コーナー

先述したNIE新聞コーナーは、いつでも誰でも新聞を見られるようにと場所を考えて設置したものである。初めころは、ホワイトボードは目にするものの、新聞まで手に取る生徒はほとんどいなかった。しかし、2年目の取り組みである本年度は朝、登校すると新聞を手に取り、その日の記事に目を通して教室へ入る生徒の姿が見られた。特に受験を控えた3年生が多く、また下級生の姿も見られた。昼休みなどにその日の新聞をめくり記事について言葉を交わす姿も見られた。



写真1 NIE新聞コーナーの設置

②学校長の講話

本校では、月に一度全校朝礼を行っている。その中で学校長が新聞記事を題材に講話をした。校長自らが実践している「ちょい読み」のすすめや、生徒が興味を持ちそうな記事を

選び、それについて話をした。生徒たちも校長の話聞いた後に、NIE 新聞コーナーでその記事を探するなどして新聞により親しむ姿が見られた。また、防災学習の際には、その日の新聞記事や当時の新聞記事から命の大切さや防災意識を高めることなどについて説き、学年掲示板に記事を貼ることでより多くの生徒の目に触れるよう心がけた。



写真2 学年掲示（防災）

③修学旅行調べ学習

3年生は修学旅行で沖縄へ行くので、事前学習として新聞を作成する。それぞれが調べた項目について個人で新聞を作成した。新聞を見た人が読みたくなるようなレイアウトを考え、読みやすい記事を書くことを心がけていた。また、戦争の記事だけではなく沖縄の特産品や甲子園に出場した沖縄代表校をまと

めたものなど個性の出ているものも多くあった。コロナ渦の中で、沖縄に行くことはなかなかできなかったが2020年度も続けていきたい。



写真3 沖縄新聞（2年生）

④自分新聞

1年生国語科では、「自分新聞」を作成した。新聞の読み方、書き方から指導し、テーマは自分の好きなことや興味のあること、部活動、プロフィールなど書きやすいものにして授業内で作成した。文章を書くのが苦手な生徒も、自分のことについての記事なので筆が進みやすかったようである。編集後記では自分のことをみつめる良い機会になったという記述や自分のことをもっと知ってもらいたいので頑張ったという記述もみられた。文化祭で全員分を展示する予定であったが今年度は中止となったので学年掲示を行った。人の目に触れるものであるため、レイアウトに工夫を凝らした自分新聞が多くあった。



写真4 自分新聞（1年生）

⑤新聞の読み取り

1年生国語科で新聞の読み取りの練習をした。主に神戸新聞 NIE の HP からダウンロードしたワークシートを解いた。神戸新聞のワークシートは記事のジャンルが多岐にわたり、単に読み取り問題としてだけでなく、討論の議題として使うことができた。討論では社会情勢に関するテーマなど中学生には難しいと思うようなものも試してみたがこちら側が驚くような意見がでたり、その意見に対して討論が進んだりとより深い討論を行うことができた。

○生徒の感想文

〈大坂なおみ全米2度目 V「トロフィーに名を刻むよりおおきなことがある」〉より

- ・ 黒人差別の被害者名をマスクに入れることに大坂なおみさんがどのような思いを持っていたのかがよくわかりました。その努力が少しずつ報われるためには大坂さんは誰よりも努力しているのだと感動しました。
- ・ 私が大坂なおみさんだったら大会で優勝することがゴールになっていると思います。それがゴールでなく、自分以外の人のことを考えることのできる大坂さんは本当にすごい人だと思いました。
- ・ 優勝しても天狗(てんぐ)にならず、人種差別に抗議し自分から世界へ発信する姿はとてもすごいことだと思います。
- ・ 最近ニュースでも女性蔑視発言や黒人差別問題が取り上げられています。大坂選手の行動で少しでもそういった問題がなくなっていく世の中になればいいなと思いました。

⑥新聞感想文

国語科で新聞記事に対する感想文を書かせた。教師が選んだ記事を読み、時事問題について感想を書かせることが多かったが、悩み相談の投稿に対してのアドバイスを書いたり、同年代の投稿についての自分の意見を書いたりすることも行った。また、新聞を読み、感想を書くという活動を週に一度行うことで最初は全く感想を書くことができなかった生徒も学年が終わるころにはしっかりと自分の意見を書けるようになった。

〈ネット依存「上手な使い方を考えよう」〉

- ・ 自分もほぼ毎日、動画サイトを見ています。楽しい動画がたくさんありついつい長時間見てしまいます。自分の中では依存していると思っていまじましたがこの記事を読むともしかして自分も？と怖くなりました。
- ・ 私はこの記事を読んでインターネットを使う中で友達関係が悪くなったり、依存してしまうことがとても怖いことだと思いました。確かに、インターネットは便利なのでついつい使ってしまうのですが、やはり友達との関係を深めるためには直接会って話すことが大切だと思いました。便利なものに頼りすぎず、使うときと使わなくてよいときのメリハリを自分自身大事にしていきたいと思いました。
- ・ この記事を読んで思ったことは SNS を自分で制御できない人は使うべきではないのかと思いました。自分で止めることができないことを依存というのであれば、親が強制的に取り上げなければならないと思います。

⑦体育科による JSPO スポーツ新聞の掲示

全生徒が通る生徒玄関にスポーツ新聞を掲示し、誰でも自由に見ることができるようにした。記事の内容はオリンピック選手のインタビューや体の仕組みなどさまざまなものがあり、生徒たちは興味深く記事を読んでいた。



写真5 JSPO 新聞

⑧記者派遣事業

朝日新聞阪神支局長・西見誠一さんに来ていただき、「少年犯罪」というテーマで講演をしていただいた。実際にあった少年事件を基になぜ、そのような事件が起こってしまったのか、少年たちの心情など、ニュースだけではわからないことについても詳しく話していただくことができた。生徒の感想にも生々しく自分の生きている環境とは違う漫画のような話だと思っていたが実際に同い年の少年たちが関わっている事件なので自分たちにも起こりうることだと思って真剣に考えましたという感想があった。実際に自分たちと年齢の変わらない事件であって興味深く聞いていた様子であった。

○生徒の感想

- ・私と同じ学年の子が先輩からの暴力で命を亡くしてしまったことはとても衝撃的で世の中でそのような事件が起こっているのが怖いと思いました。いじめを見ているだけの人、いわゆる「傍観者」にあたる人は自

分たちは何も言っていないし、手を出していないから被害者でも加害者でもないと思っていることも間違いってことをあらためて今日感じることができました。

- ・きっかけは少しのことでも、結果的に大きな事件となってしまっていることにとても驚きました。
- ・私がもし被害者の友達で現場にいたらどうしたらいいのかわからずに、すぐに判断ができないと思います。

4. 成果と今後の課題

2年続けての取り組みによって新聞への抵抗感が少なくなった生徒が増えた。取り組み当初は「新聞」と聞いただけでも嫌がる生徒が多かったが、小学校から継続した新聞への取り組みによって身近なものとして認識することができているように感じた。苦手だと感じている生徒も新聞を通じて新たな発見をすることによって、楽しみを覚える生徒が出てきた。感想を書かせると、最初は自分の考えを書くことに戸惑いを感じていた生徒も他の生徒と交流することによって自分の意見に自信を持つことができるようになった。また、他の生徒と交流することで物事を多角的に考える力が身についたと思われる。また、実際に起きたことや、記者や投稿者の生の声を読むことでも、物事を多角的に考えたり自分に置き換えて考えたりすることができたのではないと思う。

しかし、新聞を十分に活用して学びを深められたかという点はまだ課題点がある。新聞に対しての苦手意識は大多数の生徒から払拭できたと思うが、まだまだ苦手な生徒は多い。2021年度はさらに生徒が新聞に触れる機会をつくり、学校全体で新聞を活用できるよう心がけていきたい。

NIE ノートを通して、わかる世界と変わる自分

西宮市立浜脇中学校 校長 辻村 隆
教諭 渋谷 仁崇

1. 「朝 NIE」

本校では、朝読書・朝学習の時間に、ワークシート（神戸新聞NIEワークシート）を活用し、学習をしている。学年全員が同じ記事を読むことにより、クラスや学年間での共通の話題ができ、休み時間などの会話にも多くでてきている。また、時事的な記事や、地域の記事も多く取りあげ、兵庫県で起こっていることをより身近に感じる機会となっている。



2. 「流行語大賞 2020 浜脇中版」

投票結果・・・1位 鬼滅の刃
2位 3密（三つの密）
3位 ソーシャルディスタンス
生徒一人一人が、アンケート形式で2020年の振り返りとして、流行した言葉を選んだ。



世間では、「3密」であったが、生徒たちとは少し違った。20年は、新語など例年のない言葉も増え、生徒たちはひとつひとつの語句の意味を確認していた。

3. 「NIE ノート」

生徒たち、一人一人が「NIEノート」を作成している。その中で社会全体や、世界の動きを通し、社会科への関心、興味を高め、世界や日本社会全体の動きを考えるねらいがある。本年度はコロナウイルス禍で、自宅学習での作成も多かった。

授業の最初に、各班の代表が、書画カメラを使って、発表をする。お互いに発表者の内容をメモにとる。毎回、それぞれ個性的な記事や、大きな動きの記事などを、発表している。社会の動きなど、興味関心をさらに高め、世界に目を向け、社会的な思考力を持って、自分の意見やアイデアを発揮できる人になってほしい。



発表を聞いているときは、NIE ノートに各自記事内容をメモします。



授業で書画カメラを使って発表。
2020年度は、コロナ関連の記事が多かった。

- 「NIE 発表について」
- 『社会的思考力・表現力・資料の活用力を伸ばす』
- 『主体的に学びに向かう姿勢を育む』
 - ・正しい日本語を読む力。
 - ・見出しの付け方。
 - ・記事の内容を理解し（記事の起承転結）、まとめる力。
 - ・自分の感想を表現する力。
 - ・発表を聞き、要点を絞りメモを取る力。
 - ・記事への興味関心を持ち、世界や日本の情勢を知り、自分なりの考えを持つ。

○「NIE の取り組み評価」 個人賞

毎学期の学年集会で、学年内で、NIE ノートに最も取り組んだ生徒を表彰する。

2020年度の第1学年の生徒では、500記事以上（4冊以上）集める生徒もいた。全体の平均は100記事。

●生徒配布用プリント

★NIE (Newspaper in Education)

【毎授業 最初5分程度】

最近の新聞から、記事を切り取り、ノートに貼り、自分なりにまとめたものを発表。

→定期テストに時事問題として出題。

新聞をとっていない人は、テレビのニュースを聞いたり、インターネットなどプリントアウトしたりするのも可能。

★NIE ノート

確認1、どれぐらいの頻度で記事をまとめているか。週に1回が基準。

2、新聞を、きれいに切り取り、貼る。

3、「日付」、記事の「まとめ」、自分の「感想」をしっかりと書いているか。

☆今後の取り組みとして

『プレゼンテーションソフトの有効活用』

2021年1月末に、生徒ひとりにつき1台のPCが配布された。今後は、NIEノートだけではなく、プレゼンテーションソフトを活用し、資料作成や発表など、デジタル機器を活用して行っていきたい。各自が個人用パソコン内に作成したものを、そのままオンラインでつなぐことで、学級や学年をまたいで発表することが容易にできる。



<NIEノート作成例>

(記事 上：朝日新聞 下：読売新聞)



NIEノートは、授業がある前日に、各自が新聞やインターネットの記事の中で、興味を持ったものをスクラップする。

記事のタイトルや重要な箇所にマーカーペンで線引き、ノートに貼る。

その後、記事を読んだ感想を書く。

4. NIEコーナー (新聞の置き場)

正面玄関に新聞を各社ごとに保管し、生徒が自由に閲覧できるようにしている。



5. 朝日中高生新聞

デジタル教材版【実践指定校】

記事・ワークシートを活用

朝日学生新聞社が発刊する「中高生デジタル新聞」を教育活動に活用する取り組みの実践指定校として本年度取り組んだ。

デジタル版の活用し、朝NIE時に、ワークシートに取り組んだ。また、社会科の授業で、感想などの意見交流を行った。



(画像：朝日中高生新聞 デジタル教材版)



6. 「いっしょに読もう！」

新聞コンクール」

個人奨励賞 受賞

日本新聞協会主催の「いっしょに読もう！新聞コンクール」に取り組んだ。長期休暇の課題として、家族や友達と記事を読み、感想や意見を第1学年中心に応募した。

【奨励賞】西宮市立浜脇中1年女子

朝日新聞7月24日付朝刊

「自ら依頼の難病患者を殺害」を読んで



7. NIE 川柳

NIE ノートから、1年間で自分の気になるニュースを選び、5・7・5の川柳にした。

テーマは、政治・経済・国際・スポーツなど。授業の中で、作品の発表交流会を行い、各クラスの優秀作品を投票で選んだ。

生徒作品（冬季課題）

マスク越し
はじめて見る顔
あなた誰

コロナより
無知な差別が
もつと怖い

デジタル化
負担とかばん
軽くなる

テレワーク
映る一部を
大掃除



新聞を活用した実践的授業の取り組み

～メディアリテラシーを通じて新聞の役割を考える～

兵庫教育大学附属中学校 校長 大山 隆史
教諭 安永 修

1. NIE 実践指定校になるまでの経緯

兵庫県加東市にある本校は、自然環境に恵まれた場所に立地し、地元加東市だけでなく、周辺の市町や遠くは神戸市や三田市、加古川市などからも生徒が通学している。生徒数は3学年合わせても300人に満たない学校である。学校教育目標の中にある“目指す生徒像”として、「物事を多角的に理解し、新たな価値を『共創』できる生徒」を掲げている。

もともとは、本校のカリキュラムの特色である、大学の教員などが講師を務める「キャリア総合」の授業の1講座の中で、神戸新聞の記者から新聞の取材や編集などの新聞づくりについて講義を受けたりしていた。また、探究学習の取り組みの一環として行ったパネルディスカッションにおいて、神戸新聞の記者にパネリストとして参加してもらうなど、新聞を通して社会を見る目を養う取り組みを行ってきた。

令和2年度の「キャリア総合」の授業では、より新聞を活用した実践的授業を行うことを計画した。具体的には、「新聞記者体験講座～あなたも新聞記者になって、新聞をつくろう！～」というテーマで、生徒が新聞社を訪問して編集作業の様子を見学したり、現場の新聞記者に直接インタビューしたり、新聞の役割について講義を受けたりし、そして、生徒自ら新聞記者になって、現場を取材し、新聞づくりを行うなど。そのために、さまざまな新聞を読み比べたり、読みこなすために、NIEを活用することを企画していた。

ところが、新型コロナウイルス感染症の拡大の中で、臨時休校が3カ月続き、授業確保

の関係などの理由で「キャリア総合」の授業そのものに行えなくなった。一方で、NIE 実践指定校になり、新聞が6月から毎日届くようになった。その新聞を活用して何ができるのか、計画を練り直した。なお、新聞は全校生徒がいつでも読めるように、全校生徒が通る廊下の一角に閲覧コーナーを設置した。



2. 臨時休校中の取り組み

本校では臨時休校中、各教科の担当教員が課題プリントなどを作って生徒に配布したり、「臨時休校に伴う特設ホームページ」を開設し、教科ごとに課題やプリント、問題、オリエンテーション動画を載せた「非同期型」授業を行ったりした。その中で、3年の社会科では「社会科通信」を発行し、新型コロナウイルスと同様に、100年前、世界的に大流行した「スペイン風邪」について報じた新聞記事を引用、世界全体および日本で多数の人が亡くなったことや、当時の政府が呼びかけた対策が「マスク着用」など、今と変わらないことなどを紹介した。

3. 生徒の現状を把握するためのアンケート

臨時休校が終わり、学校が再開し、少しずつもとの授業に戻ってきた令和2年7月に、3年生を対象に、NIE 推進協議会作成のアンケート用紙を使用してアンケートを行い、83人から回答があった。

【結果】

- ・約7割の生徒が新聞以外の方法で情報を入手
- ・新聞を取っている家庭が64%
- ・毎日、新聞を読む生徒が3人に対し、読まない生徒が「ほとんど」「全く」を合わせて56人(67%)
- ・30分以上読む生徒が0人に対し、63人の生徒(76%)が10分以内。
- ・1面から読む生徒が44人(53%)。
- ・いつも読む記事は、①1面、②政治・経済、③事件・事故を挙げた生徒が3割近くいて、それ以外に、④スポーツ、⑤まんがを挙げている生徒の割合が多い。
- ・新聞記事を家族などと話をするかについては、「よく」「ときどき」を合わせた「話し合う」と答えた生徒が39人、「あまり話さない」を含めた「話さない」と答えた生徒が40人と拮抗^{きつこう}している。

4. 実践的授業の取り組み

本校の生徒に対するアンケート結果から、より新聞を身近に感じてもらうために、新聞の面白さ、奥深さを知ってもらおうと計画した。その柱として、新聞社の編集委員クラス（記者の取材経験が豊富で、社説などを担当している方）と、現在、現場で取材されている新聞記者を招いての講演会と、生徒も入った形でのパネルディスカッションを行うこととした。

まず、令和2年11月2日に、3年生の社会科の特別授業という形で、「新聞フォーラム」を開催した。この新聞フォーラムをより意味のあるものにするために、事前学習として、①複数の新聞の「社説」の読み比べや、②授業で生徒に「マスコミは第4の権力」といわれる理由を考えるように課題を提示したり、③講師に質問、聞いてみたいことを考えさせることを行った。まず①について、複数の新聞の「社説」を読み比べることについては、新聞1紙に偏らないようにする配慮の意味も

あった。そして、毎回の「社説」の読み比べの中で、テーマを提示して、自分の考えを持つことの大切さを伝えていった。生徒に示したテーマは次の通りである。

- ① 今後、ニュースや様々な情報に接する際、あなたは「メディア（情報）とどのように向き合っていけばよいのか」についてのあなたの考え。
- ② 新聞2紙の社説を読み、安倍内閣の評価が新聞社によって分かれることについて、あなたはどう思いますか。
- ③ あなたは「マスメディア」に対して、どのようなことを期待しますか。

一番最初の「社説」の読み比べでは、大半の生徒が初めて「社説」を読むということもあり、10分の時間で「社説」2紙を読むことは難しく、自分の考えをまとめるところまでできた生徒は少数にとどまった。しかし1週間に一度の割合で、毎回「社説」の内容やテーマを変えたりするなどを繰り返していくうちに、4回目では、ほとんどの生徒が2紙の「社説」を読み比べ、考えをまとめることができるようになった。この新聞の「社説」の読み比べについて、生徒が学んだことと、生徒の「振り返り」では次のようなものがあった。

- ・新聞社が違うだけで、こんなにも意見が正反対なものになることに驚いた。
- ・一つの記事を判断するのではなく、いくつかのものから判断することが大切だと思った。
- ・多角的に見る、いろんな意見を聞くことが大事だと思う。
- ・たくさんの新聞を読む。たくさん調べて、すべてに同じことが書かれている部分が本当なのかなと思う。



ほとんどの生徒が新聞を読み比べることを経験したことがなかったので、新聞社によって主張や内容が異なることを知ることができた。また、生徒たちの考えをまとめたものを、クラスごとに整理して、「友嬉祭（文化祭）」で展示発表した。



そして、いよいよ「新聞フォーラム」を迎えた。当日は、講師として、朝日新聞編集委員の高橋純子氏をお招きし、第1部では、「今、世界や日本で何が起きているのか、それを伝えるマスメディアの役割」について講演を行っていただいた。当日は、3年生全員に朝日新聞と読売新聞を配布した。新聞で書かれていることや読み方などについて、分かりやすく説明・解説をしていただいた。



講師の高橋純子氏の講演内容は次の通りである。

- ・新聞記者になった志望理由（女性の社会進出、キャリア教育の視点）
- ・新聞の役割：新聞は答えを出すのではなく、読者が問いを立てられるように、判断できる材料を出す。世界を見ると、答えは自分が持っていると思っているリーダーが出てきている。
- ・民主主義のあり方。
- ・メディアの役割は権力の監視。Watch dog
- ・以上のような思いを持って、記事を書いている。
- ・記事ができるまでの流れとして、記者→デスク→校閲→編集局長と上がっていく中で、

大人数が関わり、事実として自信を持って新聞を出している。

- ・記事の読み方では、いろいろな人の書いている記事を読み、他紙も読み、自分の中で自分なりの考えを見つける。最初から正しいと思って読むのではなく、疑いを持って読む。

- ・ネットニュースとの違いでは、ネットニュースは並列で記事を扱っているのに対し、新聞は、見出し、トップ記事、字数の多さによってニュースの重大さの違いがある。

- ・“新聞は社会の散歩道”とっており、興味がなかったことでも偶然出会うこともある。そして、世界の事、世の中の人の事が知ることができる。

第2部は、生徒・教師からの質問に高橋純子氏が答える形での討論会を行った。主な質問の内容としては、

- ・なぜ政治に関心を持たないといけないのか、政治に対してどのような意識を持てばよいのか。
- ・「メディアリテラシー」について、どのような意識でニュース、新聞、情報に向き合えばよいのか。

それに対して、高橋氏からは分かりやすく、そしてジャーナリストとしての考えを示していただいた。

また最後に、10年先、20年先を見通して、今の中学生が考えておくべきこと、力をつけておくべきことは何かについてのアドバイスもいただいた。



「新聞フォーラム」を終えた後の生徒の感想は、次の通りである。

- ・今までメディアに対してマイナスイメージがあった。いろいろな政策にも否定的な意見・報道が多かったから。しかし、そのイ

メージは変わりました。あれは一つの意見として報道しているだけで、しっかりと取材などもしているからです。だからこそ、「これは正しい！」と思うのではなく、さまざまな意見を聞くことが大切だと思いました。

- ・「問い」は自分の違和感や疑問から生まれる。すぐに答えを見つける必要はないが、その「問い」を決して忘れてはいけない。私たちは新聞を読み、「問い」を見つけ、探究し、声を上げることで、社会をより良く出来る一員として、政治について知る必要があると学んだ。

実践的授業の二つ目は、令和3年1月18日に開催した、全校生徒が参加した「防災学習」である。本校では、毎年、阪神・淡路大震災が起きた1月17日の時期に「防災学習」を行っている。今年は、NIEの記者派遣事業を活用して、神戸新聞社の記者をお招きし、震災報道のあり方についての講演や、本校の教師や生徒も加わったパネルディスカッションを行い、防災学習の理解をより深める取り組みを行った。まず、事前学習として、「防災学習」当日に講師として来られる、震災の日に生まれた神戸新聞社記者・名倉あかり氏を取り上げたNHKの番組「“被災地”の新聞記者 阪神・淡路大震災25年」を全校で視聴したり、各学年・各教科で「震災・防災・減災」に関する授業を行った。

「防災学習」の第1部では、「震災報道を通じて阪神・淡路大震災を伝える意義」をテーマに、震災の日、宿直勤務だった神戸新聞社記者の三好正文氏と名倉あかり氏に講演を行っていただいた。名倉氏からは、当日に全校生徒に配布した神戸新聞の中から自身が書かれた、震災に関する記事を取り上げながら、震災を知らない世代が、次の世代に震災をどう伝えていくかを考えていくことが必要と考えているとの話を伺った。



第2部では、三好氏・名倉氏と、本校教諭・生徒によるパネルディスカッションを行い、①「震災報道」のあり方や意義について、第1部の講演の話をもとに、生徒の考えや体験などの話や、②「附属中学校における防災学習」の取り組みを紹介し、その学習を通じて何を学んだのかを、それぞれの立場から意見を出し合った。また、③「震災報道」「防災学習」を通じて、私たち一人一人が「震災」にどのように向き合い、これから予想される様々な災害に対して、どのような対策を考え、防災・減災を行っていけばよいのかを考えた。パネリストとして参加した生徒からは、「母が震災当時、西宮で被災し、最初は生きるのに必死だったが、これは記録を残さないといけないとしばらく経ってから写真を撮った。今回のパネリストとして参加するのを機に写真を見せられた。記憶を記録する大切さを教えられた」と語るなど、「防災学習」を通じて、震災に向き合う貴重な経験をすることができた。



5. まとめ

今年はNIEの実践の1年目で、手探りの中からできることを考えて実践を重ねてきた。その中で、より社会に向き合うテーマについて、新聞を通じて取り上げることで、生徒たちには、新聞をより身近な存在として捉えるとともに、社会に対してより真剣に、そして将来を見据えて考える機会をつくることができたと考えている。来年度以降も、このような取り組みを引き続き行っていきたい。

MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing.

【 中 学 校 ・ 高 等 学 校 】

デジタルデバイスが普及する中で、日常的に「新聞」を読み、 問題発見解決力と思考力、異文化理解力を身につける

愛徳学園中・高等学校 校長 宮内 健一
教諭 米田 俊彦

1. 本校の ICT 環境

10年後、20年後の社会で活躍するため、「自ら考え、人に奉仕し、充実した人生を歩む女性」に育てることをスクールビジョンとして掲げ、そのために必要な「問題発見解決力」「思考力」「異文化理解力」など「7つの力」を身につけることを目指したライフキャリア教育「Rainbow Program」を2015年度から実施している。

各教室に Wi-Fi、プロジェクター、スクリーンを設置し ICT 環境を整えた上で、「愛徳グローバル教育」をはじめさまざまなステージプログラムや基礎学力向上のプログラム「5BOX」を「ICT」の利活用を図りながら進めている。6年目の本年度、タブレット端末を生徒1人1台使用する環境を中学1年生から高校3年生の全学年で実現し、コロナ禍に揺れた2020年度、その真価を發揮した。

2. 本校でのこれまでの新聞とのかかわり

中学、高校で新聞を活用した授業や学校行事を行ってきた。

①新聞について学ぶ、②新聞を読み・考える・表現する、③授業や行事などで新聞(という形式)にまとめるなどの取り組みを各教科での授業や HR、あるいは全校委員会(他校での生徒会に相当)で行ってきた。

3. 本年度の取り組み

2020年度より NIE 実践校の指定を受けるにあたり、これまで行ってきた紙ベースでの「新聞」を活用した実践を振り返り今後に活かしていくことに加えて、6年目に入った本校でデジタルデバイス(タブレット端末=本校では iPad を使用)の利活用を NIE の実践に活かしていきたいと考え取り組んだ。具体的には、従来からの新聞について学ぶ授業と新聞の活用や図書館の新聞コーナーの拡充や全校での「ひょうご新聞感想文コンクール」への取り組みを行いつつ、記者派遣を活用し、高校での探究学習につながる「取材」についての講演やタブレット端末を活用した授業の実践を行い、高校2年生の「国語表現」で公開授業を行った。

こうして始まった2020年度であったが、ご承知の通り、コロナウイルスの感染症が拡大し、全国(あるいは世界中の多く)の学校が臨時休校を余儀なくされるという未曾有の事態の中での NIE の実践校としての1年となった。

4. 臨時休校下の取り組み

本校では、臨時休校になった昨年3月上旬から、これから受験期に入る高校2年生(現・3年生)を対象に、普段使っている授業支援アプリ「ロイロノートスクール」の入ったタブレット端末を使って遠隔授業ができないか検討を始めた。ロイロノートスクールのカード(スライドのようなもの)

に文字や図、写真、のみならず動画や音声を載せて、自宅にいる生徒とオンライン上でやり取りし、添削や解説を実施し3月下旬から高校3年生(新高校3年生)の講習



「愛ちゃんねる」の様子



をオンラインで(名称・『愛ちゃんねる』)実施した。はじめてのオンラインでの実施でしたが、生徒の「学びたい」という気持ちが強く感じられ、オンラインでも「伝わる」・「できる」という手ごたえを強く感じ、励まされた。4月に入っても休校が続いたため、対象学年を広げオンライン授業を行った。



オンライン新聞スクラップ

NIE の実践としては各家庭への新聞の配達はずまっておらず、ネットでの新聞の配信もあることから、高校2年生と3年生を対象にした国語表現の授業での課題として「新聞スクラップ」に取り組んだ。「新聞スクラップ」は以前から行っていたもので、自分の興味のあることや進路に応じて A4 サイズのノートに新聞記事を貼り、①記事のあらまし、②その問題点、③その背景、④自分の考えを記入し、週に一度、自分のスクラップ帳をロイロノートスクールで写真に撮り、送信し、教員がコメントを付けて返却するという形で行った。

5. 学校再開後の本校の NIE の取り組み

緊急事態宣言の解除を受け、5月下旬から分散登校を始め、6月1日から学校を再開した。

「3密」を避けるためグループでの話し合いや分かち合いもできない中、新聞の提供を受け、図書館に配置し、生徒が閲覧し活用できるようにした。夏休みに「ひょうご新聞感想文コンクール」に中1から高2までで取り組んだ。

あわせて中1の国語の授業では「新聞の読み方」を行った。「新聞感想文コンクール」では本校の高校1年生が、県知事賞をいただくことができた。



図書館の新聞コーナー



中1 国語 新聞について



第11回ひょうご新聞感想文コンクール(神戸新聞社、神戸新聞販売店会主催)の最終選考会で、本校高校1年 政廣りおさんの作品が兵庫県知事賞に選ばれました。

このほか2月には中3から高2を対象に毎日新聞神戸支局から韓勲光記者をお迎えし、講演会を行った。韓勲光記者の記事を授業で読み込み、感想を書き、疑問を書き出し、質問を考え、当日は記者による「取材について」の講演の後、3学年からの質問とディスカッションを行う予定だったが、「3密」を避けるため講堂、視聴覚教室、アクティブラーニング教室をZoomで結んで行った。

(講演のあらまし、生徒の感想は兵庫県NIE推進協HPにあります。)

6. 国語表現での取り組み(公開授業)

高2、高3の「国語表現」では新聞を活用した授業を積極的に、かつ継続して行っている。

担当教員がスクラップした新聞記事を「週刊国語表現」と名付けて週に一度、生徒に配布し、①記事の解説、②この新聞記事を範囲にした漢字テスト、③配布した記事から一つ選び400字で記事についての感想を提出し、④生徒自身も興味のある記事をスクラップし2週間に一度提出するという取り組みを行っている。(定期考査にも様々な形で出題している。)

当初は授業以外で生活の中で毎日の習慣として新聞を読むという生徒は少ないが、1年、2年と継続している間に、社会の動きの面白さや、それについての多様な意見を知り、自分自身の考えを深めているようである。定期的に提出を求めることで、少しずつ習慣になっていき、テレビのニュースとの関連や報道内容の違いに気付いたり、家族とニュースの内容について話し合うなどの効果も出て、新聞を読むようになったという感想を持つ生徒も着実に増えている。

これまでの取り組みを前提に、デジタルデバイス(iPadとロイロノートスクール)を使って、「新聞を読み、ICT(iPadと「ロイロノートスクール」)を活用し、考えを整理し、伝える授業を公開授業で行った。単元の計画は「表1」の通りである。

iPadの使用が授業の目的にならないよう心掛け、新聞記事を材料に自分の意見を持ち、他者の意見と交流させ視野や考えを広げ、さらに自分の意見を深めるという構成で行った。

授業の展開は、「表2」の通りである。



「公開授業」の様子

授業の生徒の感想はこちら



授業を行って、多くの記事(情報)について、タブレット端末を使い、「見える化」し、その記事を直接動かしつつ、なげることができるので記事の分類、比較がやりやすい。端末の操作に慣れると、そのスキルを用いて自分の考えを深め、他者との協働的な学びにより主体的で深い学びの可能性が広がるように思う。

表1 単元の計画

4 単元の計画（「発表する」全5時間）

	時数	内容
1	2	各自のテーマを決める。情報を収集する
2	1	情報を整理・分類・分析する（本時） グループで3大ニュースのプレゼンテーション
3	1	自分の3大ニュースの未来を考える 20年後の予想から必要な仕事を考える
4	1	全体でプレゼンテーションをする

表2 当日の授業の流れ

- (1)本時の目標 新聞記事を整理・分類・分析でき自分の考えを作ることができる。
プレゼンテーションで自分の意見が発表できる。
相手の考えを理解し、質問を行い、考えの共有、深化に貢献できる。

(2)授業の展開

	学 習 活 動	教員の働きかけ
導入 10分	週刊国語表現配付 本日の新聞を読み、さらに補える記事を見つけ収集する。	各自で作業
展開 15分	①ロイロノートのフリーのカードに情報を集める ②シンキングツールの「Xチャート」に集めた情報を整理・分類する ③シンキングツールの「座標軸」を用いて分析する ④シンキングツールの「ダイヤモンドランキング」を用いて順位をつける。その順位にした理由をカードにまとめる ⑤シンキングツールの「キャンディチャート」を使用する	各自で作業 シンキングツールを切り替える
展開 20分	プレゼンテーション資料作成をタブレット端末で行う ⑥「キャンディチャート」 4人または3人のグループでプレゼンをする（1人2分）	質問 情報共有
まとめ 5分	自分のテーマの3大ニュースを修正補足する 「キャンディチャート」の修正、仕上げ ⑦リフレクションカードを作成する	ここまでのツール 完成したカード リフレクションカードを提出

7. まとめ

今、GIGA スクール構想によりデジタルデバイスの普及が学校で急速に進んでいる。そんな中、紙の新聞かデジタルの新聞かという議論もあるが、紙とデジタル、それぞれの良さをどう生かすかという視点が必要になってくる。デジタル化は、今まで触れることのできなかつた情報に早く、大量に触れられることをもたらす技術でもある。この技術を活用するスキルを身につけた上で、デジタルの新聞とこれまでの紙ベースの新聞とを比べてみると紙ベースの新聞の意味や価値がより鮮明になるように思う。紙とデジタルの「新聞」は対立するものではなく、それぞれが良さを持つ。この二つの新聞の間の往還を繰り返しながら、生徒のより深い問題発見解決力や思考力、異文化理解力を育むことのできる NIE の実践を模索していきたい。

NIEによるメディアリテラシーと発信力の育成

蒼開中学校・高等学校 校長 阪口 寛明
教諭 太田 柊

1. はじめに

本校は、淡路島にある唯一の私立中学校・高等学校であり、中学3カ年コース、高校3カ年コース、中高一貫6年コースとさまざまなコースに分かれ、全校生徒289人が日々学習に励んでいる。多くは淡路島の出身だが、島外出身、海外出身の生徒も在籍している。

本校では、NIE実践指定校に選んでいただく前から朝日新聞を購読し、各教室に1部ずつ置いている。さらに、図書室では2年前から朝日新聞を毎日1部ずつ保管しており、生徒たちが自由に新聞を読むことができるようになっている。しかし、教室、あるいは図書室での生徒たちの様子を見てみると、新聞を手取る者は非常に少ない。生徒にもっと新聞を読んでほしいという思いから、参加申請をし、本年度より新たにNIE実践指定校に選んでいただいた。新聞を読むことを通して、多くの情報であふれる現代社会で必要となるメディアリテラシーと自分の考えを他人に伝える発信力を身に付けてほしいと考えている。

2. アンケート結果と実践概要

まず、生徒が実際にどれくらい新聞に触れているのかを知るために、2020年7月に実施したNIEのアンケートの結果を参考にした。主に参考にしたのは、以下の二つの項目である。ここでは、主に実践を行う中学3年生27人のデータを示す。

④最近（この1カ月間）、家や学校で、どのくらい新聞を読んでいますか？		
	回答数	割合
4 毎日読む	1	3.7%
3 ときどき読む	12	44.5%
2 ほとんど読まない	8	29.6%
1 全く読まない	6	22.2%
合計	27	100%

⑧新聞記事やニュースなどについて、家族や友人や先生とよく話しますか？		
	回答数	割合
4 よく話し合う	3	11.1%
3 ときどき話し合う	9	33.3%
2 あまり話さない	11	40.8%
1 話さない	4	14.8%
合計	27	100%

④では「全く読まない」、「ほとんど読まない」の合計が、⑧では「話さない」「あまり話

さない」の合計がそれぞれ 50%以上を占めている。この結果から、半数以上の生徒が新聞やニュースといったものにあまり関心がないということがわかる。そこで、1年目である本年度は、「新聞に興味を持ってもらうこと」、「ニュースについて考える機会を設けること」に焦点をあて、教育活動を行うことにした。

以上を踏まえて、本年度、本校で実践したことは、(1)新聞ワークシートの活用、(2)新聞を知ってもらうための授業、(3)新聞の感想、コラムを書く活動の三つである。

3. 実践内容

(1)新聞ワークシートの活用

本年度は、新型コロナウイルス感染症の感染拡大防止のために、約2カ月間の休校期間から始まった。その期間中試験的に、神戸新聞社 NIE のホームページにて公開されている NIE ワークシートを生徒に配布し、課題として取り組ませてみた。ワークシートの中身は、新聞記事を読んでその内容についての問題に答えるもの、感想を書くもの、記事の中に出てきた言葉について調べるといったものなど、さまざまであったが、提出されたワーク



シートを確認すると、しっかりと書かれていた。特に、調べる問題では、インターネットを使ってよく調べられており、かなり細かいところまで説明されているものも多くあった。また、感想も記事の内容に興味を持ったというものが多く、新聞記事から特に生徒に読んでほしいものを抜粋し、読ませることは一定の効果があるように感じられた。

休校期間が明けてからは、朝学（本校では毎朝、SHR の後に5分から10分程度の短い学習活動の時間を設けている）の時間を活用し、週に二つくらいのペースで、新聞ワークシートをする時間を設けた。新聞社が発行のワークシートを活用させていただきながら、時々、本校教員オリジナルのワークシートも作成するなどし、1年間を通してこの活動を行った。

新聞そのものを手に取るのは、どこから読めば良いか分からず、ハードルが高いという生徒もいるため、このように生徒に読んでほしい記事を抜粋し、読ませることは、新聞に触れる機会を増やすうえでは、非常に効果的であった。

(2)新聞を知ってもらうための授業

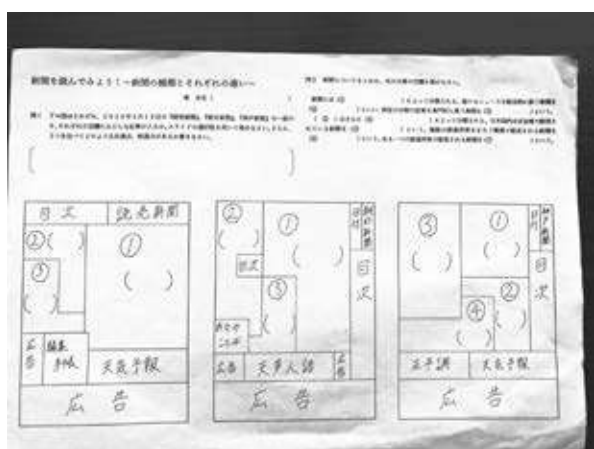
生徒が新聞に触れる機会を増やした次のステップは、生徒が自分で興味のある記事を見つけることができるようになることである。しかしそのためには、生徒の新聞に対する知識、特に「何を読めば良いか」がないように思われた。

そこで、「新聞を読んでみよう！～新聞の種類とそれぞれの違い～」と題して、新聞の種類について学ぶ授業を行った。神戸新聞、読売新聞、朝日新聞の3紙の1面記事に、それぞれどのようなニュースが記載されているかを予想するクイズを出題し、その答えを踏まえて、全国紙と地方紙の違いについて学ぶというものである。クイズにしたこともあり、

生徒の反応も良く、「1面だけでも読んでみようと思った。」、「新聞のことについて知れて、もっと世の中のことを知りたいと思った。」などの感想も見られた。新聞に興味を持ってもらうきっかけとしては、ちょうど良いものだったと感じている。

さらに記者派遣事業では。朝日新聞社神戸総局長の堀江泰史様にお越しいただき、記者の仕事についてお話しいただいた。普段は絶対に知ることはできない、記者の方がどのような仕事をしているかということや、どのような思いで取材にあたっているかということなど、新聞を作っている方々の「思い」を知ることができた。特に、「京都アニメーション放火事件の実名報道」についてのお話は、生徒にとっても関心の高いニュースだったこともあり、「被害者の実名報道の是非」という、正解のない問題について考える貴重な経験となった。

どちらも、生徒が楽しく、真剣に取り組んでいる様子が見られた。新聞そのものについて知ることが、新聞に興味を持つきっかけの一つになっているように思われる。



(3)新聞の感想、コラムを書く活動

本年度の最後の活動として行ったのが、興味を持った新聞記事を切り抜き、感想を書く活動と、コラムを書くという活動である。

新聞の感想は、毎日1人ずつ当番を決め、帰りのSHRの時間に、その日の新聞記事から気になったものを切り抜き、それについて感想を發表するというものである。本校では本年度、SDGsの授業も行っているため、SDGsに関連のある記事を抜粋し、どの



の目標と関連があるかを考えるという課題も追加した。記事を選ぶために新聞を読み、選んだ記事について、自分の考えを述べることの意外な難しさに戸惑う場面もあったが、自分の言葉で、考えを述べることができていた。1面だけに注目しているのではなく、社説を切り抜いたり、複数のページにわたって関連のある記事を抜粋したりと、さまざまなページに目を通し、課題に取り組んでいた。SDGsと関連させることで、新聞が情報を入手するためのツールの一つであるということも理解できたのではないかとと思われる。

そして、最後にはコラムを書いてみるという課題に挑戦した。コラムは、字数制限や短いながらに起承転結のある文章にする必要があるなど、難しい課題であるが、本年度のまとめとして行った。コラムを書くためには文章力も必要となるため、多くの生徒が苦戦していた。コラムの書き方やテーマの決め方などを伝えたが、コラムという形に自分の考えをまとめるということの難しさを痛感する結果となった。完成度の高いコラムを提出してくれた生徒もいたが、ディベートなど、自分の考えを話す訓練をもう少し積んでから実践するべきであったように思われる。2年目の最後には、より完成度の高いコラムが書けることを、今後の目標としたい。

4. まとめ

本年度は、1年目ということもあり、生徒に興味、関心を持ってもらうということ、主軸に、教育活動を展開した。大きく三つの内容に分けて行ったが、どれも生徒からの反応は、好意的なものが多かったように思う。ここで2021年3月に実施したアンケートの結果を示したい。

④最近（この1カ月間）、家や学校で、どのくらい新聞を読んでいますか？		
	回答数	割合
4 毎日読む	4	15.4%
3 ときどき読む	8	30.8%
2 ほとんど読まない	10	38.4%
1 全く読まない	4	15.4%
合計	26 (1人未回答)	100%

⑧新聞記事やニュースなどについて、家族や友人や先生とよく話しますか？		
	回答数	割合
4 よく話し合う	4	14.8%
3 ときどき話し合う	13	48.2%
2 あまり話さない	4	14.8%
1 話さない	6	22.2%
合計	27	100%

④については、あまり前回のものと差がないように見られるが、「全く読まない」という生徒は減り、「毎日読む」という生徒は増えていることから、授業を経て新聞を読むようになったという生徒も、わずかながらいると言える。また、⑧については、前は半数以上を占めていた「話さない」、「あまり話さない」の合計人数が10人と、少なくなった。少しずつ、ニュースに興味を持ってくれる生徒が増えてきているように思われる。

現状のアンケートの数字を参考にすると、まだまだ新聞を読むことが習慣化はしていないとわかる。そして、ニュース、時事について考えていない生徒もまだまだ多い。これから、大人になっていくうえで、世の中の情勢を知り、自分の考えを持つておくことは非常に重要である。次年度は引き続き、「メディアリテラシーと自分の考えを発信する力の育成」をテーマに、より新聞を読み、考えることに焦点をあてた授業を展開したいと考えている。

【 高 等 学 校 】

モラルジレンマによる社会的論争課題の探究 ～正解(こたえ)のない課題(とい)に挑み続ける人財(たから)の育成～

神戸市立神港橋高等学校 校長 谷口 元庸
教諭 高野 剛彦

1. 実践の概要

神戸市立神港橋高等学校は、2016年4月、神戸市立兵庫商業高等学校と神戸市立神港高等学校を統合・再編して開校した、全日制商業高校（みらい商学科）である。1学年8クラス（定員320人）、3学年で24クラス（定員960人）、うち75%が女子生徒である。

スクールミッションとして「“ひと”を“たから”ととらえ、神戸を愛し、支える“人財”を地域とともに育てる」を掲げ、三つの“MIRAI”ⁱをスクールポリシーとしている。2020年には「橋コンソーシアムⁱⁱ」を立ち上げ、神戸市兵庫区と地域連携協定を結んで、タウンミーティングや通年型インターンシップなどを通じた地域協働に取り組んでおり、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」アソシエイト校に認定されている。

本校では教育目標にある「思いやりや礼節を重んじ、職業人としての心構えや倫理観をもって行動できる人の育成」の達成に向けて、生徒を取り巻く道徳的諸課題を自らの力で解決できる道徳的実践力を身につけるため、3年間を通して課題解決型道徳教育（モラルジレンマ学習）に取り組んでいる。

2年生より情報類型システム活用コース、情報類型システム開発コース、会計類型の三つの類型・コースを設け専門的な学習に取り組むとともに、多様な選択科目を設け学習の深化や希望進路実現、興味・関心の伸長を図っている。本年度NIEに主として取り組んだ公民科「時事問題」もそうした選択科目の一つである。本年度の履修生徒は3年生39人であった。

2. 新聞の置き場と整理の方法

公費で買っている新聞とNIEの新聞を区別するため、ポストの下に右写真のような専用ボックスを設置し、そこに配達してもらった。また生徒の自習室にもなっている小講義室前に専用コーナーとラックを設置し、そこでいつでも新聞を読めるようにするとともに、壁には生徒に読んでほしい記事を掲示した。



モラルディスカッションを行う。生徒は自分とは異なる立場・意見を知ることができ、自己の既有的価値観が揺さぶられ、より高次のものへ再編成される。モラルジレンマ学習を繰り返すことで、自己の主張を一方的に展開するのではなく、多角的・多様な視点から分析・検討する習慣が身につく。

授業で班になって調べ学習をしたとき、相手が間違っただけの答えを出していたら、すぐに「違う」というのではなく、最後まで話を聞いて、その上で自分の考えを話すようになった。

自分とは反対の意見や考えが出た時に、一度自分が考えていた意見をおいて、広い視野で客観的に物事を考えてみたことで、相手の意見を理解し尊重しつつ、自分の意見も伝えることができた。

モラルジレンマ学習で決められたテーマについて論争的課題を探究する際の基本的方略を獲得し、「News が分かる」など自由なテーマについて探究する際に応用する。またオープンエンドであることから、自然に正解ではなく納得解や最適解を求めようとするようになる。基本的方略を獲得することは、「探究活動」において「深い学び」を実現するために欠かせない要素であり、「課題研究」の練習・訓練として位置づけられる。

②他者への基本的信頼感の醸成→「対話的学び」の促進

新学習指導要領では「探究活動」において、「対話的な学び」の視点から「異なる多様な他者との対話を通じて考えを広めたり深めたりする学び」が求められている。グループによる協働的な学習が成立するためには、グループメンバーへの基本的な信頼感が欠かせない。批判や否定されるのではないかと不安を抱えたままでは、安心して自らの考えや意見を表明することはできない。だがモラルジレンマ学習では右のルールが徹底される。生徒のアンケートでも、次のような記述がみられた。

モラルジレンマ学習のルール

- 話すこと、聞くこと、話し合うことが目的です(意見を否定してはいけません)
- 答えは一つではありません(「みんな違ってみんないい」です)
- 理由が何より大事です(「判断・理由づけカード」にしっかり書きましょう)
- オープンエンドで終わります(勝ち負けや多数を競いません)

みんなが自分の意見を聞いてくれたり納得してくれたりすることで、自らの意見に対して自信を持つことができたり、自分にとってプラスになるようなことだと思う。

協働的な学習をするうえで欠かせないグループメンバーに対する基本的信頼感を醸成するうえで、モラルジレンマ学習は最適であるといえる。

コロナ禍において、学校のもつ「福祉的役割」があらためて注目されるようになり、先の中教審答申においても言及されている。正解のない課題に直面し、日々決断と行動を迫られる WITH/AFTER コロナ時代だからこそ、普段 SNS では行わない価値観を含む深いレベルでの意見交換・対話が自然に生起するモラルジレンマ学習は、生徒の人間関係を向上させるうえでも欠かせないものとなるのではないだろうか。

モラルジレンマの枠組みを用いて社会的論争課題を探究することで

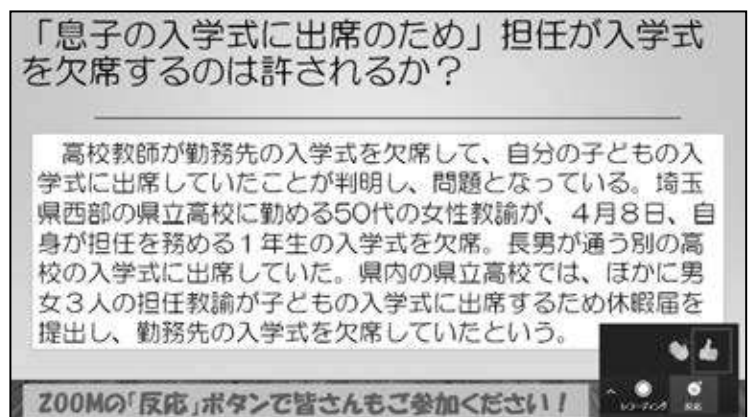
- インフォデミック (大量の情報の氾濫)
- 主体的・対話的学びの困難化
- 人間関係の不安定化

①コロナ禍での課題にうまく対応できる
②新聞の価値(情報の信頼性・多様性)に改めて気づかされる

MIRAI 探究という科目は神港橋ならではの特殊な科目で、普通の勉強や道徳とは違います。決まった答えがなく、名前の通り自分自身で探究し、自分の中での答えを出さなければなりません。それを考えることが自分の自律心や道徳心を成長させることにつながると思います。また自分の中で出した答えが必ずしも正しいとは限りません。他者とコミュニケーションをとり、理解し合うことが本質だと思います。

最後に、先日の「兵庫県 NIE 実践発表会」でご指摘のあった点について解答に変えて言及しておきたい。モラルジレンマ学習は「AかBか」という2項対立でディスカッションをするイメージがあり、ディベートと同じく「複雑な社会問題を単純化し過ぎるのでは？」という懸念がある。しかし、モラルジレンマの場合優劣を競うわけではないので、多様な視点や価値観を提供しているうちに、問題の枠組み自体への疑問が湧いてくる。

例えば、先に紹介した「息子の入学式に出席」のため自校の入学式欠席は許されるか」においては、担任の女性教諭が仕事と子育ての板挟みになっている現実から、「なぜ入学式など学校行事に参加するのは母親ばかりなのか」「入学式くらい父親が参加してもいいのではないか」という意見が出てきた。「仕事か家庭か」という2項対立から、男性の育児参加やジェンダーバランス、ワークライフバランスまで幅広い視点で議論がなされるところがモラルジレンマの醍醐味である。



i 学校が求める生徒像（アドミッション・ポリシー；AP）は「寛容な心と態度を備えた人（Moral）」「豊かな国際性を備えた人（International）」「人間関係構築力を備えた人（Relation）」「進取の意気を備えた人（Action）」「深い知性と品格を備えた人（Intelligence）」＝MIRAI 1、卒業までに身につけさせたい資質・能力（ディプロマ・ポリシー；DP）は「自律した生活を営む力（Management）」「情報処理に関する知識・技能（Information）」「マーケティングに関する知識・技能（Research）」「簿記・会計に関する知識・技能（Account）」「新しい発想で考える力（Innovation）」＝MIRAI 2、学校が提供する特徴的な教育活動である「カリキュラム・ポリシー；CP」は「モラルジレンマ（Moral Dilemma）」「インターンシップ（Internship）」「地域連携・協働（Regional Cooperation）」「探究活動（Active Learning）」「企業連携（Industry-School Collaboration）」＝MIRAI 3である。

ii 本校はこれまでも、地元神戸市・兵庫区の産官学公と協働した地域協働型キャリア教育に取り組んできた。すでに、「橘タウンミーティング」や「キャリア実践（通年型インターンシップ）」、「道徳の日」、「商品開発」等の授業で、地域との協働によるプロジェクトを展開してきた。さらに今年度からは、文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」の「コンソーシアム」を活用し、各プログラムの準備、招聘団体や講師の選定・連絡・調整、評価についてご協力とアドバイスをいただいている。

iii モラルジレンマ学習はコールバーグの認知発達説に基づく。道徳性の発達を促すためには、道徳的な認知不均衡にする、つまりモラルジレンマ（価値葛藤）の状況が必要であるとする。モラルジレンマに遭遇すると、不調和や矛盾、ある種の不整合を感じ始める。この不調和のために認知的不均衡が生じ、その状況を正しく調整するために、自分の考えを変えたり、調整したりする動機が生まれる。道徳的発達を起こすためには、別の視点から考えさせたり（役割取得の機会）、多くの他者の判断の論拠や意見、見方に触れることも大切である。そのために、集団討議（モラルディスカッション）が行われる。この中で、特に自分の道徳的な見方よりも一段階上位の道徳的思考に出会うと、均衡化のためにシエマ（その人の持つ基本的な認知枠組）を調整しようとし、結果として道徳性の発達レベルが押し上げられる。

日々の教育活動への新聞の活用と 新聞記事スクラップブックの活用

兵庫県立柏原高等学校 校長 井上 千早彦
教諭 久保 哲成

1. 日々の教育活動への新聞の活用

本年度は NIE 実践校に指定され 2 年目にあたる。提供していただいた新聞は以下のように活用した。

1) 全校生に新聞に親しむように本校図書室近くに NIE コーナーを設け新聞に日々、目を通していくことを指導した。

3 年生の生徒には、面接試験（大学、専門学校、公務員、就職）における質問に時事問題を問われることがあるので、日ごろからしっかりと新聞を読むことを指導していった。



図書室近くに設けている新聞閲覧（NIE）コーナー

2) 3 年生で学校設定科目「教養社会」選択者には、授業開始後の 1 分間スピーチで関心のある時事問題をスピーチしてもらうので、NIE コーナーの新聞に目を通していくよう指導した。

3) 学校設定科目「教養社会」選択者のテキストとして『2020 年度版ニュース検定 公式テキスト&問題集「時事力」基礎編（3・4 級対応）』を使用し、11 月のニュース検定 3 級合格も目指し、週 2 時間の授業を行った。このテキストの各時事テーマに沿った新聞記事を補助資料として活用した。

令和 2 年度では、33 人の選択生徒全員がニュース検定 3 級に合格する快挙を達成した。

4) 新聞記者による講演

昨年度に引き続き、令和 2 年 9 月 23 日に神戸新聞社丹波篠山支局長の金慶順^{キムキョンスン}記者による講演を行った。キャリア教育の一環として、公務員を中心に就職希望者の多い学校設定

科目「教養社会」選択者 33 人にむけて、「新聞記者の仕事」と題して講演をしていただいた。金記者は「どんな仕事でも、いろんな立場の人がいることを想像しながら取り組んでほしい」と呼びかけられた。

5) 生徒が自分の進路決定に向けて活用できる新聞記事のスクラップブックの作成に取り組んだ。

6) 10 年以上前から、本校では生徒の活動を積極的に新聞を使って地域に、また校内で紹介する活動に取り組んできた。また、生徒の活動を紹介していただいた新聞記事はスクラップにまとめて、生徒たちが進路決定の際に作成する志望理由書やエントリーの資料として活用できるように 3 年間ストックしている。

本年度の実践報告として、5) と 6) について詳しく述べていきたい。

2. 進路決定に向けて活用できる新聞記事スクラップブックの作成

1) スクラップブック作成の動機

NIE 活動に参加したことで、朝日、神戸、産経、毎日、読売、日本経済新聞の 6 紙を提供していただいた。これらの紙面に記述されている多彩な内容の記事を生徒たちが読むなかで、特に生徒各自が関心を持てる分野の記事をスクラップブックとしてまとめて、しかるべきところに保管しておいて（例えば、図書室）、必要なときに閲覧できるようにしたいと生徒から声があがった。

2) 生徒自らによるスクラップブックの作成

このような要望を言ってきたのは、将来、看護・医療系への進学を希望する生徒と幼児教育を含む教育系への進学を希望する生徒が多い、インターアクト部(ボランティア活動)に所属する生徒たちであった。そこで、部の活動としてスクラップブックの作成を顧問をとおして実施してもらうことになった。

コロナ禍のなかで、ボランティア活動が次々と中止になるなかで、生徒たちも喜んでスクラップブック作成に取り組んでくれた。

部活動の一環として新聞記事のスクラップブック作りに取り組むインターアクト部



3) スクラップブックにする新聞記事の内容

多彩な新聞記事の内容すべてをスクラップブックにすることは困難なことなので、内容を生徒が必要なものを選択する必要がある。そこで作業をしてもらうインターアクト部員に相談することにした。

同部に所属する生徒は、看護・医療系への進学を希望する生徒、幼児教育を含む教育系への進学を希望する生徒、国際関係を学びたい生徒が多いことから、以下の三つに関する内容の記事をスクラップブックにすることを決定した。

スクラップブックとして集める記事内容

- ① 看護・医療関係に関する記事（新型コロナウイルス関係の記事は多すぎるので除く）
- ② 教育関係（幼児教育を含む）に関する記事
- ③ 国際関係に関する記事（日本との関係性を示している記事内容を中心に扱う）



台紙に貼られた新聞記事



三つの分野に分類



三つの分野のスクラップブック



スクラップブックの内側の様子

3. 新聞を活用して生徒の活動を地域に紹介する

1) 新聞社への取材依頼

本校では、生徒の活動を地域の方々に広く知ってもらうために、新聞社への取材依頼を積極的に行っている。この活動は保護者をはじめとする地域の方々や同窓生から高い評価を得ている。

取材依頼から取材への手順は、まず、①取材をしてもらいたい内容を記した取材依頼票をファックスにて各新聞社に送る、②学校側が指定した日時と場所にて取材を行ってもらう、である。下記の左側は今年度の体育大会の取材依頼分である。右側は取材していただき記事になったものを切り抜き、保管用の台紙に貼ったものである。

記 事 集 録			
刊 日	学 校 名	刊 日	題 名・記事内容
刊日	兵庫県立柏原高等学校	4070272-1188 4070272-1188	校長 井上 千早直

ポイタ高 体育大会 日程依頼	
内 容	<p>令和2年度兵庫県高等学校 体育大会予選の日程で依頼します。 今年度はコロナウイルス感染症の影響で開催している体育大会日程、内容を大幅に変更して行うことになりました。また、保護者・地域の方の参加もできません。生徒達は自分たちでできることを精一杯行います。 ご支援をお願いします。敬請ご返信ください。</p> <p>1. 日 程 令和2年9月16日(水) (雨天時は17日(木)に繰上。18日(金)以降は延期はなし) 主 場 所 本校グラウンド</p> <p>2. 予選の種目 【男子の部】 1. 野球 100m (決勝) 2. 女子 100m (決勝) 3. 男子 400m (決勝) 4. 男子 7.5mリレー 5. 女子400mリレー (予選) 6. 男女混合バレーボール 7. 男子5人制ソフト 8. 女子ソフト 【女子の部】 9. 混合リレー (決勝) 10. 男子400mリレー (決勝) 11. 男女混合リレー (決勝) 12. 男女混合リレー 13. 男女混合リレー 14. 男女混合リレー 15. 男女混合リレー 16. 男女混合リレー 17. 男女混合リレー 18. 男女混合リレー 19. 男女混合リレー 20. 男女混合リレー 21. 男女混合リレー 22. 男女混合リレー 23. 男女混合リレー 24. 男女混合リレー 25. 男女混合リレー 26. 男女混合リレー 27. 男女混合リレー 28. 男女混合リレー 29. 男女混合リレー 30. 男女混合リレー 31. 男女混合リレー 32. 男女混合リレー 33. 男女混合リレー 34. 男女混合リレー 35. 男女混合リレー 36. 男女混合リレー 37. 男女混合リレー 38. 男女混合リレー 39. 男女混合リレー 40. 男女混合リレー 41. 男女混合リレー 42. 男女混合リレー 43. 男女混合リレー 44. 男女混合リレー 45. 男女混合リレー 46. 男女混合リレー 47. 男女混合リレー 48. 男女混合リレー 49. 男女混合リレー 50. 男女混合リレー 51. 男女混合リレー 52. 男女混合リレー 53. 男女混合リレー 54. 男女混合リレー 55. 男女混合リレー 56. 男女混合リレー 57. 男女混合リレー 58. 男女混合リレー 59. 男女混合リレー 60. 男女混合リレー 61. 男女混合リレー 62. 男女混合リレー 63. 男女混合リレー 64. 男女混合リレー 65. 男女混合リレー 66. 男女混合リレー 67. 男女混合リレー 68. 男女混合リレー 69. 男女混合リレー 70. 男女混合リレー</p>



2) 令和2年度取材実績

令和2年度の新聞掲載実績は70件であった。コロナ禍の中、6月以降の取材になり。例年より少なかったものの、生徒たちの活躍で9月以降に取材していただく機会が増えた。取材内容は、部活動での生徒たちの活躍が中心になる。本年度の取材内容は左の一覧表のとおりである。

No.	新聞社	記事日付	記事の見出し	取材対象の教育活動・部
1	神戸	6月30日	柏原高生が実地調査 車いす地図に縮小版	インターアクト部
2	丹波	7月2日	車いすで観光も安心	インターアクト部
3	丹波	7月5日	総体「代替大会」近づく	運動部全般
4	丹波	7月16日	旧丹地区18チームが参戦	硬式野球部
5	讀賣	7月19日	柏原 コールド発進	硬式野球部
6	神戸	7月19日	柏原13安打 コールド発進	硬式野球部
7	丹波	7月19日	「丹波の魅力」を探究	第1学年探究Ⅰ・総合
8	神戸	7月24日	高見(柏原)ライバルを退ける 黒川(柏原)悔しき残る1位	陸上競技部
9	丹波	7月30日	柏原、丹波対決制す	硬式野球部
10	朝日	8月20日	熊本水書義援会の活動 柏原高生 被害者に寄り添う	インターアクト部
11	丹波	8月30日	伝統の70キロ夜間歩行 目指すは宮津の海岸	ワンダーフォーゲル部
12	丹波	9月6日	「フタコ」問題を考える	第2学年探究Ⅱ
13	神戸	9月11日	柏原高生 商品開発を学ぶ	第2学年探究Ⅱ
14	毎日	9月13日	秋の高校野球 県大会が開幕 柏原など勝利	硬式野球部
15	神戸	9月17日	柏原高校、3カ月遅れの体育大会 伸び伸びと生徒や躍動	全校
16	丹波	9月17日	柏原高ギター部を応援	ギター部
17	神戸	9月24日	NIE教育に新聞を 役立つ情報発信 心掛け	第2学年選択科目「教養社会」
18	神戸	9月27日	水たれ公園野外ステージで音楽フェス 練習の成果 観客に届け	ギター部
19	毎日	9月27日	野外で元気に演奏 丹波 音楽フェスで高校生ら	ギター部
20	丹波	10月1日	柏原生応援フェス盛況	ギター部
21	丹波	10月1日	全国総文で研究奨励賞	理科部
22	丹波	10月8日	丹有高校新人戦成績	剣道・卓球・バスケットボール部
23	神戸	10月13日	ひょうごスポーツ広場	陸上部
24	讀賣	10月17日	柏原高が県教育長賞	理科部
25	讀賣	10月18日	逆境負けない探究心	理科部
26	神戸	10月20日	全国高校バスケット県予選 24日開幕	男子バスケットボール部
27	丹波	10月25日	柏原高生が移住相談	第2学年探究Ⅱ
28	神戸	10月25日	高校駅伝丹有予選 男子3位柏原も県大会へ	陸上競技部
29	神戸	10月25日	スポーツ 丹有地区高等学校新人大会成績	剣道・卓球部
30	神戸	10月26日	野外に響く歓声、演奏 ツリインクや柏原高の吹奏楽	吹奏楽部
31	神戸	10月31日	丹波市長、市議ダブル選へ 高校生が啓発ポスター	美術部
32	丹波	11月1日	男子3チームが県へ 丹有高校駅伝	陸上競技部
33	神戸	11月2日	県高校新人大会成績	少林寺拳法部
34	神戸	11月6日	県高校駅伝	陸上競技部
35	神戸	11月7日	県高校新人大会(ソフトテニス)成績	ソフトテニス部
36	神戸	11月8日	県高校新人大会(ソフトボール)成績	ソフトボール部
37	神戸	11月10日	県高校駅伝成績	陸上競技部
38	神戸	11月10日	県高校新人大会(ソフトボール)成績	ソフトボール部
39	神戸	11月11日	県高校駅伝 男子 柏原40位	陸上競技部
40	神戸	11月14日	県高校新人大会(卓球)成績	卓球部
41	丹波	11月15日	「最後まで頑張れた」 県高校駅伝 柏原男子40位	陸上競技部
42	丹波	11月19日	10校が美しい景色 丹有地区高校連合音楽会	吹奏楽部
43	丹波	11月22日	リモートで結ぶ台湾学生との交流	第2学年総合
44	丹波	11月26日	遊ぶ遊ぶを工夫 園原を招き保育実習	第3学年選択科目「子ども文化」
45	丹波	12月3日	柏原高校少林寺拳法部 県新人戦で頂点	少林寺拳法部
46	丹波	12月3日	クライミング県8位	ワンダーフォーゲル部
47	丹波	12月6日	油絵画で県総文特選	美術部
48	丹波	12月10日	茶道で思いやり学ぶ「日常生活に生かす」	第1学年「家庭科」
49	神戸	12月19日	近畿大会成績	少林寺拳法部
50	神戸	1月15日	菓子を話題に日韓交流 柏原高と現地の高校 ネットで	インターアクト部
51	丹波	1月21日	サッカー試合球審贈 柏原高OB 現役部員に	サッカー部
52	神戸	1月22日	磨いた演技12人が全国へ	少林寺拳法部
53	神戸	1月24日	県新人大会成績	サッカー部
54	丹波	1月28日	近畿で善戦、12人全国へ	少林寺拳法部
55	神戸	2月2日	研究成果、オンライン発表	第1・2学年探究・総合
56	朝日	2月2日	柏原高生 文化活動で表彰	インターアクト部・第1学年生徒
57	朝日	2月2日	地域課題など研究成果発表	第1・2学年探究・総合
58	丹波	2月11日	活動に評価 2賞受賞	インターアクト部・第1学年生徒
59	朝日	2月13日	丹波豪雨の記憶を伝える 柏原高生 被災者から聞き取り	インターアクト部
60	丹波	2月18日	記憶・教訓 聞き取り 市豪雨被災の市島で	インターアクト部
61	神戸	2月20日	自転車交通事故防止プログラム 柏原高校 県警から表彰	第1学年
62	丹波	2月25日	全国「探究」発表会 柏原高校2人が銀賞・銅賞	第2学年探究Ⅱ、 第3学年選択科目「グローバル」
63	朝日	2月26日	地域課題 解決へ提言 柏原高生、全国発表会で銀・銅賞	第2学年探究Ⅱ、 第3学年選択科目「グローバル」
64	毎日	2月26日	読書画中央コンクール 奨励賞のみなさん	美術部
65	神戸	2月28日	丹波市防火ポスター	美術部
66	毎日	3月1日	「幸せ度」満点の笑顔 高校生が向き合い当事者研究	第2学年探究Ⅱ
67	丹波	3月4日	卒業生答辞	第3学年卒業生代表
68	神戸	3月9日	生徒が被災者聞き取り	インターアクト部
69	丹波	3月11日	自転車交通事故防止プログラム 目標達成で県警表彰	第1学年
70	丹波	3月18日	柏原高「ようこそ先輩」3代柏原が登壇	全校

3) 取材記事の3年間保管

取材記事は下記のクリアファイルに入れて3年間保管し、取材対象となった生徒の進路時の実績証明として使用する。



新聞を身近なものに

兵庫県立加古川南高等学校 校長 高見 政人
教諭 出口 友美

1. はじめに

本校は昭和 58 年に開校し、平成 13 年に総合学科に改編して本年度で 20 年目を迎えた。2020 年度は 2・3 年次 6 クラス、1 年次 5 クラスの計 17 クラスからなり、2 年次からは生徒たちが自分の興味関心に合わせた科目選択を行い、各々の研究テーマを掲げて課題研究を行っている。

2019 年から本校は NIE 実践校の指定を受け、本年度は 2 年目の実践であった。本年度は主として 1 年次生を対象として「NIE 活動」を行った。

年度当初に 1 年次生を対象に実施したアンケートによると、家庭で新聞を購読していると答えた生徒が 95 人、購読していないと答えた生徒が 103 人であった。また、日ごろ新聞を全く読まないと答えた生徒が 109 人いた。以上のことから、生徒たちの過半数が新聞になじみがないという前提のもと、NIE の活動を行うこととなった。

NIE 活動の目的として、「新聞に触れる機会を増やし、新聞記事を通して、広く社会のことを知る」ことを掲げた。高校 1 年生の今、少しでも社会への関心を高めてほしいという思いがある。そのためにも、新聞を購読する家庭が減少傾向にある今、新聞を手にする機会や目にする機会を増やすことが必要

であると考えている。生徒たちが主体的に新聞に触れるようになることを目指して、1 年間取り組んだ。

新聞は職員室前のフリースペースに設置をした。「NIE ひろば」と名付け、生徒や教職員がいつでも自由に新聞を手にとれるようにした。



▲ NIE ひろば

2. 実践の概要

- 5 月 新聞記事の配信
- 6 月 掲示物・NIE タイム開始
照楠ホールに新聞設置開始
- 7 月 生徒による掲示物作成①
- 9 月 生徒による掲示物作成②
まわしよみ新聞実施・作成
- 10月 NIE 講演会
- 11月 生徒による掲示物作成③
- 1 月 生徒による掲示物作成④

3. 実践の内容

(1) NIE 掲示物

本年は新型コロナウイルス感染症拡大に伴う臨時休校が4月から5月にかけて行われた。その際に「年次のホームページ」を活用し、「心をたもつヒント」という神戸新聞のコラムを生徒に発信した。

その発信をきっかけとして、生徒が空いた時間に教室内で新聞記事に触れられるように、新聞掲示のスペースを各 HR 教室に設けて掲示した。



▲NIE 掲示物

(2) NIE タイム

1年次では、朝の SHR で「朝活」を実施しており、小テストや読書の時間を設けている。毎週火曜日に「NIE タイム」を設定した。

NIE タイムでは、1枚のプリントに複数枚の記事を載せたものを読み、考えたことや感じたことをコメントとして書き込む取り組みを行った。教員側は約1週間の新聞記事から、生徒の興味関心に合いそうなものや生徒に読ん

でほしい記事を選び、A4 サイズや A3 サイズのワークシートを作成した。さらに発展的な内容として、天声人語の書き写しや、記事に対する意見文の作成、英字のネットニュースの掲載なども行った。



▲NIE タイム ワークシート

(3) 生徒が作る NIE 掲示物

前期2回、後期2回の計4回、NIE 係が新聞を切り抜いて掲示物を作成した。

第1回・第2回では、NIE 係の一人一人が自身の興味を持った記事を自由に選び、考えたことや感じたことをコメントとして書き入れた。第3回では現代社会の授業・考査の内容と関連付け、「現社の時事問題に出そうな内容」を中心に「みんなで現社の時事問題で点数を取ろう！」というサブテーマの中で作成した。また、第4回には各クラスにおいて一つのテーマを掲げさせ、それに即した掲示物を作成した。「水泳」「共通テスト」のように、個性豊かな作品となった。



▲各教室前の掲示物（生徒作成）



▲授業の様子

（４）まわしよみ新聞

陸奥賢氏が 2012 年に作り出した新聞あそびの一つである「まわしよみ新聞」を国語総合 A の授業で実施した。

まわしよみ新聞とは

- ①さまざまな新聞を持ち寄ってまわしよみを行い
 - ②気になった記事を選んで切り取り
 - ③プレゼンを行ったうえで
 - ④最終的に記事を 1 枚の模造紙に貼り
 - ⑤ 1 枚の壁新聞を作り出す
- という取り組みである。

生徒同士の会話の中で、「そんな記事見つけたんや、すごい」と、自分が普段は読むことのない記事を選び出した友人を認める発言があった。また「この記事に出てきている人、自分の知り合いで…」や、「この事故びっくりしたよね」というように、記事の内容に踏み込んで話す姿が見られた。この活動では、新聞を広げて自由に記事を切り取り、模造紙に書き込む過程を楽しむことに加え、成果物を通して普段よりも多くの記事に触れることができた。新聞を「読む」だけでなく、対話を引き出すことにもつながった。



▲まわしよみ新聞の校内掲示

（５）NIE 講演会（記者派遣事業）

10 月には読売新聞姫路支局の米井吾一支局長の講演会を実施した。「新聞記者に聴く 新聞のあれこれ」と題し、新聞の読み方や文章のまとめ方についてのお話をうかがった。

各々がその日の読売新聞の朝刊を開き「新聞をめくる」という経験をしながら、新聞の「1 面」や「見出し」の持つ役割、配置の工夫を学んだ。文章を読む際には、

- ①「書きたい」ことをもつこと
- ②相手に分かるように、常に相手を意識して書くこと
- ③一文一文は短くすること
- ④文章に具体性をもたせること

⑤書きたいものについて観察と描写を丁寧に行うことが必要だと教わった。

さらに、新聞記者という仕事のおもしろさや、印象深かった出来事についてお聞きするなかで、将来の働き方についても考える機会となったようだ。この講演を機に、新聞に触れてみようと思っただ生徒が多かった。



▲NIE講演会の様子

4. 成果と今後の課題

1年間のNIE活動を振り返ると、新聞に触れ、社会を知るきっかけづくりを行うという点においては、実践の成果が表れたと考えている。21回のNIEタイムを通して、生徒の「読む力」「書く力」についても多少なりとも育めたのではないだろうか。

一方で、本来目指したい「主体性」を培うところまでは至っていないのが現状である。NIE実践指定校としての活動は2年間と定められているが、今後も年次での新聞の活用を続けていく。NIEタイムでは書くだけにとどまらず対話の時間を設けたり、新聞への投書の取り組みを行ったりと、少しずつ変化をもたせていきたい。それらの活動

から、今以上に新聞記事を身近なものにとらえる生徒を増やしていきたい。加えて、NIE活動を独立した位置づけにするのではなく、各授業との横断的な学びのしくみを築いていきたい。「産業社会と人間」「総合的な探究の時間」「課題研究」の授業では、各自が抱く疑問やテーマの解決に努めるが、新聞記事が課題の解決への糸口となれば理想的だ。

NIEの活動は成果がすぐに表れるものばかりではないだろうが、生徒たちの小さな変化や気づきを見逃すことなく、活動を行っていきたい。



▲NIE係 活動の様子

<参考文献>

陸奥賢『まわしよみ新聞をつくろう！』
創元社（2018年6月）

新聞を活用した主体的な学び（2）

兵庫県立三田西陵高等学校 校長 奥山 勝巳
教諭 鹿田 尚宏

1. はじめに

本校是三田市の住宅街（ウディタウン）の一角にある創立28年目の全日制普通科高校である。2011年より、将来幼稚園教諭や保育士をはじめとする教育関係への進学を目指す「子どもみらい類型」を設置し、特色ある授業を展開している。

本校の進学に関する取り組みについては、総合型選抜（旧 AO 入試）における専門課題、面接、小論文を利用した受験で進路を決定する生徒が比較的多い現状である。特に小論文入試では課題文（新聞記事や史資料などからの引用文など）を読み解き、自らの考えの記述が求められる傾向がある。また新共通テストに対応すべく史資料を読み取る力の育成なども必要となってきた。昨年度 NIE 実践指定校に選出され、2年目を迎える本年度も、各教科の協力を得て、新聞を活用しながらの主体的で、広い視野に立った学びができる環境づくりに取り組むこととなった。

2. 実践に向けての環境づくり



新聞を活用した授業など



に取り組むため、新聞を閲覧できる場所を設置した。

昨年度は図書室前（2階）のスペースに、NIE についての説明とともに3社の新聞を置いた。しかし実際に新聞を活用できたのは3年生がほとんどで、下級生には活用しにくかったため、本年度は各学年の階に設置し、昼休みや放課後に教室で自由に読むことができるようにした。



三田西陵高校はNIE（Newspaper in Education）推進事業に参加しています。

●物事の本質を見極めるには、新聞を毎日読むことが効果的！
情報が、リアルタイムに流れ、みんなのものへ届くという点は、インターネットにはない強み……。しかし！新聞を読むことで、

(1) 世の中の流れがわかります
インターネットでは、情報を収集すると、瞬間に化情報が溢れているので、何が重要な情報かわかりづらい。それに対して新聞は情報を整理して、重要なものを掲載しています。

(2) 視野が広がります
インターネットでは、興味のある分野の情報のみを見ることがありますが、新聞は興味のない分野の記事にも触れることができます。

(3) 文章の構成を学ぶことができます
伝えたいことを、簡単に伝える、簡潔に字数を削ぐ、しっかりとした文章を書く経験をするには新聞が一番です。

(4) 入試にも役立つ
AO入試（エントリーシート）、推薦入試（志願書や面接の準備、近頃は課題文を題材で考えを述べます）、一部の私立二次試験（論述）、面接などの面接（面接時に読んだニュースを話題に持ち上げます）に活用することができます。

●三社の新聞を各学年で活用してください
朝日新聞（10～18時、19時以降）：朝日新聞・朝日新聞・朝日新聞
読売新聞（10～18時）：読売新聞・読売新聞・読売新聞

※各階に1冊ずつ配置します（4階は409教室、3階は309教室、2階は209教室の廊下に配置します）
※注意事項—必ず守ってください—
①授業中も読んでも構いません。読んだら元の棚に戻してください。置いた上で上の棚を閉じて戻さなくても大丈夫です。
②シートなどを折ったりしない。必要に応じてコピーを申し込んでください。
③おためしチャリティなどをしないでください。また、紙の裏で色紙を貼るなどの行為はしないでください。

3. さまざまな取り組み

(1) 新聞コラム掲示

本年度、国語科教員と図書室との協力により、本校図書室前の掲示板に「新聞コラム」を掲示した。大手新聞社に限らず、地方新聞などのコラムを通じて、わかりやすい文章に慣れ親しむことを目的として実施した。バックナンバーに関しては、随時図書室でも閲覧できるようにした。図書室を利用した生徒の多くが、一度は「新聞コラム」を手にして読んでいたようである。



(2) 2年 学校設定科目「教育入門Ⅱ」

本校特色類型である「子どもみらい類型」では、学校設定科目「教育入門Ⅱ」を設置している。1年次に講義や実習を通して幼児教育に関する学びを行う「教育入門Ⅰ」を履修し、2年次で初等教育に関する学びを行う。

今回、将来教職を目指す生徒たちに、教育に関する記事を取り上げ、現代の教育問題についてのレポート作成を課した。

普段、意識的に新聞を読むことがない生徒たちは、新聞からの情報収集に苦労している様子もあったが、グループを組んで情報交換を行うなどして取り組んでいた。

レポートは、「記事の見出し」、「記事の要約」、「記事に関する考えや意見を述べる」の3点をポイントに、裏面に新聞記事を貼付ける様式で作成させた。

取り上げたテーマはさまざまに及んだが、なかでも多かったのが、①コロナ禍における休校措置に関する記事、②入試に関する記事、③小学校の給食事情に関する記事であった。

今回の取り組みを通じて、少しでも生徒たちにとって教育に関する諸問題への関心が高まることを期待する。

さらには、1年次から現代の教育問題に触れさせることで、生徒たちのキャリア形成に役立てたいと考える。



<p>教育入門Ⅱ「教育に関する新聞記事について考える」</p> <p>記事名: _____</p> <p>記事の要約: _____</p> <p>記事に関する考えや意見を述べる: _____</p> <p>新聞記事の貼付け欄</p>	<p>教育入門Ⅱ「教育に関する新聞記事について考える」</p> <p>記事名: _____</p> <p>記事の要約: _____</p> <p>記事に関する考えや意見を述べる: _____</p> <p>新聞記事の貼付け欄</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(3) 2年 地理歴史科「日本史B」

●「日本史NEWS」発行

2年生日本史選択者(98人)を対象に、授業補助プリントとして「日本史NEWS」を発行した(12月10日時点で第8号まで発行)。

新聞記事の活用方法としては、授業担当者が日本史に関する新聞記事を切り取り、プリントにして紹介した。また授業で扱っている

内容でなくても、記事が新聞に掲載されたときには、随時授業で配布した。

取り組みは、次の2点を目的に展開した。

①教科書で学習している内容について、新聞記事を通じて最新の情報と視点により、生徒たちにとって教科書の記述内容を補足するだけでなく、興味・関心を持たせることができる。

②教科書以外でも日本史について学ぶ機会が広がっていることを気づかせることで、日常的に日本史を学ぶ姿勢が身につくことが期待できる。

近年、各社新聞は歴史をテーマとした記事（マニアが喜びそうな内容）を目にすることが多くなった。

今回の取り組みでは、何人かの生徒が歴史に興味を持ちはじめ、生徒同士で面白そうな記事を探す光景も見られるようになった。これを機会に、新聞だけでなく歴史に関する書籍（文献）にも触れ、主体的な学びにつながることを期待する。



(4) 3年 家庭科「調理」

3年生の「調理」選択者(33人)を対象に、授業時間内に新聞を読み、「食」に関する記事を取り上げ、考察、グループワーク、「食育クイズ」の作成を行った。

●授業の流れ

- ① 自由に新聞を閲覧し、「食」に関連する記事を見つける。その中から、興味のある記事を取り上げ、さまざまな課題を発見する。
- ② 記事から課題や考察をまとめ、レポートする。
- ③ グループ(5~6人)に分かれ、それぞれの記事の気づきを発表する。食生活の問題発見をし、その解決の方法を話し合う。
- ④ 話し合った内容をまとめ、グループごとに発表する。
- ⑤ 「食育クイズ」を作成する(廊下に展示)。
- ⑥ 意見や感想を共有して振り返りを行う。



【新聞を閲覧している様子】



【記事から考察している様子】



【食育クイズの作成】

●成果と課題

新型コロナウイルスにより、これまでの記事とは異なる内容のものが多く、現代社会の課題や現状を知り、どのような解決方法があるかを各自が考える良い機会となった。新聞には、幅広い視点から記事が構成されており、現在の社会の動きを知るだけでなく、さまざまな人々の取り組みにも目を向け、視野が広がったようである。自分たちが新聞を通して、食に関して知り、発信していくことが、食育の推進にもつながると考える。

今回は、例年と異なる授業展開となったため、限られた時間の中での取り組みとなった。

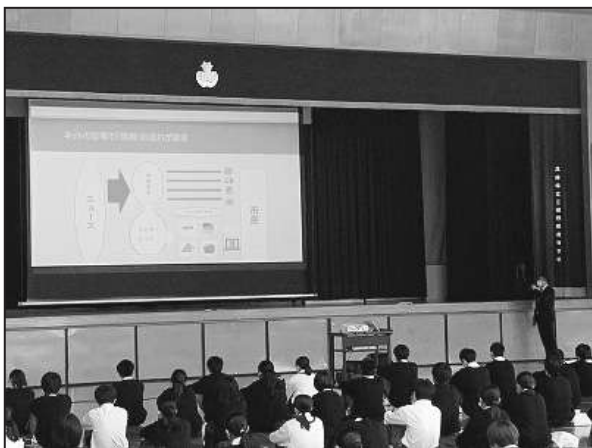
今後は、科目「調理」の学びとして、さらに新聞記事などを参考にし、環境問題に対応した「エコ調理」などを行うなどの展開にもつなげていきたい。

(5) 1年「総合的な探究の時間」

●新聞記者派遣事業

本校の「総合的な探究の時間」では、“3年間を見通したキャリア形成”として、1年で「高校生基礎力の育成」、2年で「汎用的能力の育成」、3年で「進路実現に向けて」を各テーマに探究活動を展開している。

2年目の今回も1年生（199人）を対象に、新聞記者派遣事業を活用し、「新聞を読むことについて」と題して、情報の集め方と伝え方を中心に、日本経済新聞社より記者を招いて学習会を開催した。



情報の多様化で、多くの人たちは新聞に代わって SNS を中心に、自らの知りたい情報のみを入手することが多くなった。また、誰もが情報の発信者・提供者となりはじめた。

そのような中で、情報の偏りやフェイクニュースの横行・巧妙化などが進み、生徒たちも時としてうのみにして、そのことがさまざまなトラブルの引き金になってしまう。

今回の学習会は、SNS だけではなく新聞も活用しながら、大量の情報からいかに必要なものを収集し、分析・活用する（自分の伝えたいことをいかにして伝える）かを学ぶ良い機会となった。

これを機に、スマホ片手に指での情報検索や発信が中心の生徒たちに、新聞による情報の整理・伝え方の意味を再度確認してくれることを期待したい。

4 成果と今後の課題

—2年間の指定を受けて—

「新聞を活用した主体的な学び」をテーマに2年間取り組んできた。年々生徒たちの日常的な新聞活用が少なくなっている実情は否めない。しかし本年度は新聞閲覧場所を各学年フロアに設置したことで、昨年度に比べて新聞を手にする生徒が見られるようになった。

推薦入試など面接練習の質問事項「最近気になったニュースはありますか？」に答えるために、3年生が現代の多様な情報ソースの中からあらためて新聞を活用する様子も見られるようになった。

生徒たちが気軽に新聞を手にして、「主体的な学び」ができる環境づくりをしてきたが、まだまだ道半ばである。

新聞を読むことで多面的・多角的に社会の実情を知ることの大切さを意識させ、生徒たちの進路実現の一助となるような取り組みを、今後も継続的に計画していきたいと考える。

私たちの街・神戸について記事を書いてみよう

兵庫県立神戸鈴蘭台高等学校 校長 尾原 周治
教諭 丸尾 志津



1. はじめに

神戸鈴蘭台高等学校は2007年に鈴蘭台高等学校と鈴蘭台西高等学校の発展的統合により生まれた神戸市北区にある全日制普通科高校です。所在地は旧鈴蘭台高校になり、2020年度入学生が14回生になります。

六甲山系の中に建ち、自然に恵まれた環境の中で生徒たちは文武両道を目指し日々研さんしています。

2年生の「総合的な探究の時間」では高大連携を行い、興味関心に応じて講座を受講し、1年間かけて大学や専門学校の先生から学ぶ取り組みを行っています。その中の一つ「私たちの街・神戸について記事を書いてみよう」の講座は「話す力」「考える力」「表現する力」を養うことを目的とし、2019年度に設定し、本年度が2年目となります。新聞の作り方を学び、地元の企業経営者や、行政にかかわる方、地域に根差したさまざまな取り組みをされている方々にご協力を得てインタビューを行い、新聞記事を書くというものです。本年度の講座の選択者は12人でした。

本年度は新型コロナウイルス感染対策の緊急事態宣言による休校のため、当初の日程を大幅に変更することになりましたが、回数としては前年とほぼ同じ回数の授業実施ができました。

2. 新聞の設置場所と活用について

2年生の「総合的な探究の時間」で新聞制作に取り組むことを念頭に入れ、2年生のフロアである生徒棟3階の生徒の動線のスタート地点にあたる特別教室の廊下に新聞を設置しました。昨年度は一度に4種類購読し、量が多く比較が難しいとの指摘があったため、9～10月に「朝日新聞」「神戸新聞」「産経新聞」を購読し、11～12月に「毎日新聞」「日本経済新聞」「読売新聞」を購読し比較できるようにしました。

全学年、全クラスに案内をして、自由に活用できるよう昼休みと放課後は特別教室を開放して新聞を読めるようにしました。3年生の面接入試対策などでの活用はもちろん、1年生の現代社会の授業では、週に1回ペアワークで最近のニュースを取り上げるため情報収集に役立つようです。2年生の担任の先生方も、新聞を活用し、自らの興味関心に応じてトピックを見つけ、生徒にさまざまな情報を与えてくださいました。





また本年度は、過去の記事を探しやすいように使用されていないロッカーを使用し、日付ごとにまとめて整理しました。

整然と整理され、10日ごとにロッカーに入っているため、バックナンバーも探しやすいと好評でした。



3. 実践内容

週1時間16回(最後の成果発表2時間を含まない)を学期ごとに大きく三つに分けて取り組みました。緊急事態宣言が解除された6月より第1回目が始まりました。



まずはじめに新聞に目を通して、どのよう

に記事が書かれているのか、実際に新聞が出来上がるまでにどのような工程で作られているのか、またインタビューを行うにあたり、どのようなことに気をつけるのかなどを神戸新聞NIX推進部の三好正文シニアアドバイザーから学びました。事例を交え「機械的に質問せず、関心を持った話題は突っ込んで聞こう」「質問に困ったときは、過去や未来につなげることが大切」「記事を書くとき、その人のよさが伝わる言葉選びを」「分かりやすい言葉で書く。日ごろ使わないような難しい表現、言葉は厳禁」などの助言をいただきました。

生徒たちは『「相手への敬意を持つ』という言葉が心に残った』と話していました。また、「会話を楽しみながらインタビューしたい』『『ファン』になった気持ちでインタビューに臨むことが大切』など、さまざまなことを感じたようでした。

次に班ごとにインタビューをする時、協力者にどのようなことを聞きたいかをホームページなどで確認しながら話し合いました。

7月3日の授業では、生徒たちが「将来の夢」をお互いにインタビューし、記事を作成しました。7月10日の授業では、三好アドバイザーがそれぞれの記事を講評し、新聞の作り方についても指導いただきました。生徒は四苦八苦しながらも手ごたえを感じたようです。

こういった準備のあと、2学期にはいよいよ協力者に学校にお越しただいて、4名を1班、計3班に分かれた生徒からのインタビューを受けていただきました。



インタビューの方法は、事前に班ごとに考

えた質問の内容を伺う形式をとりました。協力者の方は、時間を区切り、三つの班を移動し質問に答えます。協力者の方と近い距離でお話をきくことで、生徒たちにはよい意味での緊張感を持たすことができました。すべての生徒たちにとって、初対面の方にインタビューをするという体験は初めてのことで、しかも「社長」という肩書を持った大人に話を聞くということもあり大変緊張していました。



昨年度「下調べしすぎず疑問に思ったことを聞くとよい」とアドバイスをいただいたため、何も下調べをせずに質問をしたところ、協力者の方より「下調べがあまりにも足りない」というおしかりがあったため、本年度は、各自でホームページを閲覧して基礎情報を入手し、その上で質問を考えておくことを重視しました。結果として、本年度お越しいただいた協力者の方には、「現在の高校生が考えていることや疑問を聞いたりでき、大変うれしい」、「とても楽しかった」という嬉しいお声をいただきました。

生徒の様子を見ていると、きちんと大人と話をするのはほぼ初めてということもあり、ホームページなどで調べてみたものの、どのように聞いたら良いのか、また、質問したところから話を広げることができず、言葉に詰まる場面も多々見られましたが、回数を経るごとにどんどんインタビュー活動が上手になっていくのを感じました。

最後にいよいよ新聞制作です。どなたを誰が担当するか決め、A3用紙に下書きをしていきま

す。インターネットを利用して調べた内容や、班員が得た情報、インタビューの際にいただいた資料、インタビューの様子の写真などをレイアウトにもこだわりながらまとめていきます。なかなか思い通りにいかず、生徒も苦労したようです。

最終的には班員の作成した記事を模造紙に張り付けて1枚の大きな壁新聞が出来上がりました。班ごとに趣向を凝らしたものとなりました。

4. 成果と課題

1月29日(金)には校内での成果報告発表会を行い、1年間の活動を発表しました。生徒たちは、自分の考えたこと、調べたことを記事にしたり口にしたりにする難しさと面白さを十分に感じたようでした。



また、2月9日(火)～2月28日(日)の20日間は完成した新聞を最寄り駅である神鉄鈴蘭台駅のすずらん広場に展示をして地域の方にもご覧いただくとともに、協力者の方にもご送付し、大変喜んでいただきました。

以下、班ごとの完成した壁新聞と、生徒たちの主な感想・アンケートをまとめたものです。



この1年間で人との会話、コミュニケーションがどれだけ大切かを学ぶことができた。少しずつ取材インタビューの経験を重ねていくにつれて、緊張することなくインタビューをすることができ、とても面白かった。

「インタビューは楽しむもの」ということがすごく分かった。

事前にいろいろ考えていないと、質問が途切れたり、質問が単純になって内容が薄くなってしまうので準備が大切なことを実感した。

ここで得られた文章の書き方などの経験を進路などで生かしていきたいと思います。

「情報を整理して相手に伝えることが大切」
「5W1Hの6原則を正確に取材、その上で特に重要な点を掘り下げる」などさまざまなことを学びました。

記事をまとめるのはとても大変で、重要な物事を把握する、内容を短くする、正確にまとめる、などの作業はとっても難しかったです。自分でまとめたり考えたり見出しをつけたり、すべてがとっても楽しかったです。

これからは知らないことは調べたり、質問したい。知識が増えるし無知でなくなるようにしたい。

インタビューの時に分からないと思うことをすぐに聞かなければ後悔する。それを学んだ。

このように、生徒たちもインタビューに必要なコミュニケーション力や文章力がこれからの世の中で求められる力であることに気づき、日々の活動や学習にも取り入れようとしてくれたことも大きな成果だと思います。

2020年度は前年度の反省を踏まえ、事前に協力者の会社などを調べ、質問を考えさせたことで協力者様とのスムーズな会話ができたとと思います。生徒ももちろん努力はしたと思いますが、やはりご協力いただいた皆様の仕事に対する姿勢や、地元神戸を大切に思う気持ちが生徒たちを動かしたからだと思います。

また、はじめは上手くできなかったインタビューも、回数を経るごとに慣れて上手になってきているのを見ると、経験を積ませることの大切さを実感しました。

しかし、やはり社会の基礎知識や語彙(ごい)が圧倒的に少ない生徒が多く、質問以前に社会のことを教える必要性を痛感しました。

今後も社会的常識や語彙(ごい)など、新聞などを通して学ぶことができたと思います。

「学びに向かう力」を育む新聞活用

兵庫県立明石西高等学校 校長 片岡 正光
教諭 上田 多江子

1. はじめに

本校は明石市西部に位置する全日制高校であり、普通科7クラス（そのうち1クラスは教育類型）と、国際人間科1クラスを設置している。

年度当初に1年生普通科対象に行ったアンケートでは、「家庭で新聞を購読しているか」に「購読していない」と答えた生徒が60.1%であった。また「日常で新聞を読むことがあるか」という質問には、「ほとんど読まない」79.1%「今まで読んだことがない」5.8%であった。身近に新聞がなく、新聞が生徒にとって遠い存在であることが分かった。

そこで、NIE活動のテーマを『「学びに向かう力」を育む新聞活用』と決め、学校全体での新聞活用を推進することとした。

2. 新聞活用実践① NIE コーナーの設置

図書室前にNIEコーナーを作り、生徒が自由に新聞を見ることができるようにした。

机の上に1週間程度の新聞を並べ、その前の掲示板には教職員が選んだ新聞記事、その隣のホワイトボードには図書委員が選んだ新聞記事を生徒のコメント付きで掲示した。



(図書委員 NIE コーナー)

3. 新聞活用実践②各教科での取り組み

NIEの活動を全校挙げての取り組みとするため、各教科へ新聞活用を呼びかけた。本年度は以下のような取り組みを行った。

国語	「現代文A」で、新聞記事の要約・自分の意見を書く練習をした。
地歴公民	「現代社会」で夏休みの課題として、新聞記事の感想を書いた。「政治・経済」「倫理」「地理」で、時事問題を紹介・解説した。
理科	科学的な記事（ノーベル賞受賞者の研究内容、コロナウイルスに対する免疫や検査方法など）を授業内容と結び付け、読解問題の資料として利用した。
芸術	「美術Ⅰ・Ⅱ」「絵画」「ビジュアルデザイン」で、ニュースになっている美術に関する事項を授業で取り上げ、鑑賞や課題の参考とした。
英語	「異文化理解」「時事英語」でDaily Yomiuriから文化関連の記事を取り、授業で使用した。「情報コミュニケーション」でSDGsにかかわる記事を選び、プレゼンテーションを行った。
家庭	保育分野において、男性の育児休業に関すること、紙おむつ事情、児童虐待などの記事を扱い、授業で活用した。
総合	休校中に新聞記事を読んで意見を書かせた（2年生）。

4. 新聞活用実践③1年総合的な探究の時間

1年生普通科の「総合的な探究の時間」を、新聞を活用する授業の中心として取り組んだ。私（情報科）と地歴公民科教諭の2人で担当する、1単位の授業である。

「総合的な探究の時間」のうち新聞に関するものを、以下に紹介する。

<ネット上の新聞記事を読む（休校中）>

今年度はコロナ禍の緊急事態宣言により、休校から始まった。本校では生徒全員にGoogleのアカウントが配布され、Google Classroomで生徒への課題を連絡することとなった。

総合の授業としては、Web上で閲覧できる新聞や雑誌の記事を Google Classroom で知らせ、その感想を Google フォームで送ってもらい、感想の一部を Google Classroom で共有する活動を行った。

新聞記事としては、障がい者のマスク問題と9月入学制に関する記事を紹介した（参考文献参照）。

「自分たちにとっては当たり前の事がその人にとってはそうではなかったりするから、人それぞれの事情を理解し合うのは難しい事だと思いました。けど、みんながお互いに理解し合える世の中になっていけるようにしたいな、なれば良いなと思いました。」（1組）

「私は学校が休校になり、しんどいなと思っていただけ、それ以上に辛い思いをしている人たちがいるというのを知って、私だけがしんどい思いをしているわけではないのだなと思いました。まだこの先どうなっていくかは分からないけど、頑張らなといけないなと思いました。」（2組）

「僕たちだって苦手なこと、言い換えれば無理なことを自分の価値観だけで人に押し付けるのはよくないと思いました。」（3組）

「障害を持つ方にも使いやすいマスクを考えるべきだと思った。」（4組）

「私も、買い物に行った時に、あの人マスク付けない、と思ったことがありました。でも、この新聞を読んで障害があったりいろんな事情でマスクを付けれない人がいることが分かりました。普段は、笑を覚えていたことがコロナウイルスの影響で、周りが見えていなくなっていることに気づきました。」（5組）

「自分に見えているものだけを信じて正義が悪かを判断する行為は時には誰かを傷つけかねないのだと改めて思い知らされました。」（6組）

（Google Classroom で共有した感想）

<新聞の回し読み>

新聞を今まで読んでことがない生徒に、まずは読んでもらう体験をしてもらうため、新聞の回し読みを行うことにした。

まず実際読む前に、毎日新聞の記者が YouTube に公開している「【現役記者】新聞の読み方教えます!!」を見た。

新聞の回し読みの手順は以下の通りである。

- ① 4人1班になり、4日分の朝刊を回し読みする（学校に配達されていた朝日・産経・神戸がすべて入るように配慮した）。一番興味深いと感じた記事に、それぞれが付箋を貼る。
- ② 4日分の記事の中で、一番興味深い記事を選ぶ。
- ③ 2班で選ばれた記事を交換し、8人で一番興味深い記事を選ぶ。

クラスに5つずつ選ばれた記事は、次回の授業（スクラップノート作り）に利用した。



（新聞の回し読みをする生徒の様子）

<スクラップノート作り>

前回の授業では8人で1つの記事、計5つの記事を選んだ。それを担当者が8枚増し刷りし、自分達の班が選んだのとは違う記事をA4サイズのノートに貼り付けた。

生徒はその記事の内容を要約し、自分の意見を書いた。ノートはまた別の班の生徒に回して意見を書いてもらい、戻ってきたノートに再度自分の感想を書く作業を行った。



（生徒のスクラップノート）

<「神戸新聞の7日間」ビデオ視聴>

2学期前半は「防災・災害」をテーマとした探究活動の準備とした。

平成16・17年生まれの生徒に、大震災について自分事として感じられる資料を、と探していて辿り着いたのが、「阪神・淡路大震災か

ら 15 年 神戸新聞の 7 日間 ～命と向き合った被災記者たちの闘い～」の DVD である。

生徒は「私も震災についてもっと勉強しなくてはいけない」「新聞の力で、どれだけ多くの人々が救われたか、考えただけで感動する」などの感想を残している。



(DVD を見る生徒の様子)

<神戸新聞の災害パネルを読む>

神戸新聞社より、神戸新聞の連載「災害記」をパネルにしたものと、阪神・淡路大震災直後の写真のパネルをお借りすることができた。授業 1 コマを使って、「災害記」のパネルを回し読みした後、阪神・淡路大震災のパネルを見た。震災だけでなく豪雨・豪雪などの被害が県内であったことを知ることができた。阪神・淡路大震災のパネルは廊下に展示したので、他学年の生徒や先生もよく見ていた。

記事名	日付	頁数	掲載期間	掲載回数	掲載枚数	掲載期間	掲載枚数	掲載期間	掲載枚数
神戸新聞社「災害記」	1995.1.1	10	1995.1.1	10	10	1995.1.1	10	1995.1.1	10
神戸新聞社「災害記」	1995.1.2	10	1995.1.2	10	10	1995.1.2	10	1995.1.2	10
神戸新聞社「災害記」	1995.1.3	10	1995.1.3	10	10	1995.1.3	10	1995.1.3	10
神戸新聞社「災害記」	1995.1.4	10	1995.1.4	10	10	1995.1.4	10	1995.1.4	10
神戸新聞社「災害記」	1995.1.5	10	1995.1.5	10	10	1995.1.5	10	1995.1.5	10
神戸新聞社「災害記」	1995.1.6	10	1995.1.6	10	10	1995.1.6	10	1995.1.6	10
神戸新聞社「災害記」	1995.1.7	10	1995.1.7	10	10	1995.1.7	10	1995.1.7	10
神戸新聞社「災害記」	1995.1.8	10	1995.1.8	10	10	1995.1.8	10	1995.1.8	10
神戸新聞社「災害記」	1995.1.9	10	1995.1.9	10	10	1995.1.9	10	1995.1.9	10
神戸新聞社「災害記」	1995.1.10	10	1995.1.10	10	10	1995.1.10	10	1995.1.10	10

(パネルを見た生徒の感想)

<記者派遣>

神戸新聞 NIX 推進部の三好正文シニアアドバイザーをお招きして、1 年生対象に「災害の時代」をテーマに出前授業をしていただいた。阪

神・淡路大震災が起こった瞬間・直後の三宮の様子や、その他兵庫県で起こった災害の取材などができた。また、コロナ禍で被災した際の具体的な対策なども学べた。

生徒は「とても多くの方がなくなり、とても大きな損害が出たことは、必ず伝えていかねばならないと思った」「家族とも話し合っ、いざというときのために備えておきたいです」などの感想を書いていた。



(2020 年 10 月 6 日の神戸新聞明石版の記事)

<論文作りの参考文献>

2 学期後半から 3 学期にかけて、「防災・災害」にまつわるテーマを個々で決め、論文作りを行った。論文作成には「県立学校学びのイノベーション推進事業」で導入された Surface Go2 と Office365 のアカウントを活用した。

論文には参考文献として、本か新聞記事を引用することを課した。本を参考文献とする生徒が多かったが、コロナ禍の避難の問題などについて新聞より引用をする生徒もいた。



(新聞を参考文献にする生徒の様子)

5. 活動前後の新聞に関するアンケート

1年生普通科の「総合的な探究の時間」を受講する生徒に、新聞に関するアンケートを、年度当初と年度末の2回行った。結果から言うと、授業担当者としては残念な結果となった。

「日常で新聞を読むことはありますか」という質問に対して、年度当初と年度末では、ほぼ違いは見られなかった。

新聞を読む頻度	年度当初	年度末	増減
毎日・ほぼ毎日読んでいる	1.4%	2.3%	0.8%
時々読んでいる	13.7%	13.6%	-0.1%
ほとんど読まない	79.1%	78.9%	-0.3%
今まで読んだことがない	5.8%	5.3%	-0.5%

「これから新聞を読んでいきたいですか」という質問には、「読んでいきたい」が減って「読みたくない」が増えるという、残念な結果となってしまった。

今後	年度当初	年度末	増減
読んでいきたい	29.9%	24.2%	-5.7%
読みたくない	14.7%	23.0%	8.3%
分からない	55.4%	52.8%	-2.6%

「新聞に対して自分が抱いているイメージに、当てはまるものにチェックを入れてください（複数回答可）」という質問に対して、もっとも増加したのは「新聞を読むことは入試や就職に有利だ」である。共通テスト直後のアンケートであり、問題形式の変化からそのように感じた生徒が多くいたのであろう。その他、「新聞の必要性を感じない」「新聞の読み方が分からない」など、担当者としては増えてほしくない回答が増えてしまい、力不足を痛感している。

新聞に抱くイメージ	年度当初	年度末	増減
新聞は面白い	19.8%	23.8%	4.0%
新聞は面白くない	19.1%	22.3%	3.2%
新聞でしが得られない情報がある	36.3%	33.6%	-2.7%
新聞は難しい	49.3%	48.3%	-1.0%
新聞を読むことは入試や就職に有利だ	28.8%	39.6%	10.8%
新聞を読む時間がない	45.7%	47.5%	1.9%
新聞を読むことで自分の視野が広がる	31.7%	31.7%	0.0%
自分に役立つ情報は新聞に載っていない	5.0%	5.3%	0.2%
社会がより良くなるために新聞は必要だ	18.3%	14.3%	-4.0%
新聞の必要性を感じない	10.4%	14.3%	3.9%
新聞の読み方が分からない	7.2%	12.5%	5.3%
特にイメージがない	8.6%	13.6%	5.0%

6. 来年度に向けて

「学びに向かう力」を育むことをテーマに据えた活動であったが、その難しさが身に染みる1年目のNIEとなった。共通テストの形式変更を引き合いに出さずとも、新聞を読みこなすための知識や読解力は高校生のうちにはぜひとも身に付けておいてほしい力である。

2021年度に新たに取り組みたいことは以下のとおりである。

- ① NIEの新聞以外に中高生新聞2紙を図書室の予算で購入する。
- ② 1年総合的な探究の時間を担当する教員が変わっても活動を継続していけるように、今年度の活動を共有する。
- ③ 論文作りに新聞がさらに活かせるように、図書委員と協力して新聞記事のスクラップを行う。

<参考文献>

マスクについて／2 「ダメ」と言う前に
(<https://mainichi.jp/maisho/articles/20200516/kei/00s/00s/018000c>)

「9月入学制」賛成56%、反対17% 「学習遅れ回復」「議論拙速」
(<https://www.kobe-np.co.jp/news/kyouiku/202005/0013353725.shtml>)

【現役記者】新聞の読み方教えます！！
(<https://youtu.be/20b00Tuk49Q>)

読解力・表現力の養成を目指した新聞活用(山口県立下関南高等学校)
(https://nie.jp/report/selected/archive/20190220_012740.html)

新聞を活用した「地域や社会を知る」取り組み

兵庫県立西宮高等学校 校長 萩原 健吉
教諭 宮本 隆史

1. はじめに

本校は、近隣に関西学院大学上ヶ原キャンパスのある西宮市の「文教地区」に所在し、周辺の教育環境は大変良い。全日制単位制普通科に加え、兵庫県の公立高校では唯一の音楽科を設置している全校生徒数約 1,000 人の大規模校である。授業では単位制の特色を活かし、それぞれの興味・関心・進路に応じて共通教科はもちろん、商業をはじめ第 2 外国語、芸術等さまざまな特色ある選択科目を履修することができる。

NIE では「地域や社会を知る」を大きなテーマとし、新聞記事を活用した探求学習の実践に取り組み、総合的な探究の時間で、新聞を活用して「SDGs」を理解することを目標とし、新聞ポスターづくりと発表を行った。

本校 1 年次生に対して昨年 11 月に行ったアンケート調査によると、新聞を購読している家庭は約 53% と半数程である。生徒の大半は情報をインターネット等で得ており、新聞を読む機会は減ってきている。また、教科「情報」の授業でインターネットの情報は信ぴょう性に欠けることに触れ、新聞を活用した情報モラルの学習を行った。

2. 図書室に新聞の閲覧コーナーを設置

NIE で届く新聞については司書の先生の協力を得て、図書室に新聞閲覧コーナーを設置することにした。各紙を比較することにより、同じニュースであっても新聞社の視点により表現方法が違うことが一目瞭然である。図書室開館中であればいつでも記事を読むことができ、休み時間に熱心に読んでいる姿も見られた。今年度は、前期が 5 月から 9 月（8 月を除く）、後期が 10 月から 1 月の計 8 カ月と長期にわたり NIE で届く 3 紙と、本校で購入している 1 紙の計 4 紙を購読できたことは良いことであった。



3. 実践の内容

(1) 教科「情報」の取り組み

今年度は、コロナ禍の影響で 3 月から 5 月末まで 3 カ月にわたって休校措置がとられた。休校期間中はスタディサプリなどを使用し、インターネットによって、講義の受講や、諸連絡等のコミュニケーションを行うことができた。便利になった反面、生活のリズムが乱れる、やる気がおきない、精神的に不安定になるといった問題も発生した。

1 年次生全員が履修する教科「情報」では、情報モラルやゲーム依存症について新聞を活用した授業を行った。情報モラルにおいては、トイレットペーパーやマスクの買い占め

がネット上の書き込みから発生したことを紹介するなど、インターネット上の情報をうのみにせず、信ぴょう性を確認することが大切であることにふれた。また、ゲーム依存症については、ディスカッションを行い、なぜゲーム依存症になるのか、ゲーム依存症を克服するためにはどのようにすればいいかなどを話し合った。ゲーム依存症は、身近な問題でもあり、活発にディスカッションが行われた。



(「ゲーム依存症について」ディスカッションの様子)

(2) 「新聞ポスター」を作ろう

2年次生は、3年次に始まる「課題研究」講座の研究テーマを後期から模索する時期に入る。さまざまな取り組みの中で自分の興味と関心のあるテーマ、さらに進路実現と進学後の研究テーマにもつながることは何かについて、頭を悩ませ始める時期である。幸い本年度はNIE指定校となり、多くの新聞を提供していただけたことで、生徒が新聞を通して社会に目を向け、自身に向き合う契機となったと感じている。

2年次生は週1時間「リサーチⅡ」の講座を、約20人1講座で受講しており、前期は論文作成のノウハウを学び、後期前半は「新聞ポスター」作りに取り組んだ。本来はグループでテーマを決めて作成することが望ましい取り組みであるが、コロナがまん延する状況下では感染予防の見地から困難であった。そのため、個人でテーマを決めて「新聞ポスター」を作成することとなった。

授業のねらい

- ①新聞記事の中から、テーマに沿った記事を探し出す目を養う。
- ②新聞記事を読解し、要旨をまとめる力を身につける。
- ③課題研究に向けて、自分のテーマを模索する。また、その情報収集方法を知る。さらにテーマに沿った意見文を書く。
- ④「SDGs(持続可能な開発目標)」の17分野から選んだテーマに関する新聞記事を選び、その記事に対する考えを意見文の中で述べる。

学習活動

第1時

- ・新聞を配付。(1人2部)新聞から得られる情報を分類、分析する。新聞は回覧し、なるべく多くの紙面に



触れる。

- ・記事の中から自分が興味をもったものを選び、「SDGs（持続可能な開発目標）」の 17 分野から自分の新聞ポスターのテーマを決定する。

第 2 時

- ・各自のテーマに沿って新聞記事を切り取る。校内の新聞記事では足りない場合は家庭の新聞を持ってくる。（切り取る際には承諾を得ること）
- ・A3×2 のレイアウトを考える。意見文を書くシートのレイアウトも含めて考えること。
- ・時間内に完成しない場合は、宿題として自分の記事にあった写真を探す、イラストを描くなどの指示をする。
- ・時間がある生徒は意見文を下書きする。

第 3 時

- ・意見文を下書きの後、用紙に清書し、記事とともに A3×2 に貼り付ける。
- ・次時に発表する内容を考える。

留意点は、意見文を読むのではなく自分の言葉で発表するということ。

1. なぜこのテーマを選んだか。
2. どのような記事を集めたか。
3. それは SDGs のどの分野か。
4. 自分はどのように考えたか。
5. 今後、研究したいことは何か。



第 4 時

1 人 2 分以内で発表を行う。作った新聞ポスターは提出する。

発表時の留意点

- ・「新聞ポスター」回収後担当の先生が講評を書き、返却。
- ・発表態度も含めて評価を行う。



(SDGs 新聞発表会の様子)

(3) 新聞記者派遣事業

NIE 新聞記者派遣事業として 11 月 18 日（水）午後に時事通信社神戸総局長の丸山実子様をお招きし「働くことと生きること」～海外特派員の経験を通じて～というテーマでご講演いただいた。海外特派員の仕事内容や、派遣先の北京や香港での貴重なご経験をたくさんの方の写真をさせていただきながらお話していただいた。グローバルな視点を持つことの

大切さ、広い視野を持ち、やる気と好奇心を持って取り組むことを教えていただいた。生徒たちにとって、今後の職業選択や生き方について大変参考になった。



(記者派遣事業 講演会の様子)

<生徒の感想より>

時事通信社の丸山実子さんのご講演は、新聞記者になりたいと思っている私にとって、とても貴重な経験となった。

丸山さんが働いていて達成感を感じるのには、自分の記事が新聞やテレビに使用されたり、自分の伝えたことが社会を変えた時だとおっしゃっていた。

今回の講演を聴いて感じたことは、やりがいを見つけることの大切さである。仕事や勉強だけでなく、普段の生活でもやりがいを見つけていくことで、達成感を味わえるのだと思う。働くにあたって大切なことは、「やる気・好奇心・広い視野」を持つことだということを知った。自分が苦しいときでも、周りの人々との交流を通してたくさん影響されて立ち直ったという話を聞いて、仲間の大切さも知ることができた。自分の将来の夢を必ずかなえるため、今日の講演で教えてもらったことをこれからの高校生活に活かしていきたい。

4. 成果と今後の課題

本校の生徒は真面目に課題に取り組む力を持っているが、自分自身の課題や研究テーマを独創的に見つけ出し、ユニークな仮説を立てる力は弱いという印象がある。原因としては、社会の動きに疎いことと、自分の生活圏の出来事や、学習、部活動には熱意があるが、それ以外の出来事には淡白であること、総じて精神的に幼いことなどが考えられる。しかし、新聞記事の中には、さまざまな事柄が詰まっており、若い生徒の感性は必ず何かに感応するはずである。「新聞ポスター」作成と発表を通して、生徒の興味関心が教師の予測を超えることも多くあり、逆に生徒が自身の課題選択の際に迷い、立ちすくむ様を目の当たりにもした。また、友人の発表に刺激を受け、自分のテーマを見直した者もいた。A2サイズ用の紙の中にバランスよく配置されたポスターは人の目を引くが、張られた意見文の中に優れた文章もあり、新聞記事を通して深い洞察を得たことがうかがえた。班ごとに作成する壁新聞の意義も捨てがたいが、こうした状況下で自身と静かに向き合い、作業することにも大きな意義を感じた。

本年度は、教科「情報」と「総合的な探究の時間」の活用であったが、2021年度は「課題研究」をはじめ、多くの教科で活用、実践し、生徒が日々新聞に親しみ「地域や社会を知る」取り組みをさらに深化させることができるように努めていきたい。

現代社会に適応できる力を身につける

兵庫県立多可高等学校 校長 大矢 徹
教諭 盛岡 宗太

1. はじめに

本校は、多可郡にある全校生徒数 221 人の全日制普通科高校である。令和 2 年度は 1・2 年生 2 クラス、3 年生 3 クラスの構成となっており、「福祉のこころを育み、自立して未来に挑戦する生徒を育てる」を教育方針として掲げている。NIE 実践校に指定された 1 年目のテーマとして、まずは新聞に触れる機会をつくり、情報を知り、活用することで、日々変化する現代社会に適応できる力を身につけさせていきたいと考えた。

2. 新聞の置き場と整理の方法

多くの生徒や職員に閲覧・活用してもらえるように、往来の多い放送室前に「新聞閲覧コーナー」を設けた。生徒には事前に案内を配った。閲覧コーナーの机には、その日の 1 面の記事が見えるように新聞を配置した。

また、その日の中で、生徒に最も知ってもらいたい記事内容を担当教員が選び、机の横のホワイトボードに掲示した。



また、12 月に人気漫画「鬼滅の刃」の全面広告が全国紙 5 紙に掲載された際、その 5 紙の購読期間と重なっていたことから、少しでも新聞と生徒との距離感を縮めようと、職員室前廊下に掲示し、興味関心を引くよう工夫した。普段から新聞に触れる機会が乏しいため、まだまだ数は少

ないが、立ち止まって新聞記事に目を通す生徒や新聞記事について質問してくる生徒も見受けられた。

3. 実践の内容

(1) アンケート調査

日ごろから新聞に触れる機会をどれほど持っているかなど、生徒の現状を知るために 1 年生 (75 人) と 3 年生の一部の生徒を対象にアンケート調査をおこなった。

Q.日ごろ、国内外の情報(ニュース)をどのような方法で入手しているか?

- ①インターネット (51%)
- ②テレビ (47%)
- ③新聞 (3%)

Q.あなたの家は新聞をとっているか?

- ①とっている (59%)
- ②とっていない (38%)

Q.最近、新聞を読んだことがありますか?
(家庭・学校問わず)

- ①全く読まない (46%)
- ②ほとんど読まない (36%)
- ③ときどき読む (15%)
- ④毎日読む (3%)

Q.現代社会で起きていることについて、詳しく知りたいと思うか?

- ①知る機会があれば知りたい (72%)
- ②あまり興味がない (23%)
- ③とても知りたい (5%)

結果から、新聞をとっている家庭は約 60% と予想よりも高かったが、「情報の入手方法」ではインターネットやテレビがやはり多く、新聞から情報を得るといふ生徒はわずか 3%

しかおらず、「新聞を毎日・ときどき読む」と回答した生徒も20%未満であった。

一方で、70%を超える生徒が「現代社会の出来事を知る機会があれば知りたい」という回答をしていた。

このことから、地歴公民科を中心に、各教科の先生方の協力のもとで、新聞に触れる機会を授業や課題で設定し、新聞に対する抵抗感を減らしていくところからスタートすることにした。また、各授業の進度に応じて、グループワークなどを活用し、新聞で得た情報を読み解き、意見交換をるところまで進めた。

(2) 授業での取り組み

アンケート調査でつかめた生徒の実情から、各授業で以下のような取り組みをおこなった。

①現代社会

1年生の現代社会の授業では、新聞を読む機会が少ない生徒も多かったため、生徒が選んだ新聞の中から、気になる記事をピックアップして、その内容をまとめたり、記事に対する意見・感想を書かせたりと、新聞記事に触れる機会をつくった。

授業の最初は、新聞を読むことに抵抗感を示す生徒も多かったが、次第に、「このニュース見たことある」「これってどういうことですか?」といった声や質問も上がり始め、生徒同士で議論に発展しているところや、他に気になる記事はないかを探し始める生徒も出てくるなど、新聞に対する抵抗感も徐々に減っていた。



～現代社会 授業風景～

②政治経済

3年生の政治経済でも、現代社会と同様の取り組みをおこなった。ここでも、1年生と同様の反応がみられ、特に就職試験を控える生徒は面接対策として、入試で小論文試験がある生徒はその対策として、その題材となるニュースを見つけようと必死に記事を探す姿が見られた。

また、限られた時間の中でも情報を仕入れる力が少しでも身につけばと考え、2学期の定期考査に時事問題として、実際に新聞記事を抜粋して載せ、その記事からわかることを答えさせた。



～政治経済 授業風景①～



～政治経済 授業風景②～



～介護福祉基礎 授業風景①～

③福祉

介護福祉基礎の授業で「障害者や高齢者の避難所」についての新聞記事を読み、地震などの災害時に、自分たちには何ができるか、障害者の方の気持ちはどのようなことが考えられるか、などをグループで考えた。

グループワークでは、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由で車いすの方の3パターンで考えた。

話し合った内容

1	グラウンドまでの避難途中、どのようなことができるか
2	多可高校の体育館が避難所となった時、どのような配慮ができるか
3	一緒に避難したり、避難所で生活をしたりしているとき、どのような気持ちが考えられるか

授業で学習した内容を取り入れながら話し合うことができていた。新聞記事を読んでからグループワークに入ること、現在の状況を知り、イメージがしやすかったのではないかと思う。

また、多可高校という自分たちが過ごしている場所で考えたため、避難誘導の道や体育館の中など、どのような支援ができるか具体的に考えることができていた。

今後も、新聞には福祉についてさまざまな分野の記事が載っているので、いろいろな形で活用し授業に取り入れていきたい。



～介護福祉基礎 授業風景②～

④理科

理科では、生物基礎の授業において、「ミトコンドリア病」についての新聞記事を読み、感想を書かせる取り組みをおこなった。記事では、法律に関することが主に取り扱われていたが、受精卵の核移植の技術に関する知識や、倫理上の問題点なども書かれていた。

記事の内容は生徒にとっては難しく、よくわからなかったと書いている生徒もいたが、ほとんどの生徒が自分の言葉で感想を書くことができた。特に、倫理上の問題に触れながら自分の意見を書いている生徒が多く、普段の授業であまりおこなえていない活動をおこなうことができた。

今回は教員が記事を選んだが、今後は生徒が自ら選んだ記事をまとめさせ、発表させることも検討している。

⑤国語

3年生の国語表現の授業では、1学期に興味・関心のある記事を読み、それについて考えを深め、感想文をまとめ、各自の進路実現に役立てた。その作文を新聞感想文コンクールに応募した。また、自分の将来や社会についての考えを簡潔にまとめる練習をしたところ、若干名の生徒が新聞の読者欄に投稿し、広く発信した。



～国語表現 授業風景～

(3) 記者派遣事業

兵庫県NIE推進協議会の記者派遣事業を利用して、産経新聞神戸総局姫路駐在小林宏之氏に「NIE講演会～新聞に目を向けて～」というテーマで、1年生を対象に講義をいただいた。

講義では、自身の取材内容から新聞業界の現状にいたるまで、さまざまなトピックについてお話しいただいた。

<生徒の感想>

- ・同じ問題についての記事でも、表現の仕方が変わるだけで受ける印象が違うんだと感じた。
- ・新聞の紙面構成について、新聞は「どれも同じ」ではないんだなということが分かった。新聞記者は自分で情報を得て、自分の書いたことが色々な人たちに読まれ、時には社会を動かすと聞いて、それだけ新聞記事には影響力があるのだなと思った。
- ・インターネットとは違う新聞の魅力や各新聞の個性を説明されており、新聞への愛が伝わった。

4. 成果と今後の課題

「現代社会に適応できる力」を身につけさせるために、NIE実践1年目は、現代社会で起きていることを知ることから取り組みを進めてきた。

課題としては、特定の生徒以外は、学校の閲覧コーナーの利用率も低く、まだまだ生徒たちの新聞活用は進んでいないというのが実情である。しかし、授業や課題などで新聞を読んだり、その記事内容について考え、話し合ったりする場を設けると、非常に多くの生徒が興味関心を示し、家庭でも最新のニュース内容について家族と話すという生徒も多かった。

また、アンケートで「今後、新聞を活用する取り組みを進めるとしたら、どんなことがしたいか?」という問いを投げかけたところ、「自分たちで新聞を作る」「記事内容についての討論」といった回答が多く返ってきた。

実践2年目に向けては、こういった生徒たちの要望も踏まえて、新聞に触れる機会を提供し続けるとともに、現代社会で起きていることに対して、新聞づくりを通じてより深く知り、討論などに取り組むことで一つの出来事を多面的にとらえる練習をしていきたいと考えている。

また、卒業後に就職を控える生徒も多いため、NIE実践を通じて、進路実現にも役立てることができればと考えている。



～NIE講演会の様子～

NIE を活用した 課題発見・課題解決能力育成のための探究活動

兵庫県立神戸高塚高等学校 校長 仲山 恵博
教諭 伊東 琢磨

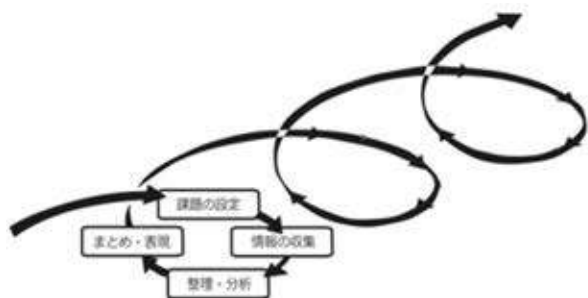
1. はじめに

本校は創立 37 年目の全日制普通科高等学校です。令和 2 年度より、本校の特色類型を“将来様々な分野でリーダーとして社会に貢献する人材を育む”「スポーツ・ボランティア・科学探求」類型から、“地域社会の諸課題を発見し、解決しようとする姿勢を育む”「地域創造」類型へと改編し、特色ある活動を行っています。

また本校では、令和元年度から新学習指導要領の「総合的な探究の時間」が先行実施されるのに伴って、1 年「探究基礎・特色探究基礎」、2 年「探究Ⅰ・特色探究Ⅰ」、3 年「探究Ⅱ・特色探究Ⅱ」を設定し、探究活動を計画的に行っており、本年が 2 年目となります。

2. 本校の探究活動の概略

本校の探究活動では、「課題の発見・設定」「情報の収集」「情報の整理・分析」「まとめ・表現」の「探究プロセス」を繰り返すことで、「正解のない問い」に取り組もうとする姿勢や、より深く考える力を育成するようにプログラムを組んでいます。



(高等学校学習指導要領解説 総合的な探究の時間編より)

1 年生では、1 学期に「自己と他者を知り、自分の意見を表明する」ことを目的として 1 分間スピーチを行い、発表時の基本的スキルの重要性を認識します。夏季課題として新聞などから自分の気になった世界や日本社会、地域社会の諸課題について情報を収集します。2 学期に個人で集めてきた情報を元に班として情報を整理・分析し、諸課題について班で発表します。3 学期に、諸課題についての解決法についてさらに探究し、発表します。一連の「探究プロセス」を他の班員と協働して体験します。

2 年生では、1 年生の時に班として複数の人間で行った「探究プロセス」を、個人で再度経験します。個人の興味・関心・進路に応じて「探究テーマ」を設定し、1 年をかけて「探究プロセス」に従い探究活動を行います。分野別に 10 のゼミに分かれ、1 年をかけて探究します。探究した内容は、3 月実施の探究Ⅰ発表会で発表します。本年度は、コロナ対策で発表者を少なくし密にならないように実施したため、選抜された生徒が、1 年生全員と 2 年生の選抜されなかった生徒の前で発表することとなりました。

3 年生では、1 学期までに 2 年生の 1 年間で探究した内容を文章化します。レポートや小論文の形式を学び、自分の意見を文章で表現することを学びます。

2 学期は、進路に応じてゼミを再編成し、2 年からのテーマをさらに深く探究したり、新たな探究テーマを設定して 3 度目の探究プロセスを体験したりして、最後に発表します。3

学期には3年間の総まとめとして探究活動を振り返ります。

本校の3年間のプログラムは、「内容知」を大切にするのはもちろんながら、同じプロセスを何度も繰り返すことで、「方法知」を身に付けることに主眼を置いています。

3. 探究基礎・特色探究基礎での取り組み

「総合的な探究の時間」導入初年度である昨年度はNIEを導入することができませんでした。そこで生徒個人で新聞などを活用するように指導しましたが、2年目の本年度にNIE実践指定校に選出され、新聞を探究活動に活用することができました。コロナ禍による休校措置で予定が大幅に変更となりましたが、7月と9,10,11月に6紙を毎日提供していただきました。1年生は5クラス編成で、特色類型30人がいますので、ちょうど6紙を毎日新聞社を変えて、6教室へ配付し、いつでも読めるようにしました。(写真参照)



「探究プロセス」の「課題の発見・設定」「情報の収集」のステップに6紙の新聞を活用することができるのは非常に大きなメリットです。

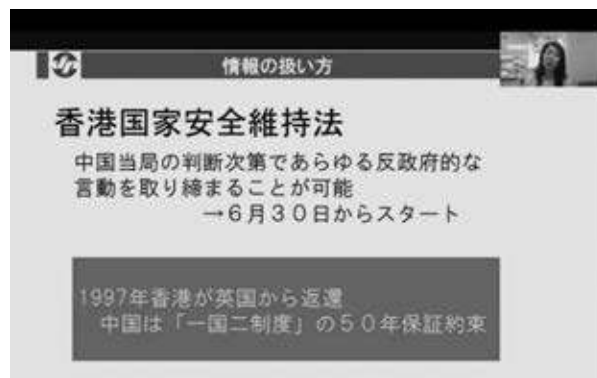
現代社会に何が起きているのか、自分の所属している地域社会にどのような課題が存在するのかを新聞記事を通して見つけ出します。同じ題材でも、情報の扱い方やアプローチの仕方が6紙で違って、どのように題材を切り取り、どの観点から何を伝えているのかを比較するこ



とは、多角的な視野を得るのに非常に役立っています。

また、新聞記事を読むときには「事実」と「意見」の違いに着目して、情報を整理・分類したりする方法について学びます。記事の中でも表現の方法によって「事実」を伝えているのか、新聞社や新聞記者の「意見」を伝えているのかを区別できる力を身に付けられるようにします。「意見」と区別した「事実」に基づいて実際に何が起きているのかを理解して、判断する力を身に付けます。インターネット上の情報やテレビ・新聞等の大手メディアの情報を鵜呑みにすることなく、自分で判断し活用できるように、複数のメディア、情報ソースによる情報の信ぴょう性の確認、出典の重要性等に焦点をあて、玉石混交の情報をどのように扱うかについて学びます。

また、兵庫県NIE推進協議会の記者派遣事業として、兵庫県NIE推進協議会事務局長兼神戸新聞NIX推進部シニアアドバイザーの三好正文氏、時事通信社神戸総局長丸山実子氏を特別講師にお迎えして、情報の扱い方や新聞の役割についてZoom録画特別講義をYouTube上で本校生徒限定公開で実施し、1年生全員が受講しました。



1年生の2学期以降は班で探究活動を行うので、教員のアドバイスを受けながら他の班員と協働して、意見を交換しながら多面的に情報を整理・分析することを学びます。

このプロセスで、他の人の意見を聞き、新しい視点に触れて生徒は、一つの事実を多面的に捉えることを体験することになります。



こうした作業を経て、2学期最後に各班で見つけ出した諸課題について、まとめ、発表をします。本年度については、ポスターでの発表としましたが、今後はICT機器の活用も計画しています。



3学期には、2学期で見つけ出した諸課題についての解決策や対処法について、様々な情報に基づいて探究し、まとめ、発表しました。これで同じ題材を用いて、2度「探究サイクル」を経験したことになります。

4. 探究Ⅰ発表会

昨年度から始めた「総合的な探究の時間」ですが、今年度、2年生は「探究Ⅰ」（総合的な探究の時間）で、個人で設定した「探究テーマ」について、再度「探究サイクル」を経験しました。

1学期はコロナ禍でほとんど活動できませんでした。2学期末に中間発表が行われ、そこで指摘された問題点や、指導教員やゼミ内の

他の生徒からのアドバイスを活かして探究活動を続け、最終発表を2月にゼミ内で行いました。

3月には、コロナ禍で密になるのを避けるため、各ゼミの代表者60人が15教室に分かれて1年間の活動の成果を発表しました。1年生198人は聴講希望によって、2年生175人は他ゼミの生徒の発表を聴講できるように配置されて、一人ひとりの興味・関心、進路に応じて設定された探究テーマについての発表を聴講しました。

1年生は、「探究プロセス」を複数の班員と協働しながら経験し、探究の基礎スキルを身につけた上で、堂々と発表する先輩たちの姿を見て、2021年度に何を自分はすることになるのかを具体的にイメージします。

2年生の特色類型の生徒が司会とタイムキーパーの役割を果たし、生徒によって運営された発表会となりました。

5. 生徒アンケート

2学期末に実施しました1年生対象のNIEに関するアンケートの結果は次の通りです。

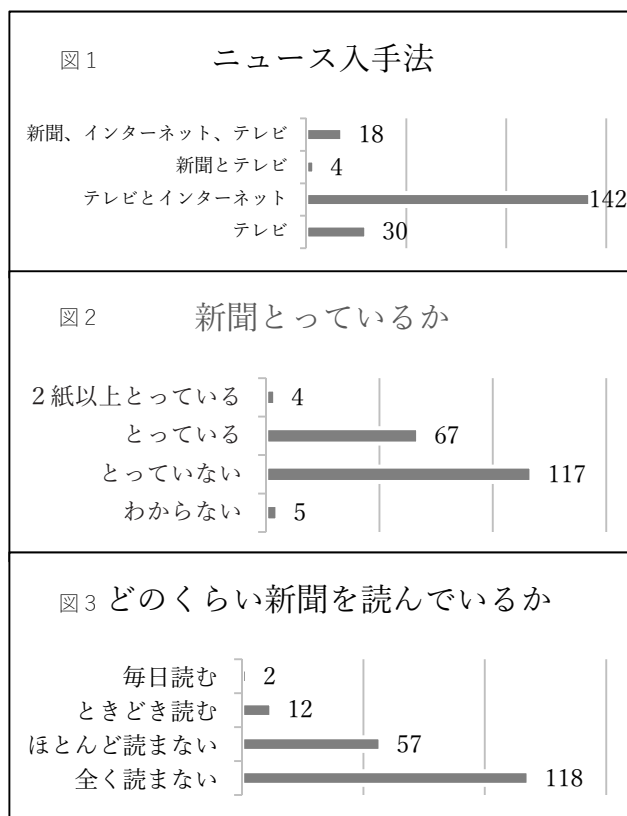
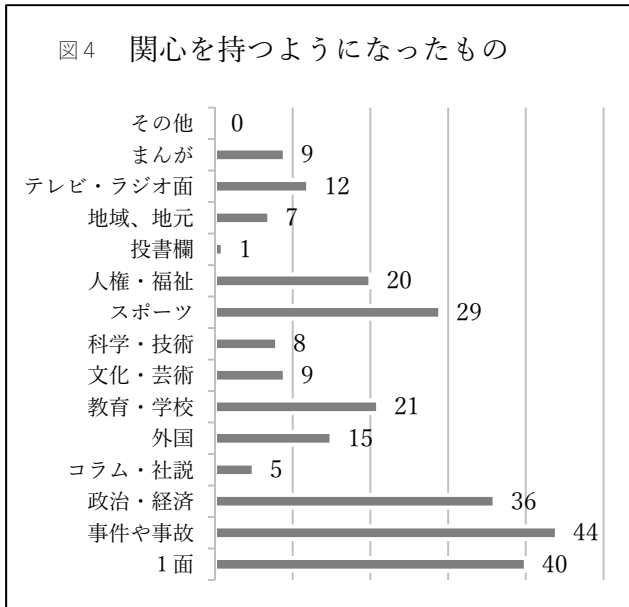
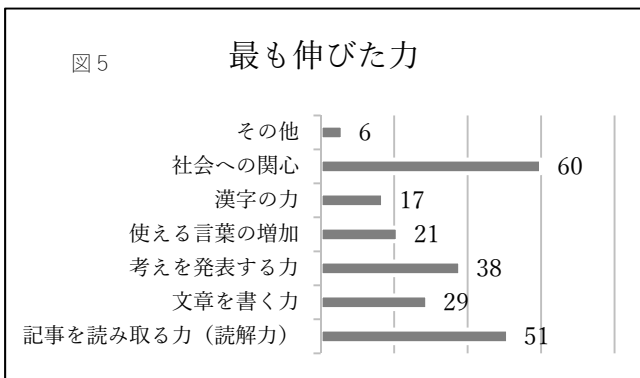


図1によると、ニュースの入手法は、テレビとインターネットが73%で、新聞は11%となっています。図2から新聞をとっている家庭は36%あります。ですが、新聞を読んで情報を得ている生徒は7%と少ない数字になっています。



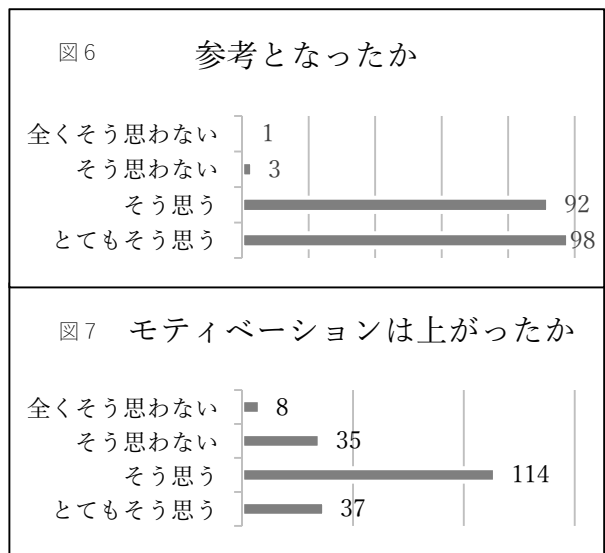
新聞を読む習慣がなかった生徒が、読むようになったとは言えませんが、図4から、1面、事件や事故、政治・経済、スポーツ、人権・福祉に関心を持つようになった生徒が多くみられたことは大きな収穫となりました。



また図5から、NIEの活動を通して社会に関心を持つようになり、記事を読み取る力が身について、考えを発表することができるようになったと感じている生徒が多くいるようです。

また図6、7は、探究I発表会に関する1年生のアンケート結果の一部です。

2年生の堂々たる発表を聞き、自分たちが



来年度に何をやるのかしっかりと認識できたと思われます。1年生にとって、2年生の発表がよい刺激になったと言えるでしょう。

6. 最後に

新学習指導要領の先行実施として総合的な探究の時間を一昨年度から始めました。

この授業では、

- 1) 自分の所属する社会・地域への興味関心
- 2) そこにある課題を発見する力
- 3) 情報を収集・整理・分析する力
- 4) 班員と協働して作業をする力
- 5) 自分たちの考えをまとめて発表する力

などの育成を目的として、探究活動を計画的に実践しています。

3年間の探究活動の初年度に新聞を活用して探究活動の基礎となる力を身に付けられるように取り組んできました。情報の多くをテレビ、インターネットから得て、新聞を目にする機会が減ってきている生徒にとって、6紙もの新聞に4カ月間触れられるこの機会は非常に貴重なものといえます。

今後もテレビやインターネットだけでなく、新聞、書籍等を利用して上記の力を育成できるように、実施しているプログラムを改良、改善して取り組んで、よりよい探究活動を生徒に提供できることを目指します。

「総合的な探究の時間」における新聞の活用

～『新聞ワーク』を通して SDGs のテーマに対する理解を深める

兵庫県立兵庫高等学校 校長 升川 清則
教諭 佐井 琳

(1) 実践概要

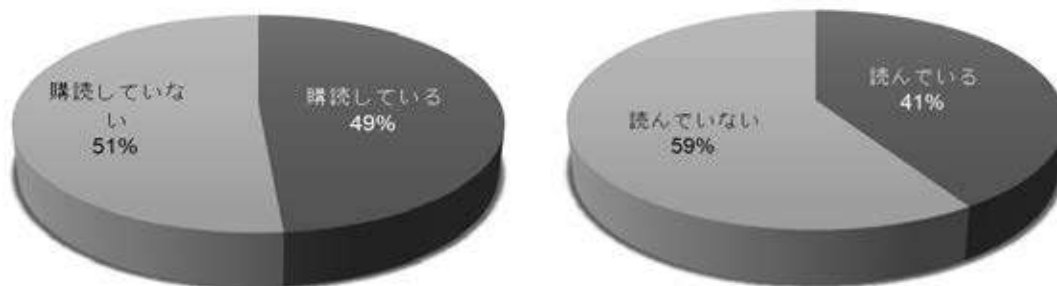
令和2年度より本校では、「総合的な探究の時間」の授業を先行実施する事になった。SDGsのテーマに沿った実践活動を通じて、教科横断的な教養と幅広い視野、地域の社会課題を協働して解決する力、自身の意見や考えを表現する力を養う事を目標とするカリキュラムの開発・実践を行った。

本校における第2学年の「総合的な探究の時間(1単位)」では、SDGsに掲げられている世界規模の社会課題を身近な地域の社会課題に置き換え、世界と地域を結び付けて探究学習を実践するために、各教科での学びを、実社会と結び付け、課題解決に必要な教養を深める事を目的として、講座の導入において新聞を活用した「新聞ワーク」を実施した。講座では生徒が各個人で興味のあるSDGsのテーマを選択し、それに関する新聞記事について考察、グループでの情報交換を行い、さまざまな視点からの新聞記事の分析を行った。なお、SDGsのテーマについては本校独自でA～Jの10分野に分類している(表1)。以下の図1は授業実践前に生徒向けに実施した事前アンケート調査結果の一部を抜粋したものである。全体の約50%の生徒が自宅で新聞を購読しており、さらに購読している生徒の中の40%程度が定期的に新聞を読む習慣があると回答した。これらの結果から、本校の生徒の中で新聞を読む習慣のある生徒は多くない事が分かる。

表1. SDGsのテーマに基づく分野

分野	SDGsの17のテーマ
A	1.貧困をなくそう 2.飢餓をゼロに
B	3.健康と福祉
C	4.質の高い教育をみんなに 5.ジェンダー平等
D	6.安全な水とトイレ
E	7.クリーンエネルギー
F	8.働きがいも経済成長も 9.産業と技術革新の基盤をつくろう 10.人や国の不平等をなくそう 11.つくる責任つかう責任
G	12.住み続けられるまちづくり
H	13.気候変動 14.海の豊かさを守ろう 15.陸の豊かさを守ろう
I	16.平和と公正をすべての人に
J	17.パートナーシップ

図1. 自宅で新聞を購読しているか (自宅で購入している) 新聞を読んでいるか



(2) 「NIE 新聞コーナー」の設置

本校では6月～7月の2カ月間、NIE 事業による新聞提供を受け、「新聞ワーク」の活動で活用した。授業だけでなく、普段から生徒が日常的に新聞を手に取り自由に閲覧できるよう、講堂前にあるコモンホールの一角にスペースを設け、「NIE 新聞コーナー」とした(写真1)。机と棚を設置し、「本日分の新聞」を机に平置きに、1週間分のバックナンバーを棚に配置し、探究学習の調べ学習に活用しやすいよう工夫した。(写真2)

写真1



写真2



(3) 第2学年「総合的な探究の時間」における授業実践

普通科第2学年244人を対象に、探究学習の導入としてSDGsのテーマに対する知識を深めるとともに、課題設定力、表現力、情報収集力を育成するために「新聞ワーク」を実施した。事前に生徒へ向けて表1の希望分野調査を行い、全10分野に分かれた。分野ごとに教室を割り当て、各教室に2人の担当教員を配置した。教員はファシリテーターとして機能し、生徒が主体となり活動を進めた。「新聞ワーク」は個人で新聞記事を考察するワークシート(資料1)作成の時間と、情報共有及び意見交換のための発表の時間の2展開を1セットとして計3回行った。

写真3

写真4

<授業イメージ>

①ワークシートの作成(写真3)

②発表(写真4)

*①、②を繰り返す。



①ワークシートの作成

新聞記事は生徒各自で授業までに準備するよう指示をした。資料1(左)のように、ワークシートの表面に新聞記事の内容を要約し、批判的に読み解き、考察した。更に、記事に関するキーワードを掘り下げ、SDGsの分野への理解を深めた。その際、必要に応じて各自スマートフォンを使い、インターネット検索を行った。ワークシートの裏面には発表用に該当記事を貼り付けた。授業の最後に、生徒は本時の取り組みについて、ワークシートに示されたループブックを基に自己評価を行い、その評価を同じくワークシートに記載されたQRコードでweb入力し、個人の学習活動についての記録を残した。

②ワークシートの発表

前時に作成したワークシート(資料1)を4～5人の少人数グループで、1枚10分程度でお互いに回し読み、情報共有をした。ふりかえり用シートとコメントシートを準備し、発表を行った。ふりかえり用シートには回し読みで得た情報を記入し、コメントシートにはワークシート作成者へのアドバイスや感想を記入した。授業の最後にコメントシートを交換する事で、

自身の取り組みについて客観的にふりかえる機会を設けた。さらに、班内で回し読みをしたワークシートと記事の感想を1人1分程度で発表し、班ごとにベストレポートを選出した。評価については「①ワークシートの作成」と同様の手順で行った。

資料1. 生徒が作成したワークシートの一例

The image shows two examples of student-created worksheets. The left worksheet is a detailed report with handwritten text, a QR code, and a table with columns for 'Review', 'Sub-questions', 'Experience', and 'Advantage'. The right worksheet is a report with a circular chart showing survey results for '2996 people' and includes a title '高知列「暑さ祭り」2回 昨年2996人、大阪府調査'.

資料2. 指導案 (①ワークシートの作成)

The image shows a lesson plan table for a 74-student class. The table has three columns: '時間' (Time), '生徒の動き' (Student movement), and '教師の動き' (Teacher movement). The activities include 'ワークシートを配布', 'ワークシートを回収', and 'ワークシートを提出'. The teacher's actions include 'ワークシートを回収' and 'ワークシートを提出'. The student's tasks include 'ワークシートを回収' and 'ワークシートを提出'.

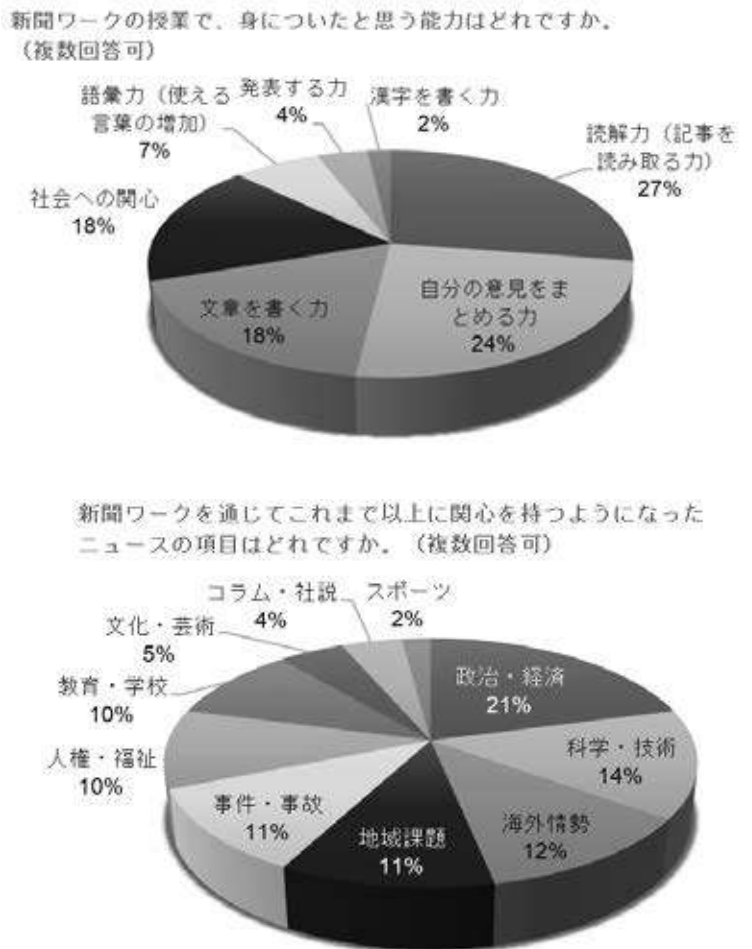
資料3. 指導案 (②ワークシートの発表)

74期生 第5回 総合的探究の時間 (略案)		
日時：7月6日(月曜日) 6期日 場所：2年1組～2年1B、401教室 準備：新聞ワーク用ワークシート、新聞ワーク用おまかせシート、 新聞ワーク用コメントシート、コメントシート ※教師の動きの中で、アンダーラインのある箇所は副担任・学年科で担当してください。		
時間	生徒の動き	教師の動き
14:05	●ワークシートに着目 ●活字確認 ●ワークシート(提出した生徒)を振り分けシート、コメントシートを受け取る。	●活字確認 欠席者がいる場合は、4人以上の組になるように入組から入替動をさせて下さい。 ●ワークシート、おまかせシート、コメントシートを配布 (前回と内容が異なる場合があります)
14:10	●おまかせシートを確認する	●本時の内容・留意点 ①本時の流れについて →1枚あたり10分。その間に、「ワークシートを読む」「おまかせシートの記入」→4組を回り「コメントシートの記入」を行う。 →コメントシートにはおまかせシートに書いたことを転記する。 →10分×3回行う。 (4人以上の組については、1人あたり3枚のワークシートを読む)→授業の最後に戻し読みをした記事の全体の感想について1人1分程度話す。その後、グループ内でベストレポートを1枚選出する。 →最後に、コメントシートの交換を行う。
14:15	●同じ読みグループを再確認し、ワークシートの交換をする。	●同じ読みの開始を指示(10分×3回) →同じ読みグループを確認し、ワークシートを確認するよう指示。 →時間を測り、10分後にワークシートを交換する指示を出す。 →各組の開始の合図は、生徒の準備ができています。様子を確認してから出す。
14:45		●ベストレポートを選ぶ。 →1人1分程度で話し読みをした記事の感想を述べる。 →ベストレポートを選出し、グループに理由を記入し貼る。 ●同じく感想の共有をさせる →1人1分程度で組内感想を共有させる。 →アメンを配布し、選出したベストレポートに関する理由を記入し貼らせる。
14:50	●本時のまとめ →コメントシートを交換する。 →本時の自己評価を行う。	●本時のまとめ →コメントシートを交換させる。 →本時の自己評価について、スリッパを元にワークシート右上のQRコードを読み取り、入力させる。 (QRコードの読み取りが難しい生徒にはURLを授けて入力させる)
	●ワークシートの回収	●同じく、新聞ワークのワークシート、おまかせシートを分けて回収
	●本時の確認	●本時の確認 持ち物：筆記用具(ペン・鉛筆を各自)、新聞、健康マニキュア 連絡：本日の授業は新聞(レポート作成の時)の授業についておく。 ※401教室の生徒については、次回(7月20日)まで行えることを確認する。

(4) 成果と今後の課題

授業実践後の生徒アンケートより、「新聞ワークを通じて自身の教養や知識を増やすことができた」に関して、全体の84%の生徒が「思う」または「やや思う」と回答した。図1で示したように、授業実践前は「自宅で新聞を購読している」かつ、「新聞を読む習慣のある」生徒は全体の約20%程度であったが、新聞ワークを通じて多くの生徒が新聞を手に取り、教養や知識を身に付けることができた。また、図2で示すように時間をかけて新聞記事を考察したことにより、情報収集力や表現力などのスキル面だけでなく、さまざまな分野に興味・関心を広げることができた。これらの成果は、2学期以降の研究活動にも生かされており、一部の生徒は文献調査や情報収集の際に、ウェブ媒体だけでなく新聞を活用する姿も多くみられた。今後は「新聞ワーク」だけでなく、研究活動で新聞を活用する生徒数を増やせるよう工夫したい。

図2. 授業実践後の生徒アンケート (一部抜粋)





Newspaper in Education

◇教育に新聞を◇

2020（令和2）年度
『兵庫県 NIE 実践報告書』

－2021（令和3）年5月発行－

兵庫県 NIE 推進協議会 編

〒650－8571

神戸市中央区東川崎町1－5－7

神戸新聞社読者本部内

電話 078(362)7054 ファクス 078(362)7424

E-mail hyogo-nie@kobe-np.co.jp

HP <http://www8.kobe-np.co.jp/nie/hyogo/>

「教育に新聞を」実践 中学校・高等学校編

◇デジタルデバイスが普及する中で、日常的に「新聞」を読み、
問題発見解決力と思考力、異文化理解力を身につける

(愛徳学園中・高等学校)

◇NIEによるメディアリテラシーと発信力の育成

(蒼開中学校・高等学校)

「教育に新聞を」実践 中学校編

◇新聞による深い学びの育成

(猪名川町立中谷中学校)

◇NIE ノートを通して、わかる世界と変わる自分

(西宮市立浜脇中学校)

◇新聞を活用した実践的授業の取り組み

～メディアリテラシーを通じて新聞の役割を考える～

(兵庫教育大学附属中学校)

「教育に新聞を」実践 小中学校編

◇「つくる」と「つかう」が未来を拓く

～新しい学校・新しい生活様式におけるNIEの推進～

(姫路市立豊富小中学校)

「教育に新聞を」実践 小学校編

◇新聞をさまざまな場面で活用した教育実践 ～新聞から多面的な見方・考え方を養う～
(神戸市立六甲アイランド小学校)

◇新聞に親しもう ～新聞を活用し、表現できる子の育成～

(洲本市立鳥飼小学校)

◇主体的、対話的で深い学びを新聞でも

(淡路市立志筑小学校)

◇新聞って何が書かれているの？ ～読み比べ、「本質は何か？」を見抜く～

(伊丹市立天神川小学校)